

袋井市考古資料集 第1集

袋井の前方後丹墳

—袋井の首長墓を考える—

1993

袋井市教育委員会

例 言

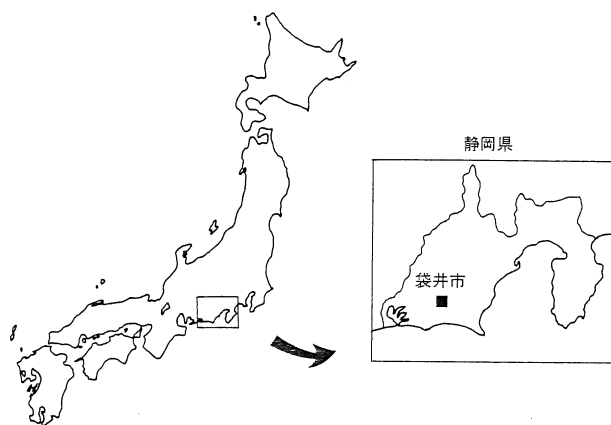
1. 本書は、平成4年度までに判明している、袋井市域の前方後円墳等の首長墓の資料をまとめた考古資料集の第1集である。
2. 本書の、編集は松井一明が行った。原稿の執筆・図版の作成などは松井・白澤崇・加藤理文が行い、その分担については各文末に示した。
3. 本書掲載資料のうち、座王権現神社古墳と川会坊主山古墳の測量図作成については網干善教先生米田文孝氏をはじめとする関西大学考古学研究室の学生諸君の全面的な支援を頂くことができた。ここに御芳名を明記し感謝の意を表したい。

参加者は以下のとおりである。(敬称略)

網干善教 米田文孝 藤田奈美枝 広岡孝信 林真理子 上杉彰紀 竹村忠洋 亀元佳苗 大谷宏治
小野秀幸 永井正浩 井上主税 太田宏明 尾柿実 深野信之 南由起 村上大輔

目 次

第1章	は じ め に	1
第2章	古 墳 と は	1
第3章	袋井市の首長墓各説	4
第4章	袋井の首長墓を考える	
第5章	お わ り に	



袋 井 市 の 位 置

※ 題字は杉浦久子さんの筆による。

表・表紙 座王権現神社古墳地形測量図

裏・表紙 川合坊主山古墳地形測量図

—表・表紙の裏ページ原稿—

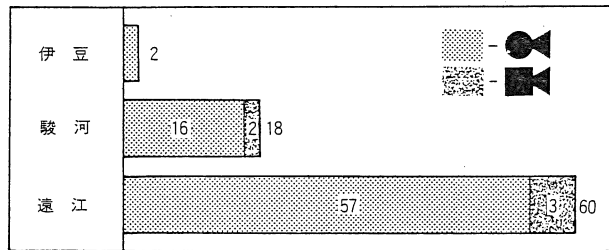
袋井の前方後円墳

第1章 はじめに

袋井市の遺跡の数は、現在判明している限りで約300箇所を数え、その内6割以上が横穴墓群・群集墳であり静岡県下でも有数の古墳群の所在地といえる。しかも、横穴墓群や群集墳ばかりでなく、大門大塚古墳や川合坊主山古墳などの地域の首長墓が存在し、首長墓と古墳群との関連を考えるうえでも興味深い地域であるといえる。

静岡県下での前方後円墳・前方後方墳の確実な数を見てみると約80基を数える。旧国別単位では第1図に示した通り、伊豆2・駿河18・遠江60となり、袋井市を含んだ遠江が圧倒的に多いことがわかる。ちなみに、袋井市では10基を数えこの数は遠江で一番多い磐田市の19基に次ぐものである。すなわち、磐田市の前方後円墳群は古墳時代の遠江

において、最も有力な首長が存在したことを示しており、その権力の周辺部ということで袋井市の前方後円墳の数が多いと考えられるのである。また、遠江において前方後円墳の数が圧倒的に多いのは、畿内から見て遠江は東海道ルート of 東国の玄関口にあたることから、遠江地域の首長層と密接な連携を保つことにより、東国支配の拠点化をめざした畿内政権の政治的意図が働いた結果によると考えられる。



第1図 静岡県下の前方後円墳旧国別集計図

本書では、このように静岡県下でも有数の前方後円墳が所在する袋井市の首長墳のいくつかを紹介し、基本資料を提示するとともに古墳に秘められた歴史的な意義を明らかにし、地域の歴史の解明に少しでも寄与することを目的とする。

(松井 一明)

第2章 古墳とは

「古墳」とはいったいどのようなものをさして古墳と定義づけているのだろうか。一応の定義として、規模の大小は別にして石または土を積上げた墳丘と石室などの埋葬施設をもつ墓とされている。

斎藤忠氏は古墳を定義づけるためには、三つの条件が必要と述べている。①できるだけ大きな墳丘 ②できるだけ立派な棺や棺室 ③できるだけ豊富にそなえた副葬品を持った古代の塚としている。小林行雄氏は「土を高くもった古代の墓を意味する語。高塚ともいう」と述べている。近藤義郎氏は「古墳とは前方後円墳の作られた時代のさまざまな墳墓をさして呼ぶのが妥当」としている。

このように、古墳の定義はさまざまであるが、吉野ヶ里遺跡で見つかった「墳丘墓」は古墳とは呼ばれていない。弥生時代の墓は、どんなに古墳の定義に合致していても古墳ではない。古墳時代に造られた墳丘墓のみが「古墳」と呼ばれている。古墳時代とは、弥生時代に続く3世紀中頃から7世紀までに及んだ時代をさす。

この古墳時代は、大きく前・中・後期に分けられている。前方後円墳の発生する300年頃から、巨

大古墳が集中して築造される400年頃までを前期、巨大古墳が築造されなくなり各地の首長墓に横穴式石室が採用されるようになる500年頃までを中期、被葬者が増大し階層差が出現し古墳が衰退する700頃までが後期とされている。

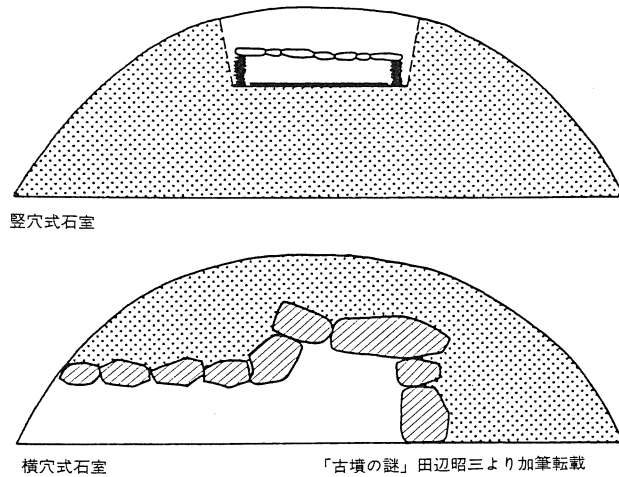
前期の特徴は、①自然地形を利用し山上・丘陵先端・尾根上に築造され②内部構造は竖穴式石室（第2図参照）で割竹形木棺が多く③前半は葺石、後半は円筒埴輪・形象埴輪が一般化し④副葬品は宝器的・祭祀的性格のものが多い。

中期の特徴は、①古墳がもっと巨大化し、副葬品も豊富になり厚葬化し②内部構造は前期と同じ竖穴式石室であり③周濠が定式化し陪塚も造られ④副葬品は鉄器の多量化で、装身具も見られる。

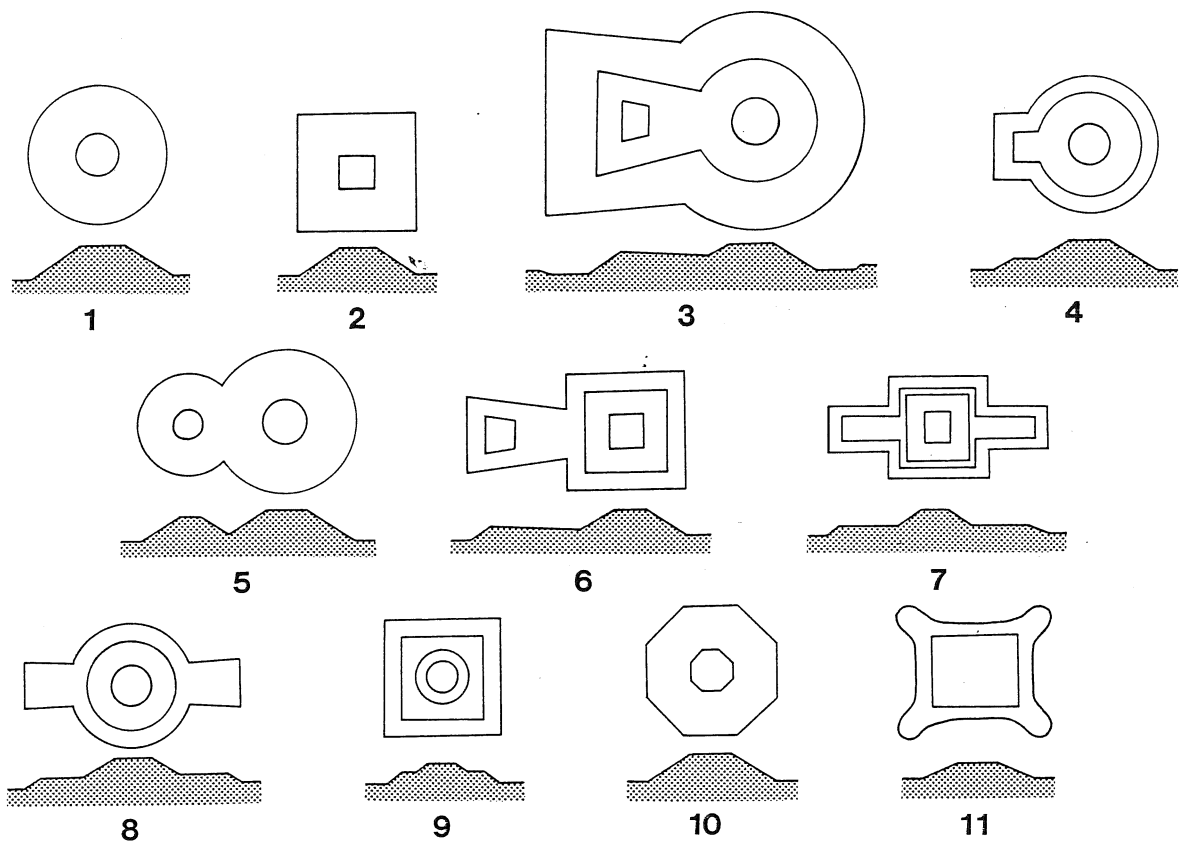
後期の特徴は、①被装者の増大と埴輪が小形化した横穴式石室墳・横穴墓といわれる群集する古墳群（群集墳）の出現にみられるように、階級差がより広い人々まで浸透したこと②内部構造は前代よりの木棺直葬のほか横穴式石室（第2図参照）や山の斜面に穴を穿ち造られた横穴墓などの横穴式の埋葬施設が導入され③副葬品は須恵器の普及と金銅製品・金銀細工・装身具が盛行することである。

古墳の種類と形態（第3図）

- ①円墳 平面形が円形のもので最も一般的なもの。小形のものが多いが、ときには径50mをこすものもある。前期から後期まで継続して作られるが、時期により差がある。
- ②方墳 埴輪の平面形が方形に作られた古墳のことで、埴輪頂の平坦面も方形である。前期から後期まで作られるが、時期により形態差がある。
- ③前方後円墳 円墳の一方に方形の埴輪部が付設されたもので、中部日本以西では4世紀初頭頃から6世紀後半まで、関東では7世紀はじめまで用いられた。この名称は、江戸時代に蒲生君平によって名付けられた。
- ④帆立貝式古墳 主丘に付属する前方部が極端に短く低いもの。平面形が帆立貝に似ることから呼称されている。主丘以外の部分の長さが主丘の何分の1以下をさすのかあいまいで、造りだし付円墳も一括して帆立貝古墳と総称する場合もあり、厳密に使われていない。
- ⑤双円墳 大小二つの円墳を接続させた形で、前円後円墳と呼ぶこともできる。日本では数少なく朝鮮半島の慶州地方に多い。
- ⑥前方後方墳 方墳を主丘とし、その一方に長方形の埴輪部＝前方部を付設した形のもの。前期に多く、後期のものは出雲など限られた地域のみに見られる。
- ⑦双方中方墳 方墳の両側に低く短い突出部を設けたもので、方墳に二つの造りだしをつけたもの。
- ⑧双方中円墳 前方後円墳の前方部を円丘の前後につけた埴輪形。前期に多く見られ双方の長さは異なる場合もある。
- ⑨上円下方墳 埴輪基低部の平面形が方形で、段から上の平面形が円形を示すものをいう。後期に造

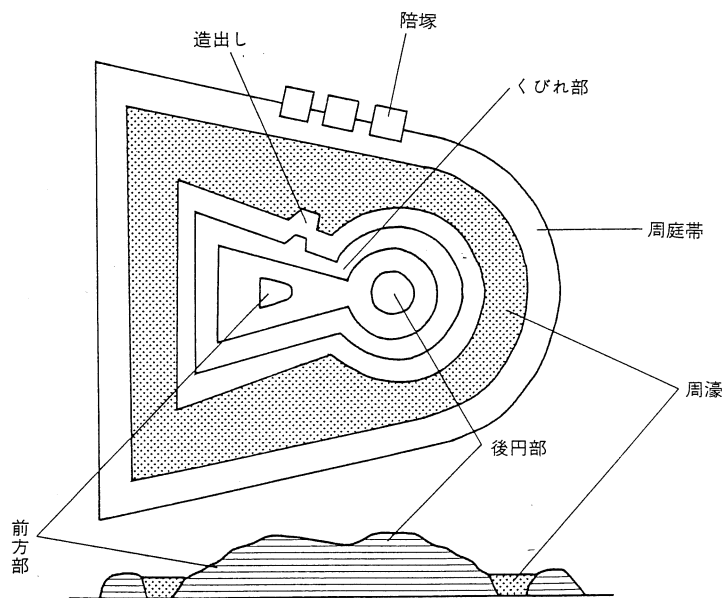


第2図 竖穴式石室・横穴式石室略図



「古墳」 堅田直より加筆転載

- 1 円墳
- 2 方墳
- 3 前方後円墳
- 4 帆立貝形古墳
- 5 双円墳
- 6 前方後方墳
- 7 双方中方墳
- 8 双方中円墳
- 9 上円下方墳
- 10 八角墳
- 11 四隅突出墳墓



「古墳の謎」 田辺昭三より加筆転載

第3図 古墳の種類と前方後円墳各部の名称

られる。

⑩八角墳 平面形が八角形を示す古墳。中国や寺院との関連を考える説もある。ほとんどが、大王墳

・最有力首長の墳墓で後期に造られる。

⑪四隅突出墳 方形の墳丘の四隅に出入口状の突出部があり、墳丘裾と突出部に石張りをするものとし、ないものがある。前者は山陰地方、後者は北陸地方でみられる。これを古墳とみるか、弥生時代的な墳丘墓とみるか意見が分かれている。

参考文献 新人物往来社 1986 『古代天皇と巨大古墳の謎』

田辺昭三 1972 『古墳の謎』 祥伝社

堅田 直 1993 『古墳』 光文社

秋田書店 1978 『空から見た古墳』

都出比呂志 1988 『古墳時代の王と民衆』

袋井市役所 1986 『目でみる袋井市史』

(加藤 理文)

第3章 袋井市の首長墓各説

袋井市で過去の発掘調査や分布調査において前方後円墳とされている古墳をあげると、川合坊主山古墳・八王子寺神社境内古墳・豆塚7号墳・中村南2号墳・宇佐八幡境内1号墳・権現山古墳・浅間山古墳・道ヶ谷9号墳・東山6号墳・東別所1号墳・狐塚古墳・地藏ヶ谷6号墳・大門山13号墳・高尾向山6号墳・長者平A2号墳・同A39号墳・同B5号墳・山本山9号墳・三輪1号墳・雲座B2号墳・同D5号墳などがある。また、今回の測量調査で新たに前方後方墳である座王権現神社古墳、袋井市最大規模になると思われる50mクラスの前方向後円墳である久努大塚古墳が確認された。

このうち、発掘調査内容や測量調査などが実施されており、前方後円墳・前方後方墳として確実に認定してもよい古墳を10基選んで報告することにしたい。また、前方後円墳・前方後方墳のほか首長墓ともくされる円墳の大門大塚古墳・御所森古墳・石ノ形古墳などもあわせて紹介する。

ざ おうごんげんじんじや

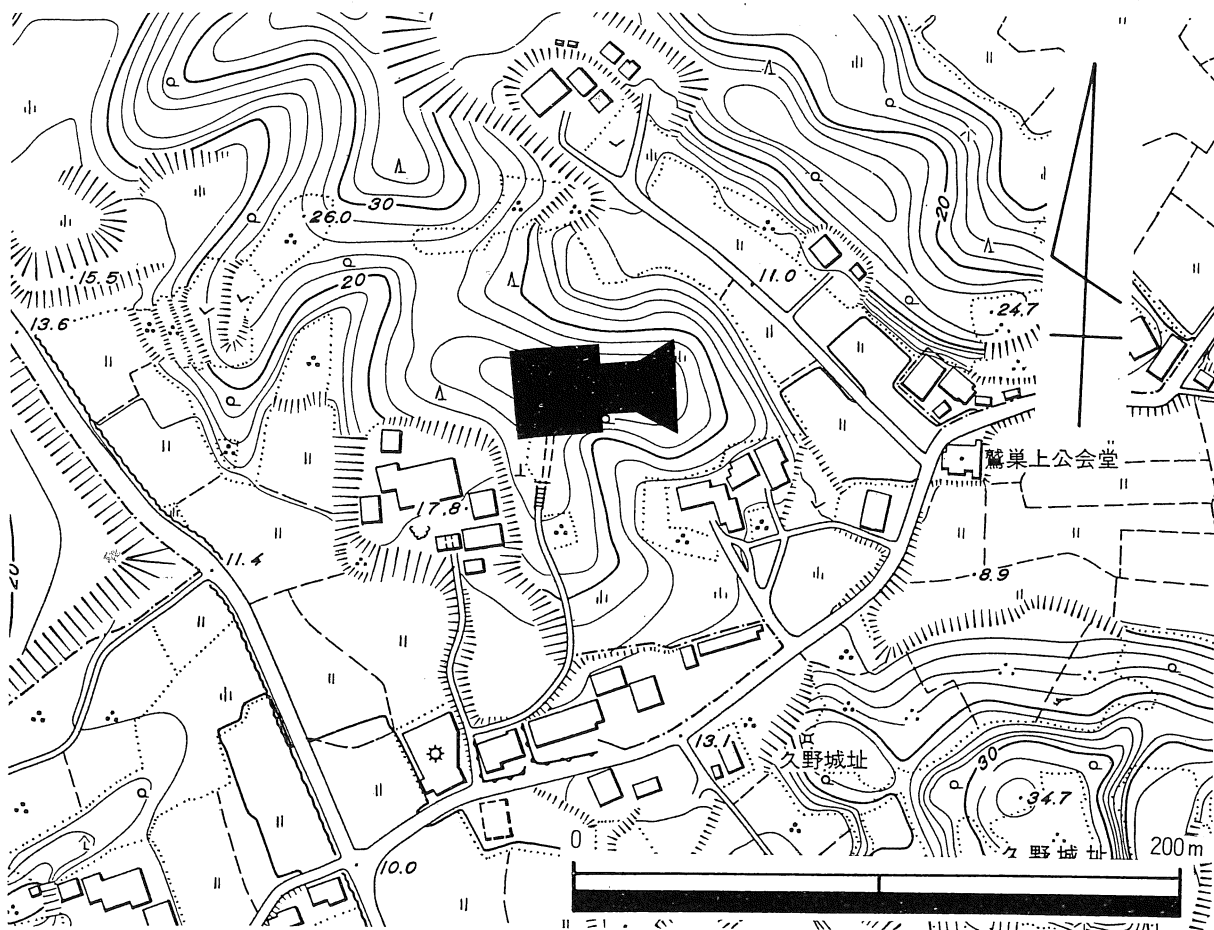
1. 座王権現神社古墳

本古墳は、1983年頃に地元住民たちにより第6図に示した土器が、久野城北側の丘陵頂部に立地する六所神社境内より採集され袋井市教育委員会に届けられた。現地踏査の結果全長50mクラスの前方向後円墳の可能性も指摘されたが、遺跡地名表にも記載されないまま現在にいたった。

本書作成のためかねてより前方後円墳の可能性があった本古墳の測量調査が、米田文孝氏を中心とする関西大学考古学研究室の諸君と袋井市教育委員会学芸員白澤崇氏により1992年8月の約1ヶ月間実施された。なお、本古墳の名称は六所神社境内にあるので六所神社古墳とするべきところであるが、現在の六所神社は座王権現神社であったものが後世に合祀されたことが判明しているため、本来の神社名をとって座王権現神社古墳と命名した。

立地は平野部に面した丘陵の最高位地点標高30m、平野部との比高差17mの地点に築造され、付近に古墳はなく単独墳といっても良い状況である。主軸は東西方向にあり平野部からは墳丘側面を見ることができるが、古墳からの平野部の眺望は南側方向である。

本古墳の後方部は社殿建設のためかなり削平されたうえ北側が山崩をおこし墳丘が大きく変形していたことから、測量調査前までは前方後円墳と考えられていた。しかし、測量調査を進めていくうちに、比較的原形を保っているくびれ部付近の後円部墳丘裾ラインが曲線を描かないこと、社殿平坦部において地山が露呈しているので地山の露呈範囲を観察したところ、第5図の矢印に示した地山範囲



第4図 座王権現神社古墳位置図

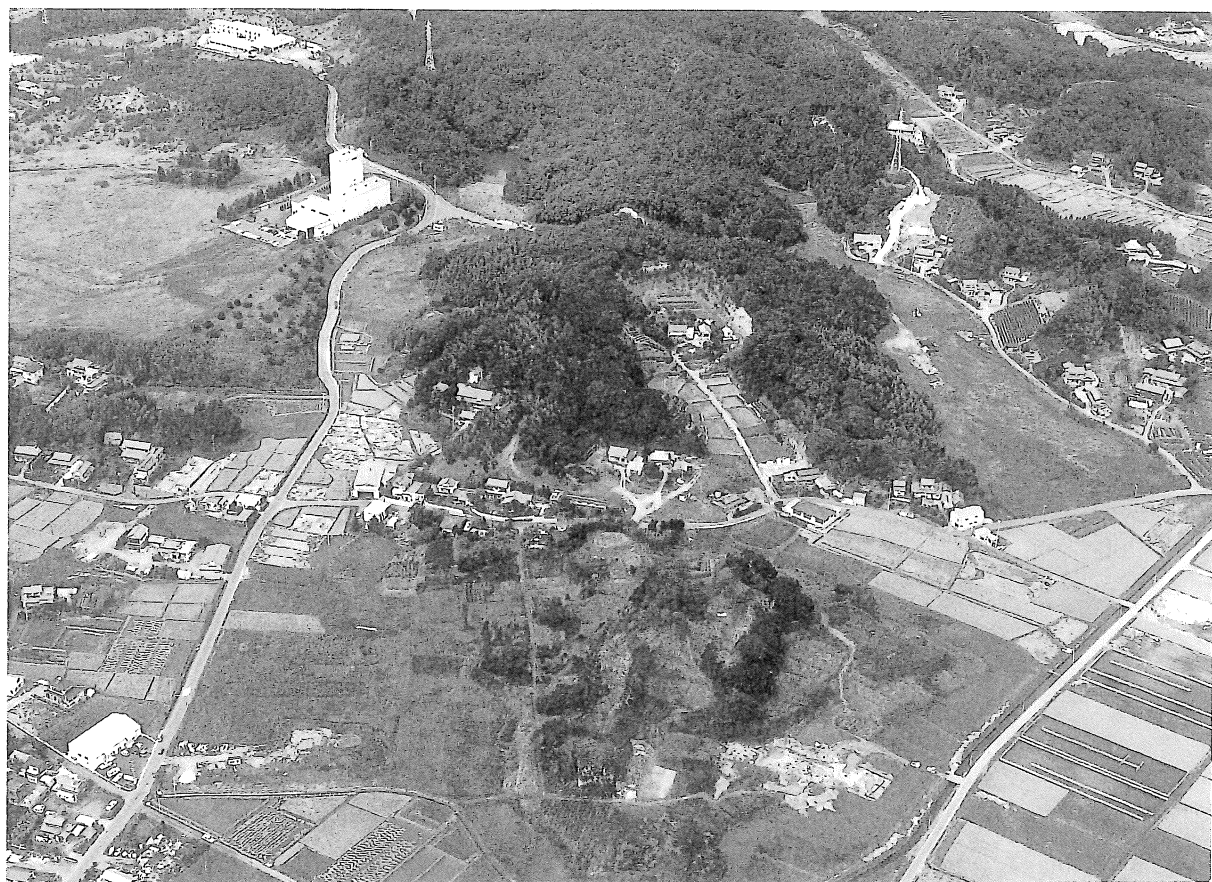
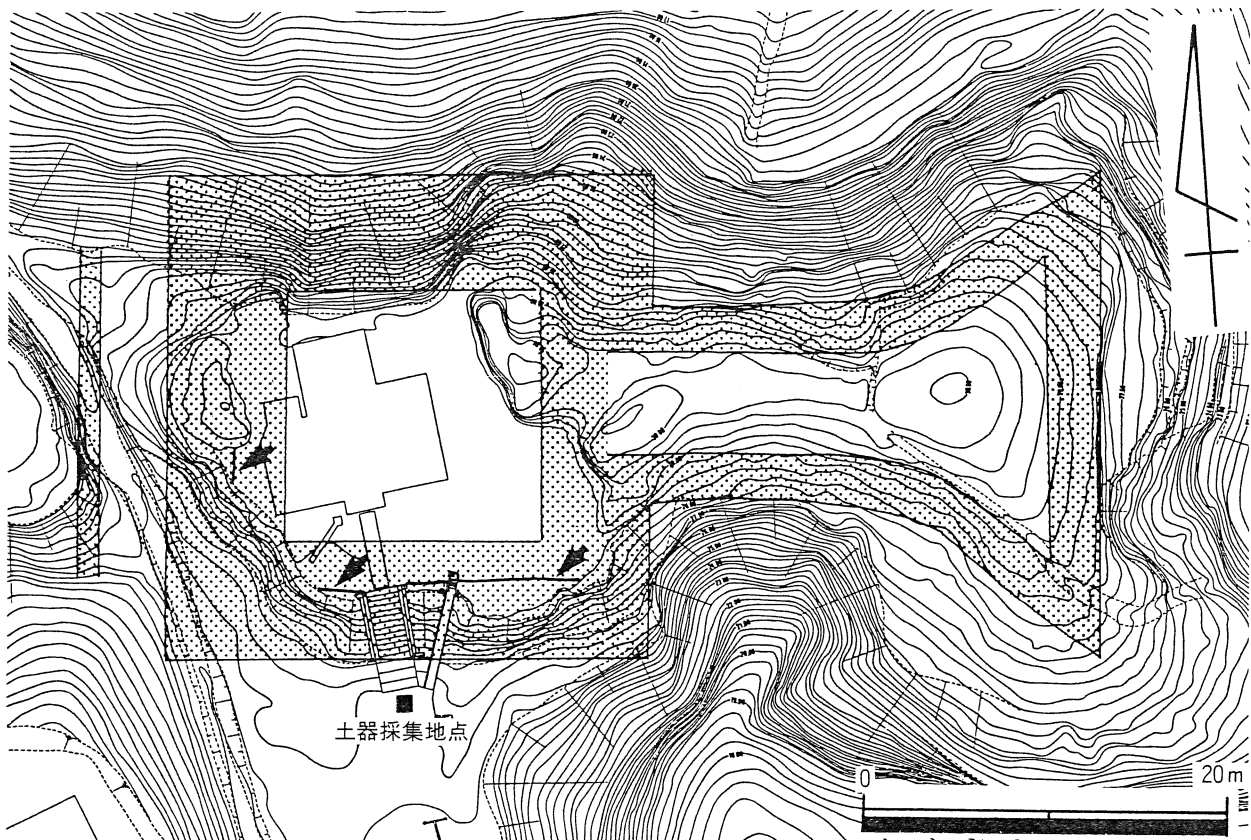
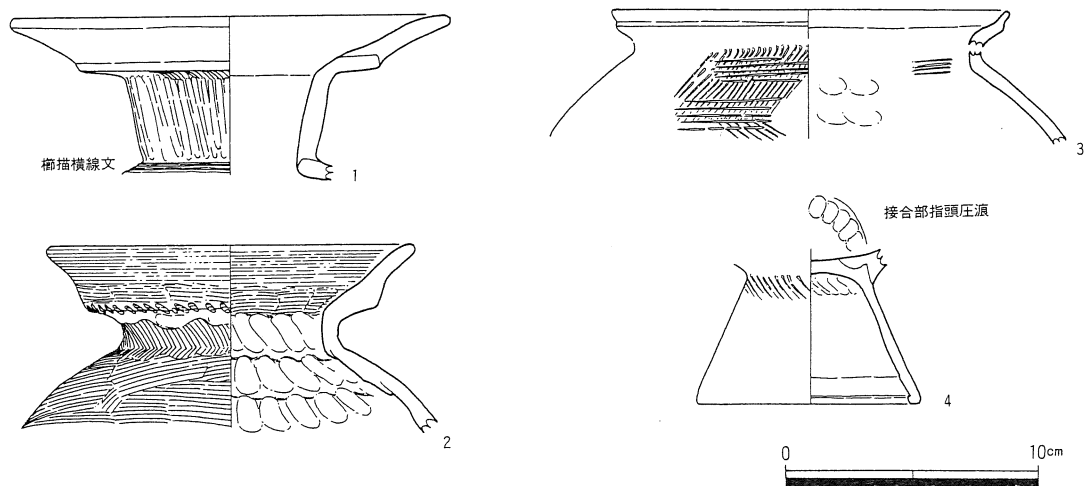


写真1 座王権現神社古墳航空写真（南より）



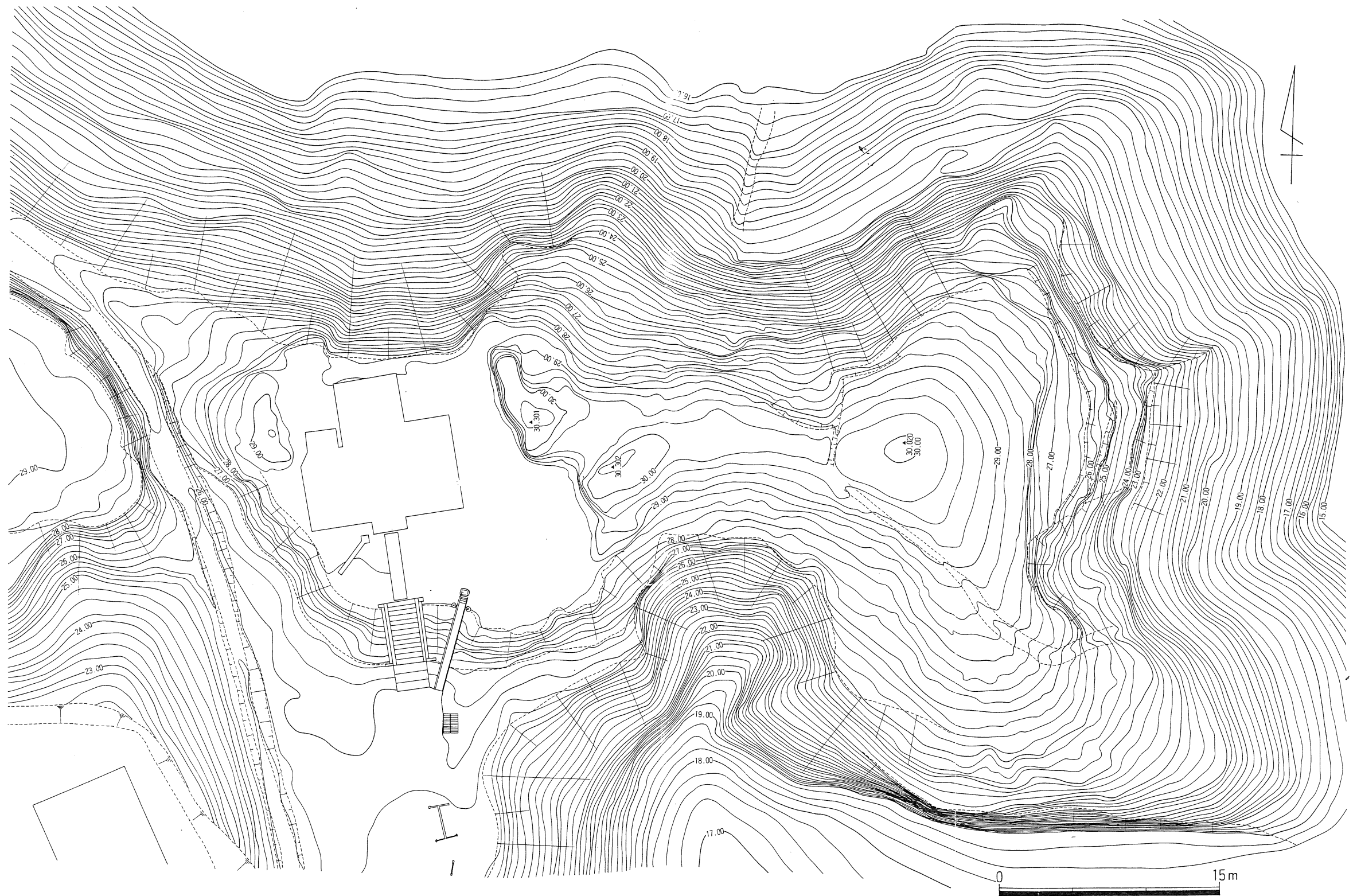
第5図 座王権現神社古墳墳形推定復元図



第6図 座王権現神社古墳出土遺物実測図

のラインが直線となることから前方後方墳と判断した。

前方後方墳と判断し墳丘規模を復元すると第5図のようになると考えられ、その規模は全長49m、後方部長25m、同幅25m、前方部長24m・同幅25m・高さ2mを測る。後方部の高さについては、削平を受けているため不明であるが残存部分から判断すると4m位にはなつたと判断される。後方部西側には、山道により変形を受けているが尾根を切断する幅5mほどの周溝が推定される。前方部は、いわゆるばち形に大きく拡がり、前方部幅と後方部幅がほぼ同じになる特徴をもつ。



第7図 座王権現神社古墳墳丘測量図（関西大学考古学研究室トレース）

遺物は採集者の聞き取り調査から、第5図に示した通り後方部南側周溝から出土したらしい。採集土器は第6図に示した、壺形土器の1は畿内系の二重口縁壺、2は東遠江系の複合口縁の壺、3・4は尾張系のS字状口縁の台付甕（以下S字甕と記述する。）がある。このうち尾張との併行関係を検討することができるS字甕は、赤塚次郎氏分類（赤塚次郎 1990）B類S字甕に該当し廻間Ⅱ式の段階に編年される。しかし、赤塚氏も指摘している通りB類S字甕は廻間Ⅲ式1の段階までは残存するとされ、B類S字甕の存在をもって簡単には廻間Ⅱ式には併行関係を求めることはできない。この点について本古墳出土のS字甕を赤塚氏に検討してもらったところ、廻間Ⅲ式1の段階に残存するB類S字甕とは異なる型式であることが確認され、廻間Ⅱ式の中でも最古段階には遡らないが、廻間Ⅱ式のいずれかの時期のものではないかとのご教示をえることができた。

1の複合口縁の壺については、赤塚氏編年では壺F類に分類され廻間Ⅲ式をもって登場し、廻間Ⅱ式においても散見される見通しをもっているという。二重口縁壺については、畿内の寺沢薫氏の編年（寺沢薫 1986）では壺N類に分類され、庄内0式～布留3式まで存続する型式でどの様式に該当するか畿内との併行関係は今一つははっきりしない。本古墳出土の二重口縁壺は肩部の櫛描横線文が頸部との境まで施文されこれを古い要素と考えると、庄内3式～布留0式あたりとすることも可能と思われるが、尾張での二重口縁壺の出現の様相がはっきりしないため庄内3式か布留0式のいずれかになるか確証を得ていない。また、在地系の2の複合口縁壺についても、庄内式後半～布留0式併行となりうるものである。どちらにしてもS字甕との関連から本古墳の土器編年での築造時期の位置付けは、尾張の廻間Ⅱ式後半～Ⅲ式1、畿内の庄内3式～布留0式の幅のなかで収まるものと考えられる。

以上本古墳は静岡県最古の首長墳になる可能性が非常に高く、しかも近年東海地域を始めとした東国各地で初期首長墳が前方後方墳を採用している状況と合致し、そのうえ赤塚氏が瀬戸内型と称している前方部がばち形に広がる形態を採用しているなど、東日本における古墳の発生という視点から大きな問題点を提起したと考えられる。しかし、土器の出土状況が表面採集である点発掘調査による墳形確認をへていない点など、今少し本古墳の築造時期や墳形の決定について問題点を残している。

参考文献 赤塚次郎 1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター

寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』 檀原考古学研究所

2. 東山古墳群

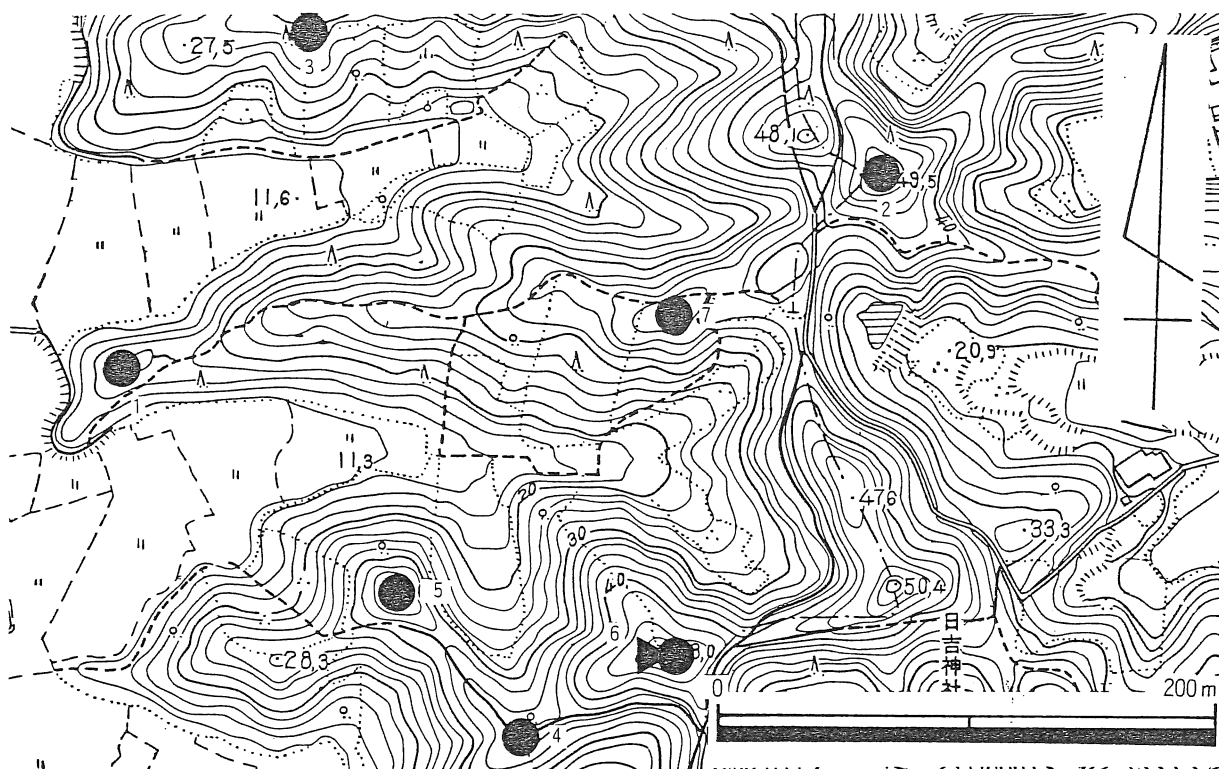
東山古墳群は工場建設にともない、1970年1月～3月大川清氏により発掘調査された。古墳は6基発掘調査され、前方後円墳とされた6号墳と比較的大形の円墳である1号墳以外は、副葬品が極めて少ない直径10m前後の小形円墳からなる古墳群であった。このうち副葬品の伴う古墳群中有力な1号墳・6号墳について紹介したい。

1号墳は人為的な削平を受けており正確な墳丘規模はわからないものの、直径20m前後を測る円墳になると推定される。主体部3基が確認され、何れも長さ5～4mを測る長大な割竹形ないし箱式木棺を採用している。

副葬品は第9図に示した17の鉄銚・15の小形の直刀・14の大形鉄鏃などが出土している。各主体部1～2点の出土で、大形の直刀・剣は伴っておらず、鉄製武器の組成としては貧弱である。

鉄製品の組み合わせと長大な木棺を採用する点からみると、16の鉄製品が気に係るところであるが5世紀前半の時期にしたい古墳である。

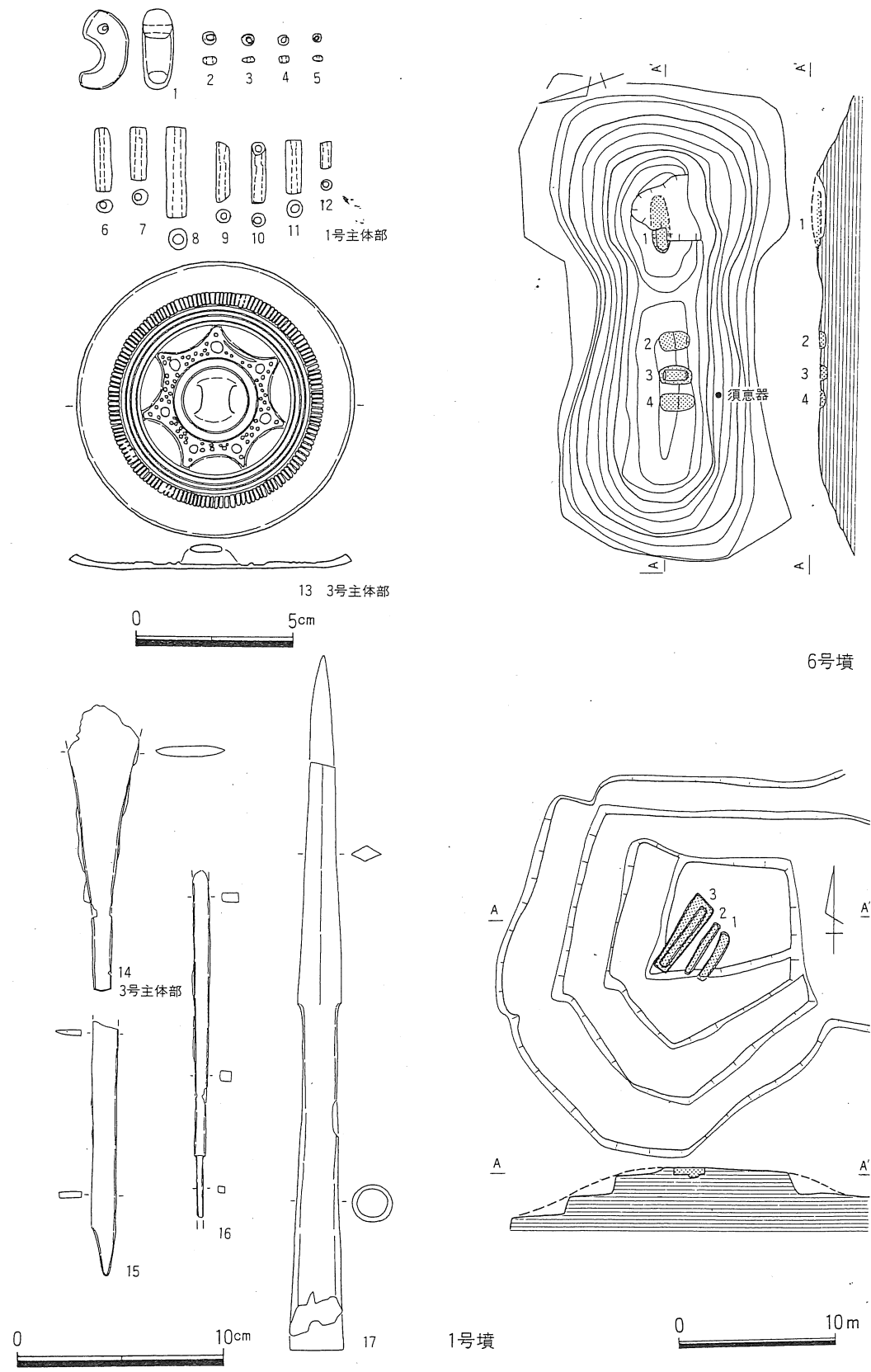
6号墳は全長29m、後円部径12m、前方部長さ17m・幅11mを測る小形の前方後円墳である。



第8図 東山古墳群位置図

主体部は後円部に長さ4 mに満たないと推定される箱式木棺の一部と、前方部に長さ2 m前後の短い箱式木棺3基が確認されている。後円部の主体部からは第7図1～12の玉類と朱が出土している。前方部の主体部のうち第2主体部からは挟入柱状片刃石斧が出土し、前方部墳丘からも弥生時代中期後半の白岩式段階の甕形土器が出土していることから、前方部の主体部全部が6号墳に伴うものか検討を要する。第3主体部出土の内行花文鏡についても、県内では内区の花文内部に珠文を巡らす文様の小形内行花文鏡の例は、古いもので焼津市小深田西2号墳第1主体部・藤枝市五鬼面1号墳東棺・引佐町馬場平古墳の4世紀前半～末の例、5世紀～6世紀代といわれるものには松林山古墳群1号墳・富士市富士岡F第49号墳の例と、6鈴鏡であるが焼津市猪々ノ谷神社古墳の例があり、特に本古墳出土の小形内行花文鏡を5世紀後半には特定できない。珠文のなかに乳が配置される特徴をみると、松林山古墳群1号墳の鏡が一番近いものの、松林山古墳群1号墳の鏡は採集品であるうえに、1号墳の墳丘は四隅に陸橋をもつ型式であることから5世紀代といえる古墳か検討を要する。また、富士岡F49号墳については横穴式石室からの出土、猪々ノ谷神社古墳は鈴鏡でありいずれも4～5世紀前半に遡らないものと考えられるが、いずれも採集品であり供伴遺物がわかっていないので明確な時期はわからない。今のところ本古墳の内行花文鏡は4世紀末～6世紀代の時期幅でしか考えられないが、4世紀末～5世紀前半あたりの可能性が高いのではないかと思う。とすると、前方部主体部についてははたして6号墳に伴うものか、時期の違う墳墓や古墳が複合していないか検討を要するであろう。

以上のように6号墳については前方部主体部出土の内行花文鏡や後円部主体部の玉類だけでは時期が決められないが、前方部墳丘南側より古墳の築造時期後の祭祀用の土器と考えられている一群の須恵器が出土している。この一群の須恵器は6世紀後半になる田辺昭三氏編年TK43段階の長脚2段透の高坏で有蓋のものが2点と無蓋のもの1点、壺1点である。当地域の木棺直葬から横穴式石室移行時期はTK10あたりと考えられているものの、TK43段階の横穴式石室・横穴墓の確認例は少なく、



第9図 東山1・6号墳墳丘・遺物実測図（袋井市 1983より再トレース）

6号墳のような前代の保守的な前方後円墳を採用する木棺直葬墳がTK43段階にあってもなんら不思議ではないだろう。どちらにしても現状の資料からでは、東山6号墳について時期の決め手をもたないが、全長30m未満の小形前方後円墳という視点から6世紀中頃～後半のものと考えたとすると、前方後円墳の終末を考えるうえで興味深い古墳となるだろう。

参考文献 袋井市 1983 『袋井市史』通史編

(松井 一明)

3. ^{く と おおつか}久努大塚古墳

平成2～3年にわたって国道1号線袋井バイパス及び大和ハウス中部工場建設に伴う「坂尻遺跡」の発掘調査が行われた。その際、袋井市域内の条里線を復元するために、袋井市役所所蔵の土地宝典・地籍図の調査が静岡県埋蔵文化財調査研究所と袋井市教育委員会の協力によって行われた。

この調査によって一つの前方後円墳の姿が浮かびあがってきた。昭和31年の地籍図と昭和39年の袋井市都市計画図および航空写真に、前方後円墳状の畑地が残されていることがわかった。またこの畑地周辺の水田区画をみると、馬蹄形に巡る周濠らしい痕跡も見られる。また、七つ森神社周辺にも、小円墳らしい高まりや古墳の上に生えている木立ちが航空写真に残されており、前方後円墳を中心として、最低6基の小円墳の古墳群が存在している事が確認できた。

前方後円墳については昭和39年の袋井市都市計画図により復元を試みると、全長約50m、後円部径30m、周濠部まで含めると全長約80m程の規模になると推定される。平野の中の微高地上に独立して築造されていることから考え、5世紀代の古墳になると考えられる。

古墳時代中期に、全長50m前後の前方後円墳を造営できるだけの権力を持った有力氏族が、この地を本拠地としていたことは事実であろう。次に、平安時代初期に編さんされたと考えられている『国造本紀』を見ると、久努国造がこの地を本拠地としていたことが記述されている。また、袋井市が成

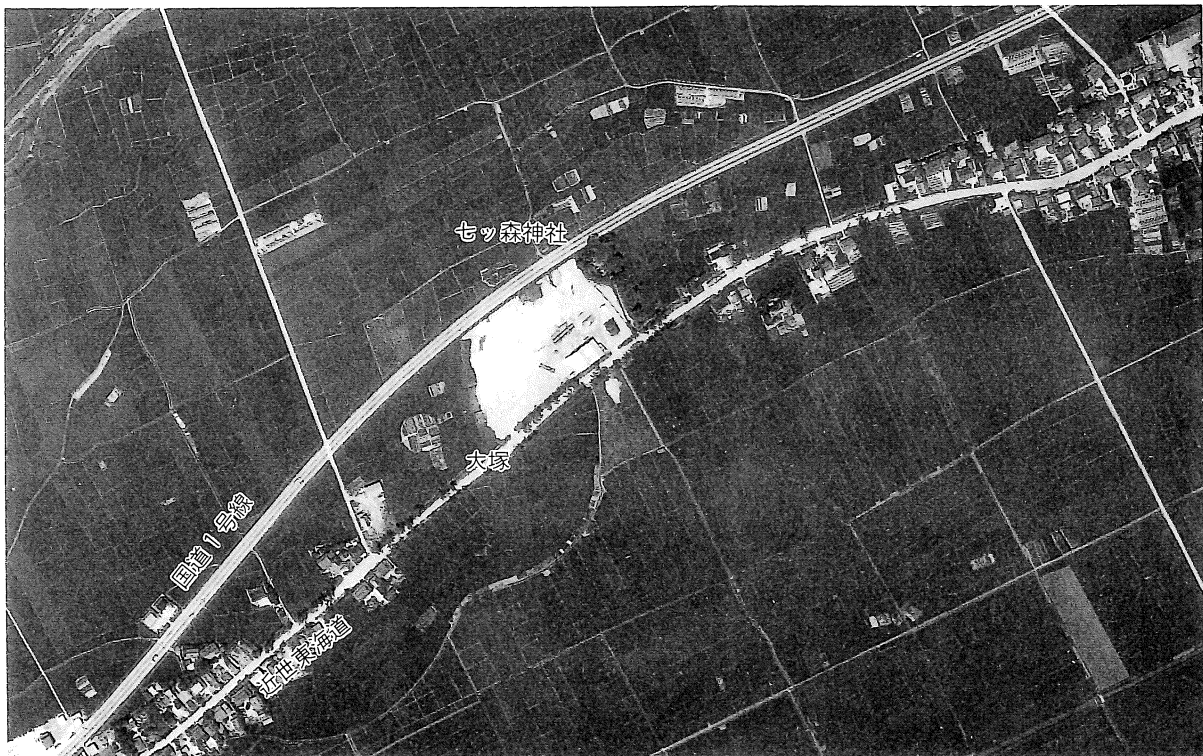
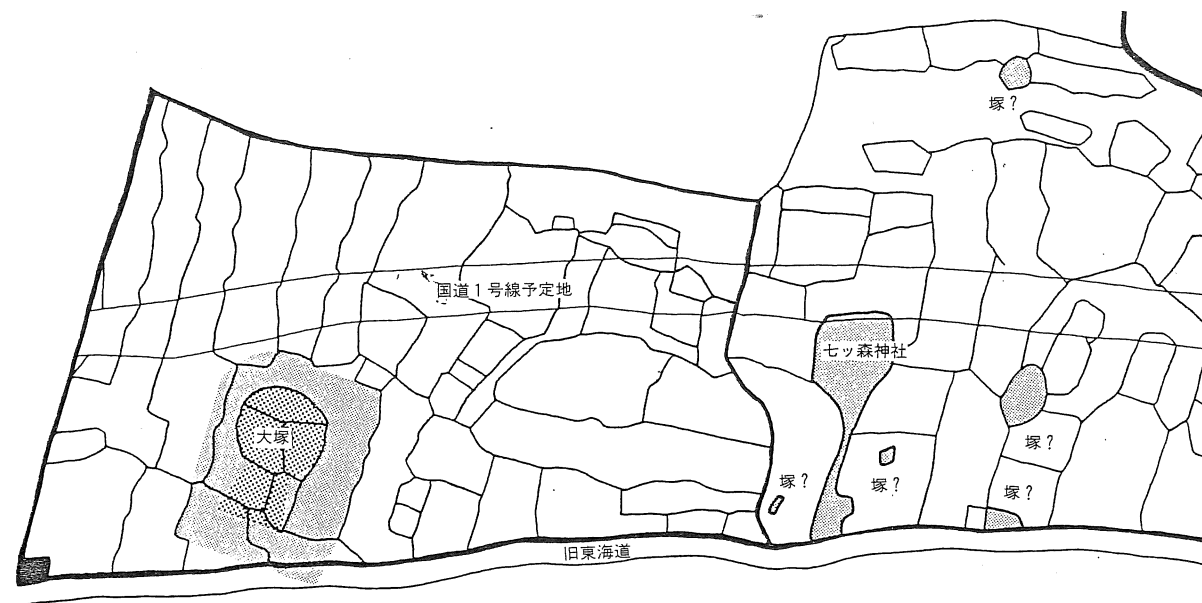
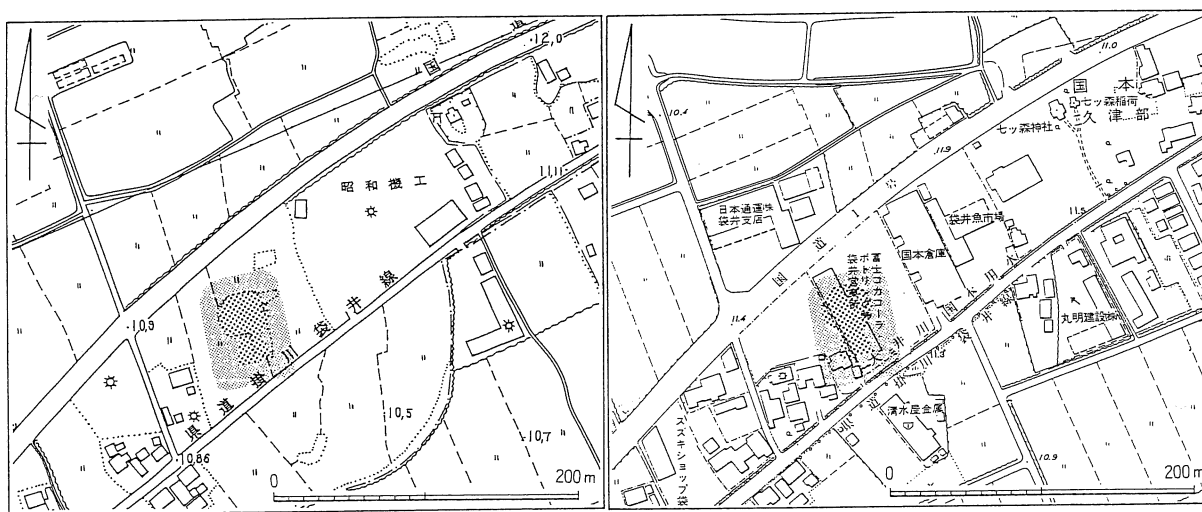


写真2 昭和39年頃の航空写真



昭和31年 久津部地区国本の地籍図 (原本は、明治時代に作成)



昭和39年 袋井市都市計画 昭和63年 袋井市都市計画
第10図 久努大塚古墳周辺地形図(袋井市都市計画図)・地籍図

立する以前、本地域周辺は久努村あるいは久努西村等の村名で呼ばれていた。そして、前方後円墳が存在した場所には、前述の土地宝典のなかに小字名として「大塚」が残されていた。これらの地名から、この消えた前方後円墳を「久努大塚古墳」と命名した。

この大塚古墳より東へ約150mの地点には、「七つ森神社」という国造を祭神とする神社が存在する。原秀三郎氏によると、この七つ森神社を山名郡四座の一つである郡辺神社に比定している(原秀三郎 1983)。かりに、原氏の説が正しいとすると、七つ森神社は奈良時代まで創建が遡る可能性がでてきたことになる。七つ森神社が奈良時代に国造を祭神として創建された契機が、久努国造の墓所としての認識が当時伝えられていたことに起因すると、久努大塚古墳を築造した勢力が久努国造あるいはその前身となる勢力とする仮説が現実味を帯びてくるのである。

地元伝承では、七つの塚の中で最も大きな塚のあった場所に、神社が建てられたという。何時の日か久努大塚古墳が削平され畑地に転用された頃に、現在の場所に神社の社殿が移されたのだろうか。

成立年代不詳であるが幕末頃描かれたと思われる東海道の名所図絵の一枚の絵を見ると、大形前方後円墳らしい山を中心として、七つ森神社の社殿や七つの塚らしい小山が描かれている。この絵図を見ると幕末の頃の七つ森神社の社殿は久努大塚古墳の脇に建てられていた可能性が高いと思われる。

この七つの塚は戦前まで地元の人たちにより大切にご神体として守られてきたが、戦後の開発の波の直撃を受け、現在確認できるものは僅かに1基である。地元の人話から、すでに確認できなくなってしまった2基の塚から2本の鉄剣が出土し、地元の公会堂に保管されていたらしいが、現在は散逸し行方不明であることを確認した。おそらく、石がでたとの話は聞かれないため、木棺直葬の古墳になると思われる、袋井市域で普遍的に見られるいわゆる初期群集墳といわれる5世紀後半～6世紀前半の時期になる古墳群となろう。その成立の契機は久努大塚古墳の築造が契機となったと推測される。これらの事を確認すべき重要な古墳群は、現在倉庫あるいは店舗の下に深く埋もれているものの、今後の発掘調査の実施をまって次第に解明されていくことだろう。

参考文献 原秀三郎 1983 「袋井市域の古代文化」『袋井市史』通史編 袋井市

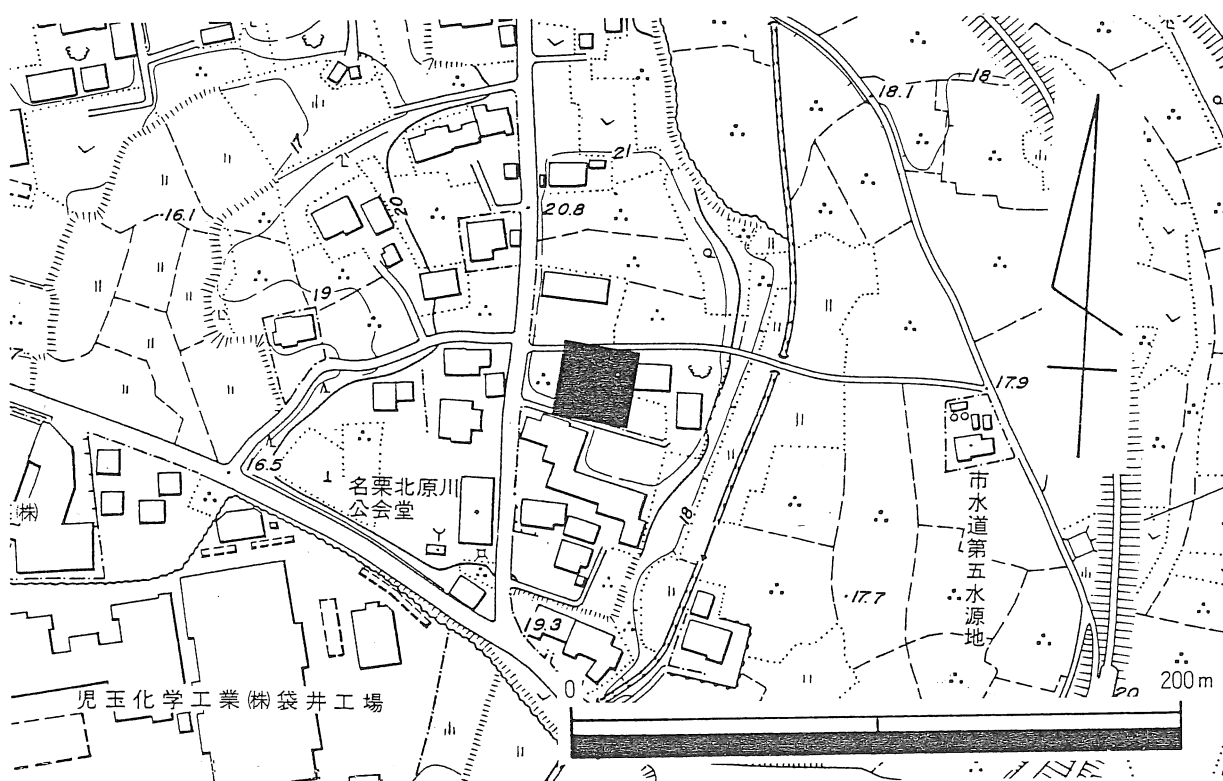
(加藤 理文)

4. 石ノ形古墳

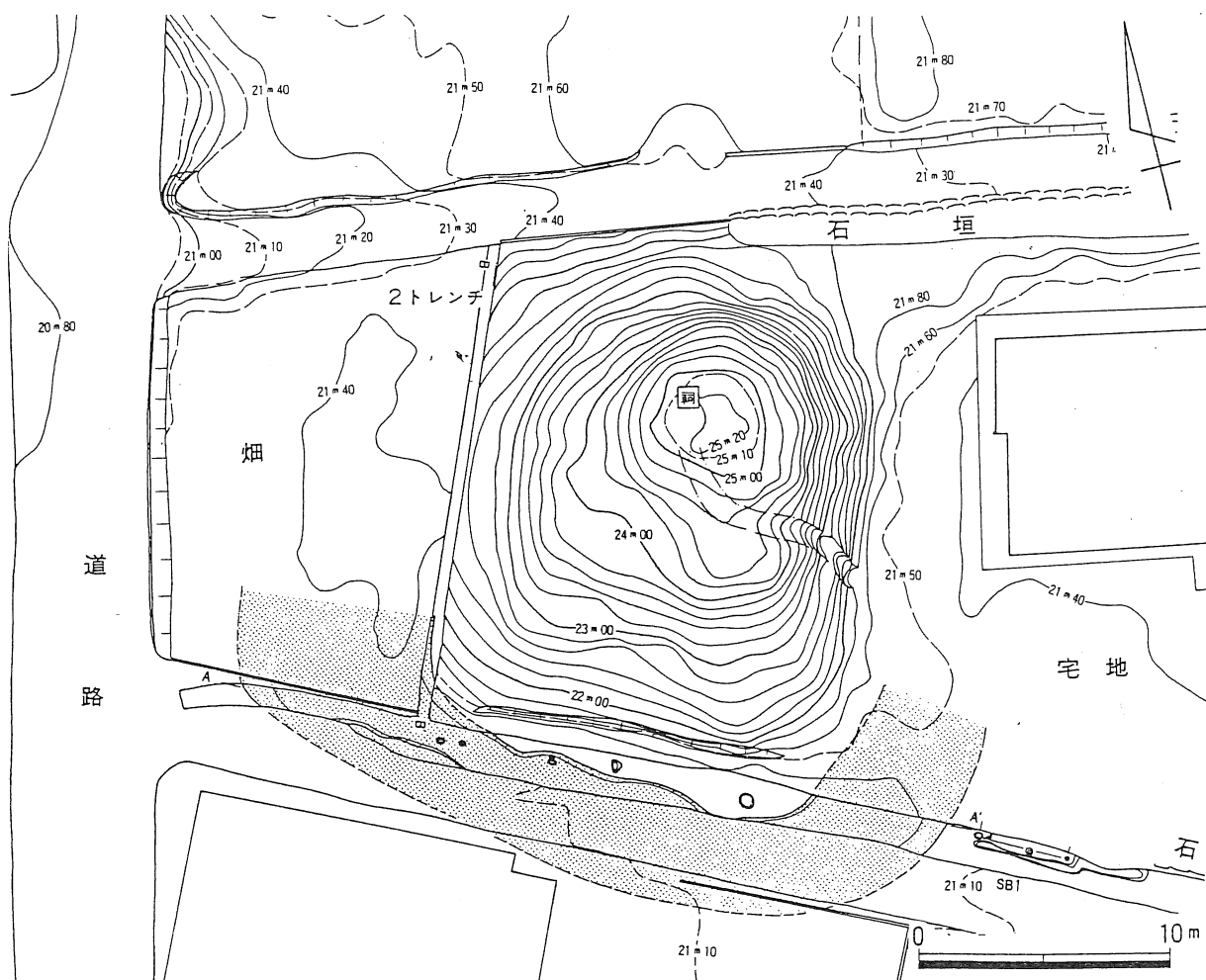
石ノ形古墳は、平野部との比高差3mの低位段丘に立地し、付近に小古墳もないことから単独の首長墳と考えられる古墳である。

本古墳は1990年に、周溝と墳丘の一部が袋井市教育委員会により発掘調査された。周溝はトレンチ内で確認され、第12図に示した通り方墳の可能性がでてきた。方墳だとすると、東西18m・南北24m・高さ4mを測る規模となる。

遺物は周溝や墳丘から埴輪や須恵器が採集されており、第13図に示した。須恵器のうち5世紀後半～6世紀前半になりそうなものとして1～5がある。1・2は甕で、2については子持ち器台の可能



第11図 石ノ形古墳位置図



第12図 石ノ形古墳墳丘測量図（袋井市教育委員会 1992より）

性があり、どちらも6世紀前半のものとなるだろう。3の瓶についても6世紀前半まで降る資料だろう。5の壺は口縁の作りから5世紀後半に遡るかもしれない。そのほかの6～11の須恵器は7世紀代のもので古墳とは直接関係ないものである。

埴輪はいずれも小破片で全体形はわからないが、底部からタガ一段目までナデ整形、断面形態台形のタガをナデ整形、一段以上を1次整形縦刷毛目、2次整形を横刷毛目を施すもので、黒班のあるものは確認できなかった。横刷毛目はB種の可能性があるが、小破片で確証を得ていない。

本古墳出土の須恵器はMT15～TK10段階から古くてもTK47段階以前のもはなく、埴輪は二次調整に横刷毛目（B種？）を施す無黒班のもので5世紀後半の時期が考えられることから、本古墳の築造時期は5世紀後半でも新しい段階としておきたい。

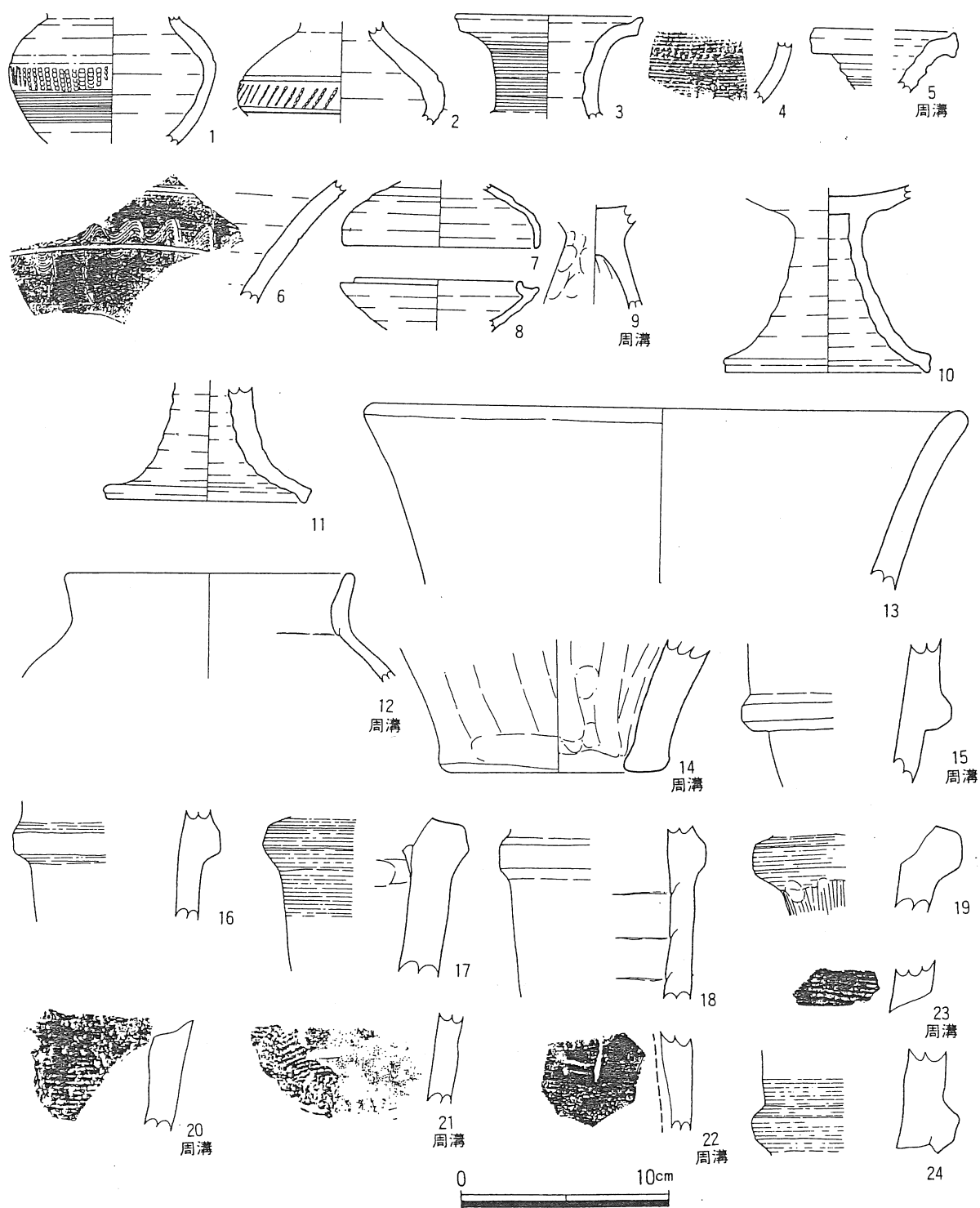
参考文献 袋井市教育委員会 1992 『宇佐八幡境内遺跡』

（松井 一明）

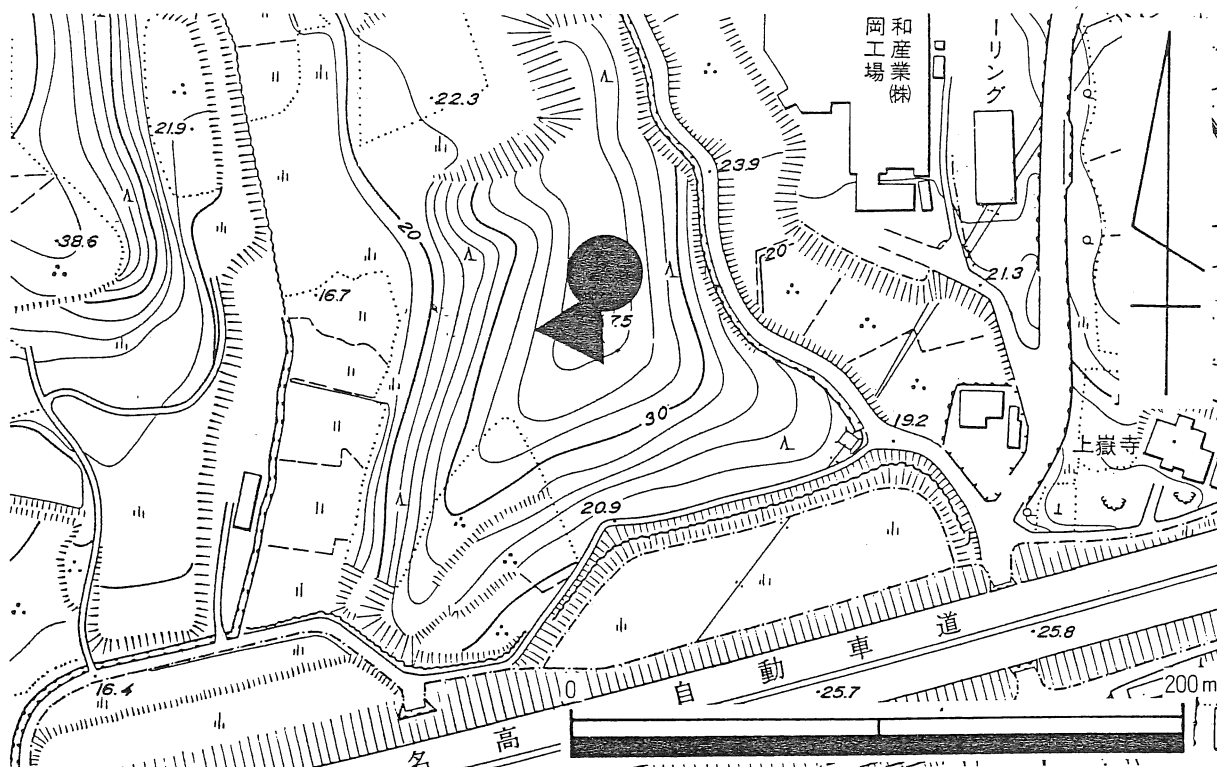
5. 権現山古墳

権現山古墳は南北方向にのびた丘陵先端の平野部との比高差13mになる位置に立地している。地形のせいかやや傾いているが、平野部からの見通しの良いほぼ南側に古墳の側面を持ってきている。測量調査は1989年12月に袋井市教育委員会により実施された。

本古墳の規模は、第15図に示した通り全長35m、後円部経17m・高さ2.5m、前方部長さ18m・幅16m・高さ2mを測り、前方部と後円部がほぼ同じ数値になり、前方部端は明確でない。周溝は後円



第13図 石ノ形古墳出土遺物実測図（袋井市教育委員会 1992より）



第14図 権現山古墳位置図

部北側の丘陵部分を切断する周溝が地形図より考えられる。主体部については後円部盗掘坑に顕著な石材の散乱はないため木棺直葬と思われる。

葺石等の外部施設は墳丘面での観察では確認されていないが、第15図1に示した埴輪がくびれ部より採集されている。小破片のため時期を決定できるものではないが、焼成は緻密なものでありおそらく無黒班の埴輪と思われる。2の須恵器は壺ないし甕の小破片で、後円部より採集されている。外面疑似格子目叩き、内面青海波紋を明瞭に残し6世紀前半のものと思われる。

以上権現山古墳については、埴輪を伴うこと全長35mを測る前方後円墳であることがわかる。その築造時期については決定資料がなく、埴輪と須恵器を伴うらしいことから5世紀後半～6世紀前半いずれかと思われる。あえてその時期を考察すると、宇佐八幡境内1号墳との関係から5世紀後半～末ぐらいに考えておくのが無難なところであろう。

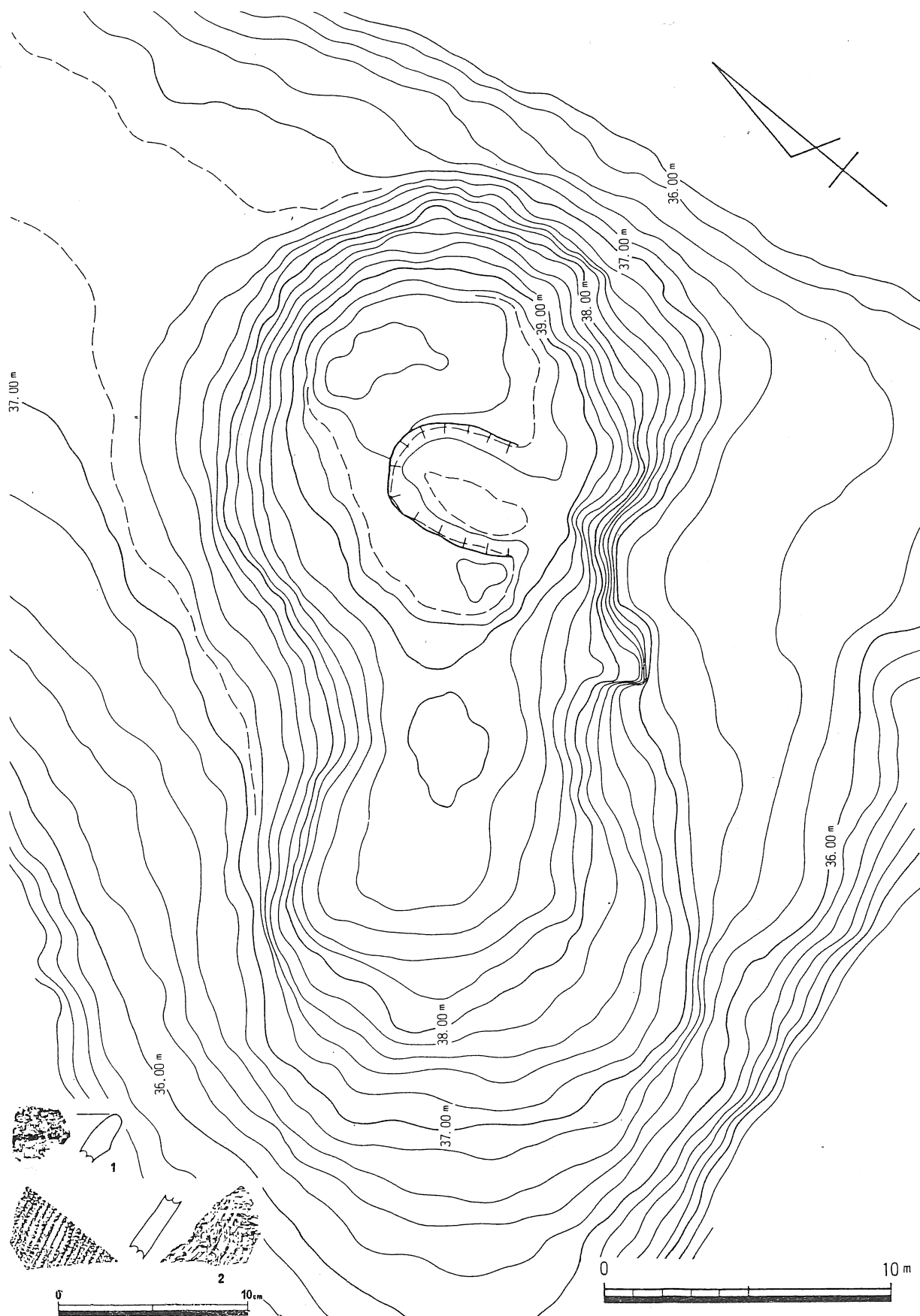
参考文献 袋井市教育委員会 1990 『権現山遺跡』

(松井 一明)

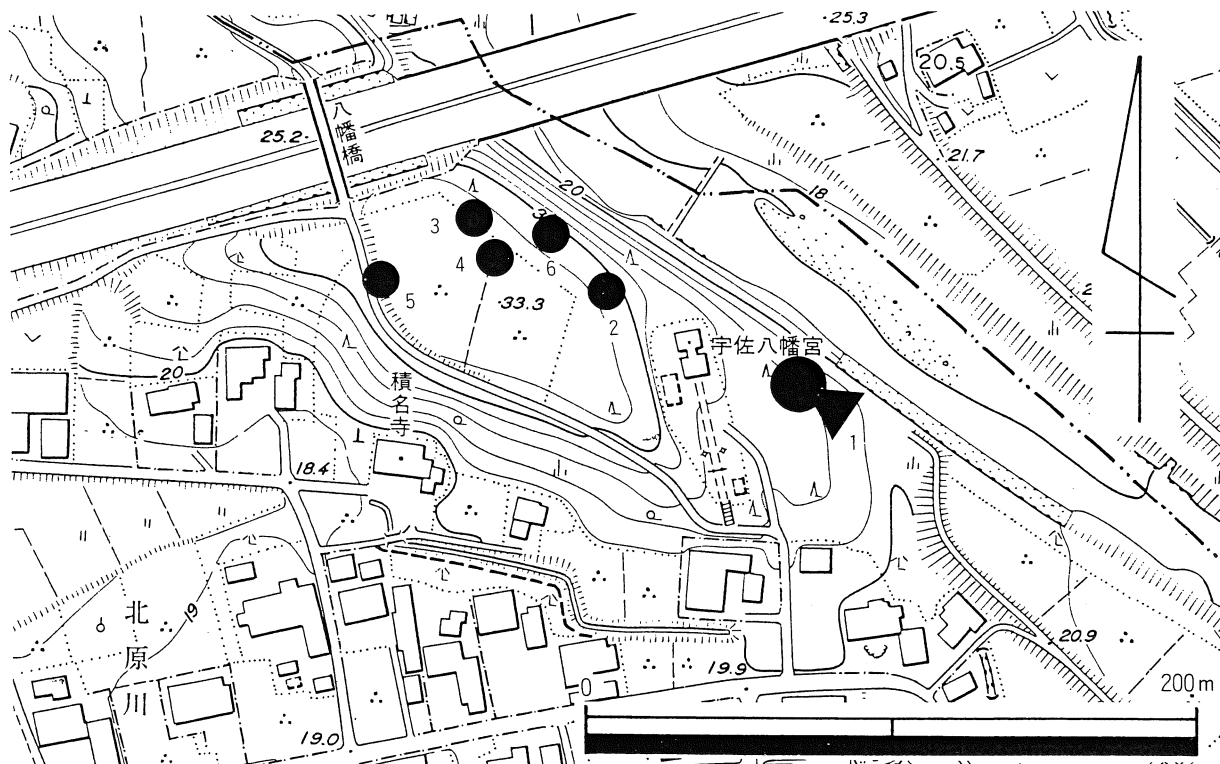
6. 宇佐八幡境内古墳群

宇佐八幡境内古墳群は、権現山古墳の立地する丘陵の1本の谷をはさんで東側の丘陵上に位置し、1号墳の前方後円墳と3～6号墳の小円墳からなる古墳群である。1号墳は1985年に袋井市教育委員会により測量調査、1991年に3・4号墳の発掘調査が実施された。1号墳は石ノ形古墳の築造された段丘よりも一段高い段丘上に、円墳群は1号墳よりさらに高い段丘上に立地しているので、1号墳は円墳群とは至近距離にあるといえども隔絶した位置をしめている。1号墳は平地との比高差10mの場所に位置し、古墳から平野部への眺望が利く方向は東と南側であるが、平野部からは古墳の東側面をみることになり、権現山古墳が南側に側面をもっているのとは立地条件が異なる。

1号墳は第17図に示したとおり全長30m、後円部経15m・高さ2m、前方部長さ15m・幅10m・高



第15図 権現山古墳墳丘測量図（袋井市教育委員会 1990より）



第16図 宇佐八幡境内古墳群位置図

さ1mを測り、先に紹介した権現山古墳と比べるとさらに小形の前方後円墳である。埴輪・葺石ともに確認されていないが、第17図10・11に示した埴輪片が円墳群付近からも出土しており、1号墳にも埴輪が伴う可能性は高いと考えられる。主体部は後円部の陥没や石材の露出がないため、今のところ木棺直葬と考えたい。

1991年の発掘調査では3～5号墳の3基の古墳の周溝が確認され、いずれも直径10m前後の小円墳であることが判明した。第17図1～9に示した3・4号墳周溝出土の須恵器・土師器はTK10段階のものであり、6世紀中頃の築造になる古墳群であることがわかった。

1号墳の時期の決め手はないが、3・4号墳などの小円墳群が1号墳の築造を契機とするものならば、1号墳の築造時期を権現山古墳よりやや新しい5世紀末～6世紀前半ぐらいと考えておきたい。そうすると、1号墳は権現山古墳とともに、全長60mを測る大形の前方後円墳3基からなる和田岡原の首長墓群が4世紀末に成立し、5世紀中頃に没落後に成立する小形の前方後円墳であるといえ、新たな首長層の台頭と、前方後円墳の終末を知るうえで重要な古墳となる。

参考文献 袋井市教育委員会 1985 『袋井市遺跡地図・遺跡地名表』

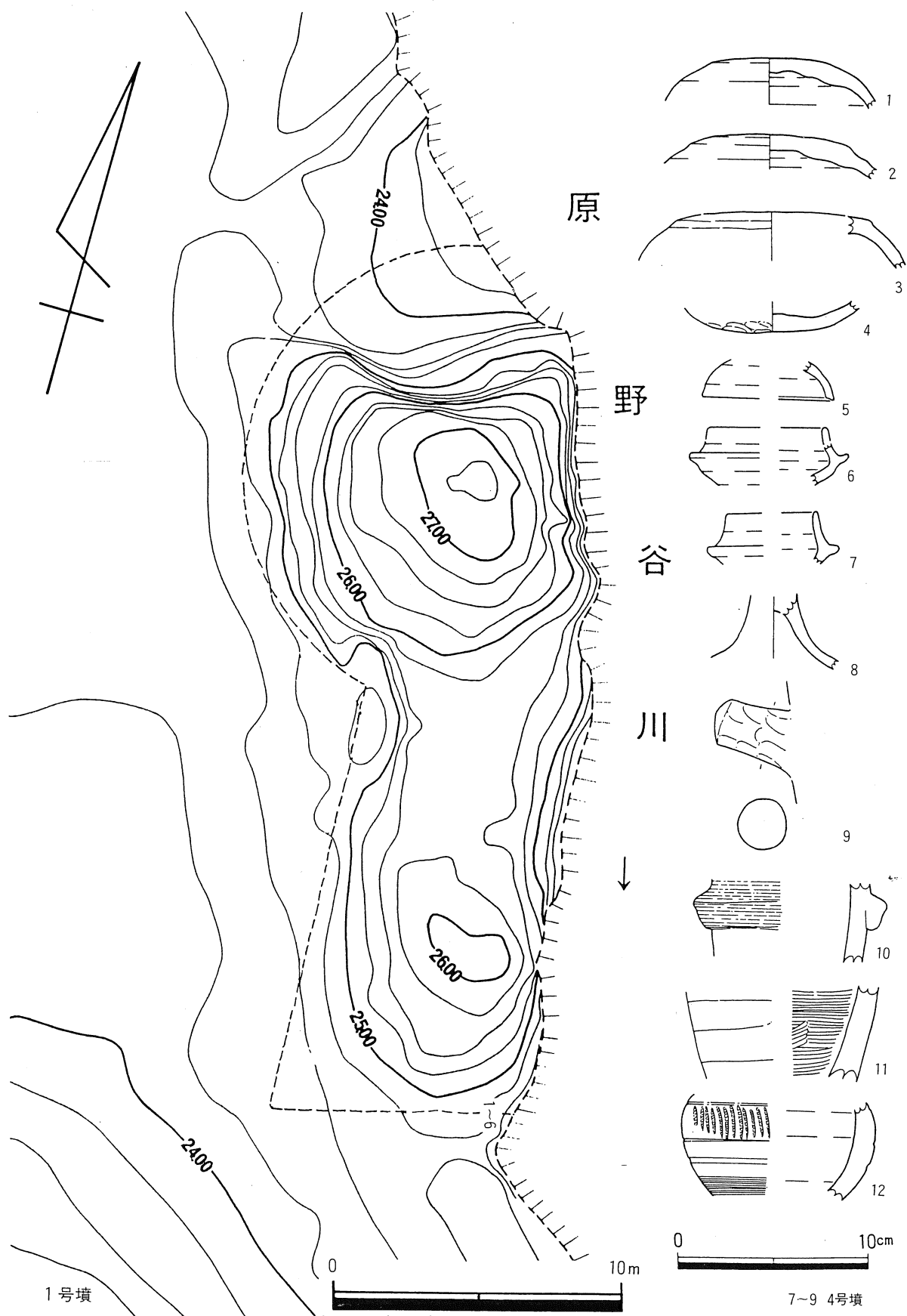
袋井市教育委員会 1992 『宇佐八幡境内遺跡』

(松井 一明)

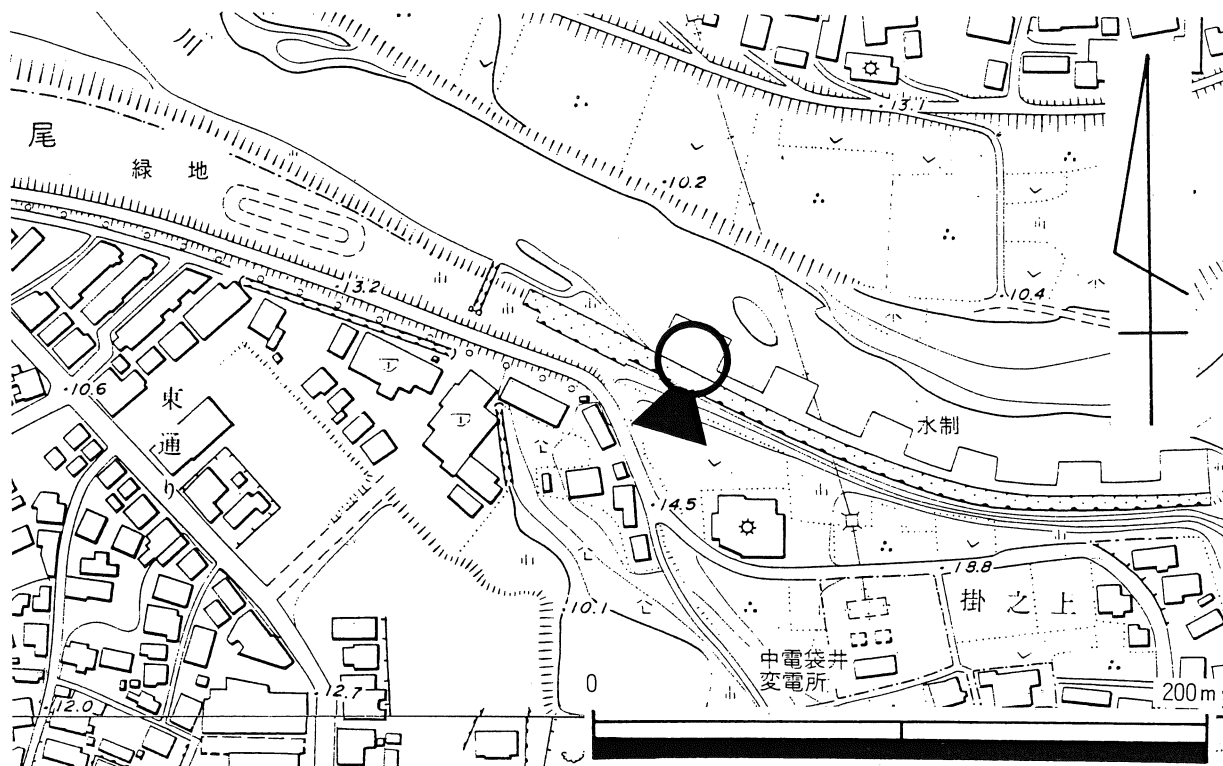
7. 狐塚古墳

狐塚古墳は平野部との比高差7mの段丘上に位置し、古墳から平野部への眺望は北・西・南側の広い範囲にわたるものの、側面は西側を向いている。本古墳の発掘調査は1974年狐塚古墳発掘調査委員会により実施され、後円部は原野谷川の自然侵食により失われ前方部のみの発掘調査となった。

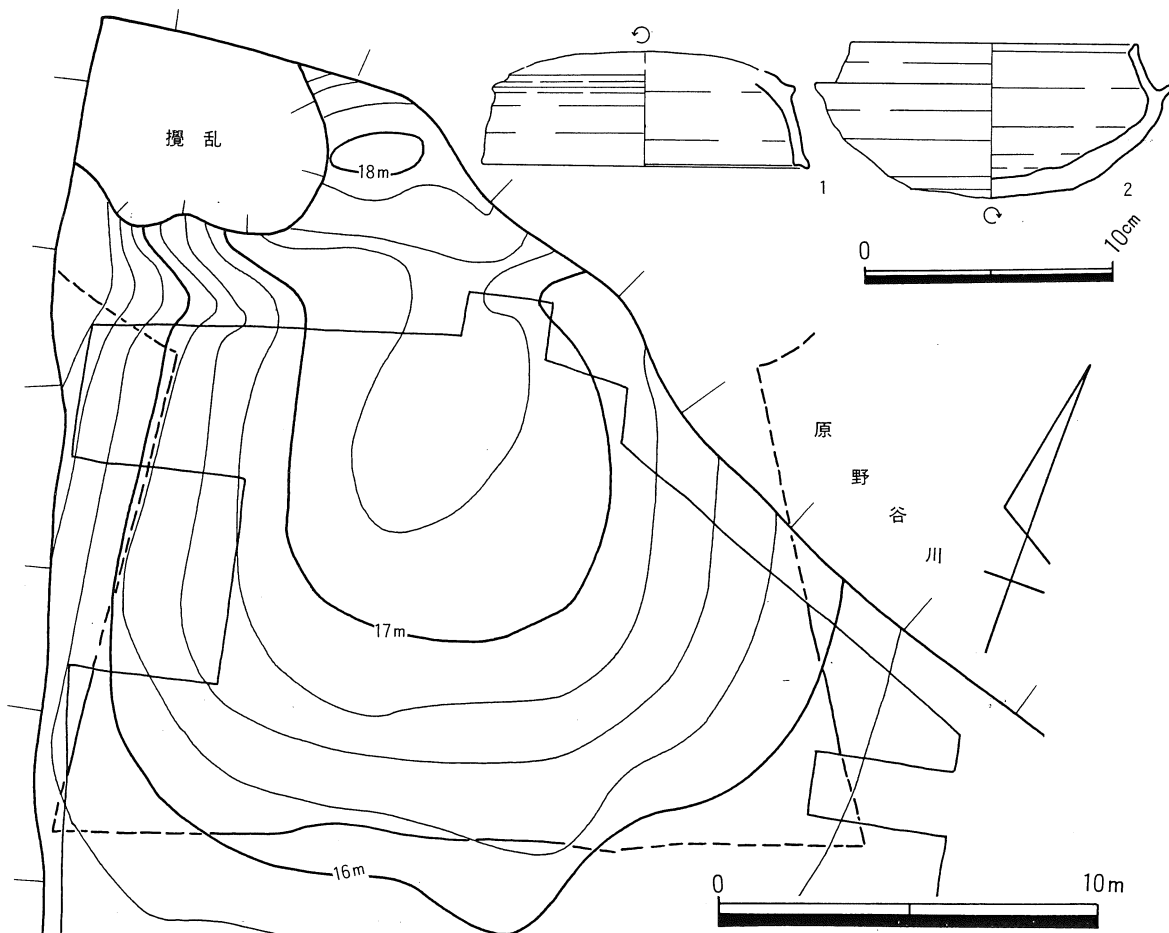
第19図に示した通り墳丘裾部の確認ができた。周溝・葺石・埴輪・主体部については確認されていない。発掘調査からえられた前方部規模は、長さ13m・幅21mになり短い前方部が予測され、いわゆ



第17図 宇佐八幡境内1号墳墳丘実測図 3号墳・4号墳遺物実測図
 (袋井市教育委員会 1985・1992より)



第18図 狐塚古墳位置図



第19図 狐塚古墳墳丘図・付近出土須恵器（須恵器図は白澤崇氏提供）

る、帆立貝式の前方向後円墳に近いものが予想される。また、前方部長さの2倍の規模の後円部をもったとしても、全長40m前後の前方向後円墳となり、さほど大きな墳丘規模にはならないと考えられる。

古墳に伴う明確な遺物は確認されていないが、付近から第19図に示した須恵器が出土している。1は小破片を図化したものでTK208段階、2はTK47段階に属し、この須恵器が古墳の築造年代を示すものとする5世紀後半となる。ただし、本古墳に隣接して6～7世紀代の集落が存在することから混入の可能性も考えておかなければならない。かりに5世紀後半の築造年代が正しいとすると、後の6世紀中頃に築造される大門大塚古墳や御所森古墳に先行する首長墓と推定でき注目される。

(松井 一明)

たかおむかいやま

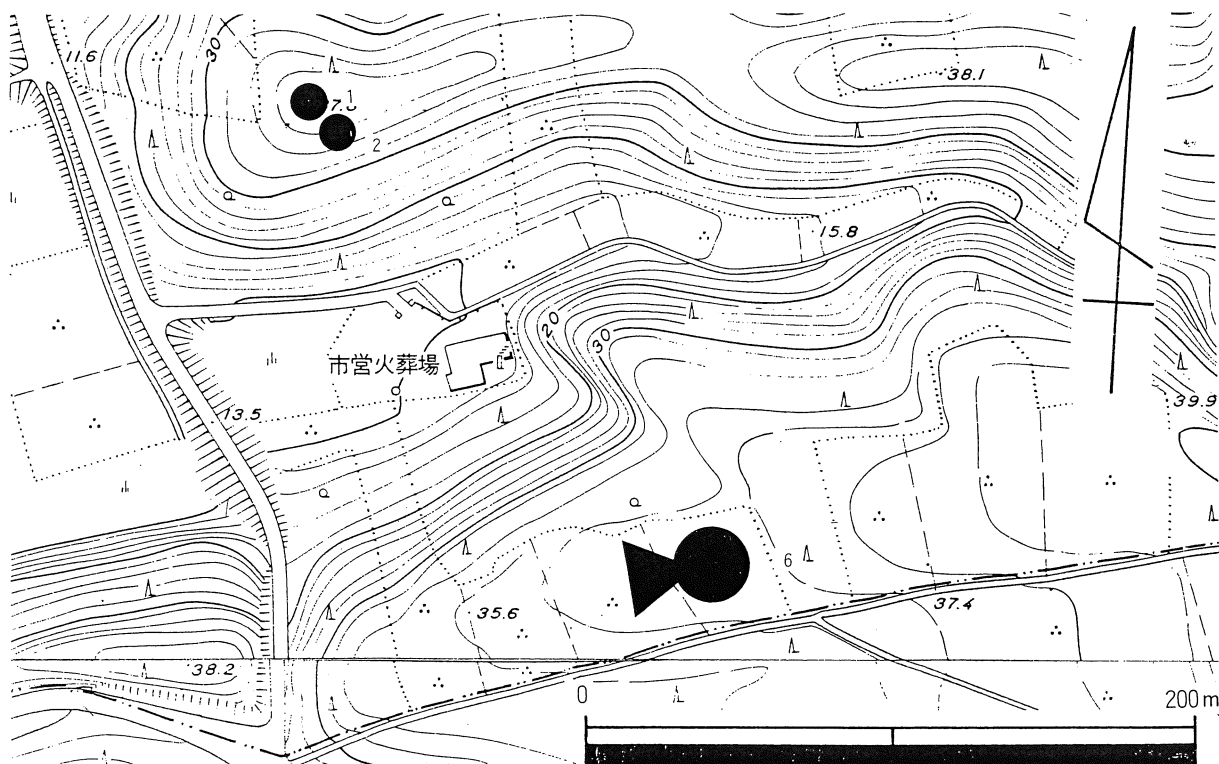
8. 高尾向山6号墳

高尾向山6号墳古墳は平野部との比高差7mの段丘上に位置しており、古墳の北側に丘陵があるためそれに遮られて平野部から古墳を確認することができない特異な立地を示している。ただし、古墳の北東方向に響ヶ谷と呼ばれる狭い谷が入り込み、その谷間からかろうじて見ることができる。

発掘調査や測量調査が実施されていないため、まったく基本データが得られていない古墳であるが目測では40mクラスの前方向後円墳に見える。1992年に本古墳の東側に隣接する畑地を袋井市教育委員会により発掘調査が実施されたが、古墳時代の遺構はまったく検出されなかったことから、本古墳が単独墳であることが判明した。また、本古墳よりも北側の丘陵で、1988・1992年の発掘調査で6世紀前～中頃の木棺直葬墳（高尾向山古墳群）が見つかった。また、西側の丘陵地でも6世紀中頃より築造の始まる団子塚古墳群が調査された。これらの古墳群が築造された契機を本古墳に求めるとすると、5世紀後半～末あたりに築造時期を求めると考えられる。

参考文献 袋井市教育委員会他 1990 『高尾向山遺跡』

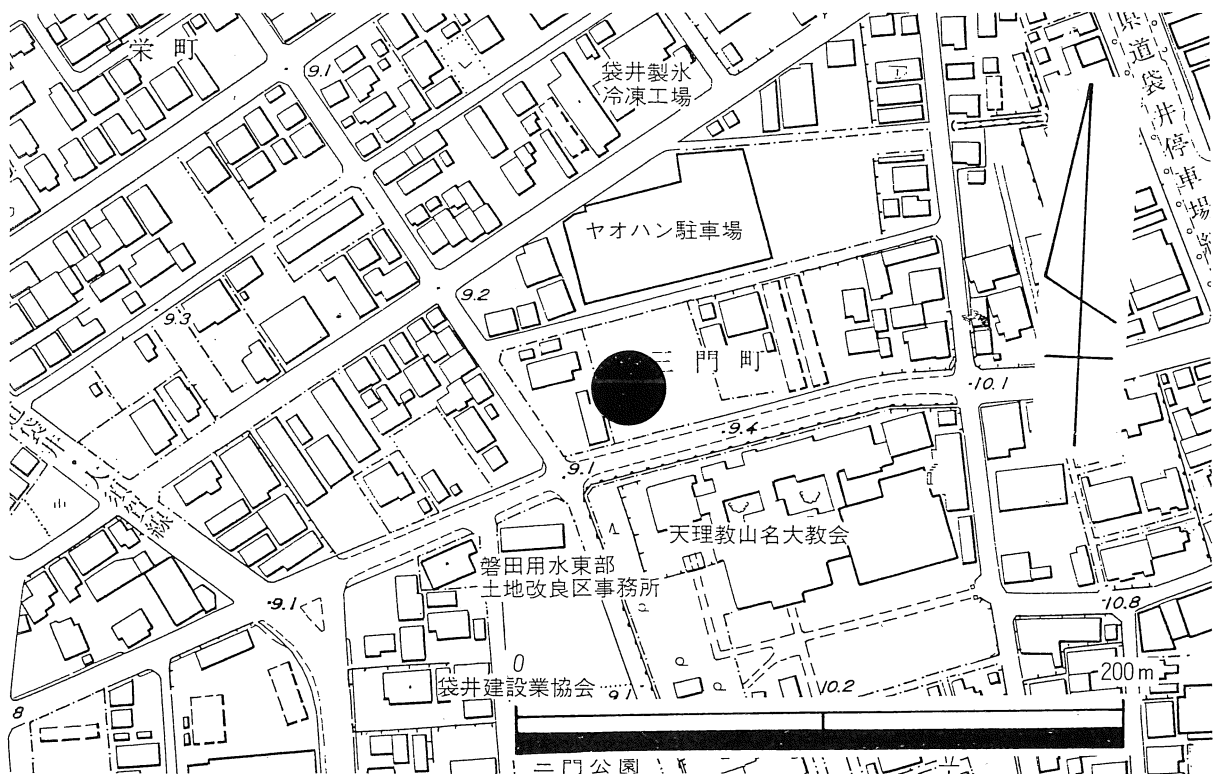
(松井 一明)



第20図 高尾向山6号墳位置図



写真3 高尾向山6号墳航空写真（北より） 手前高尾向山遺跡方形周溝墓群発掘調査区



第21図 御所森古墳位置図

ごしょのもり
9. 御所森古墳

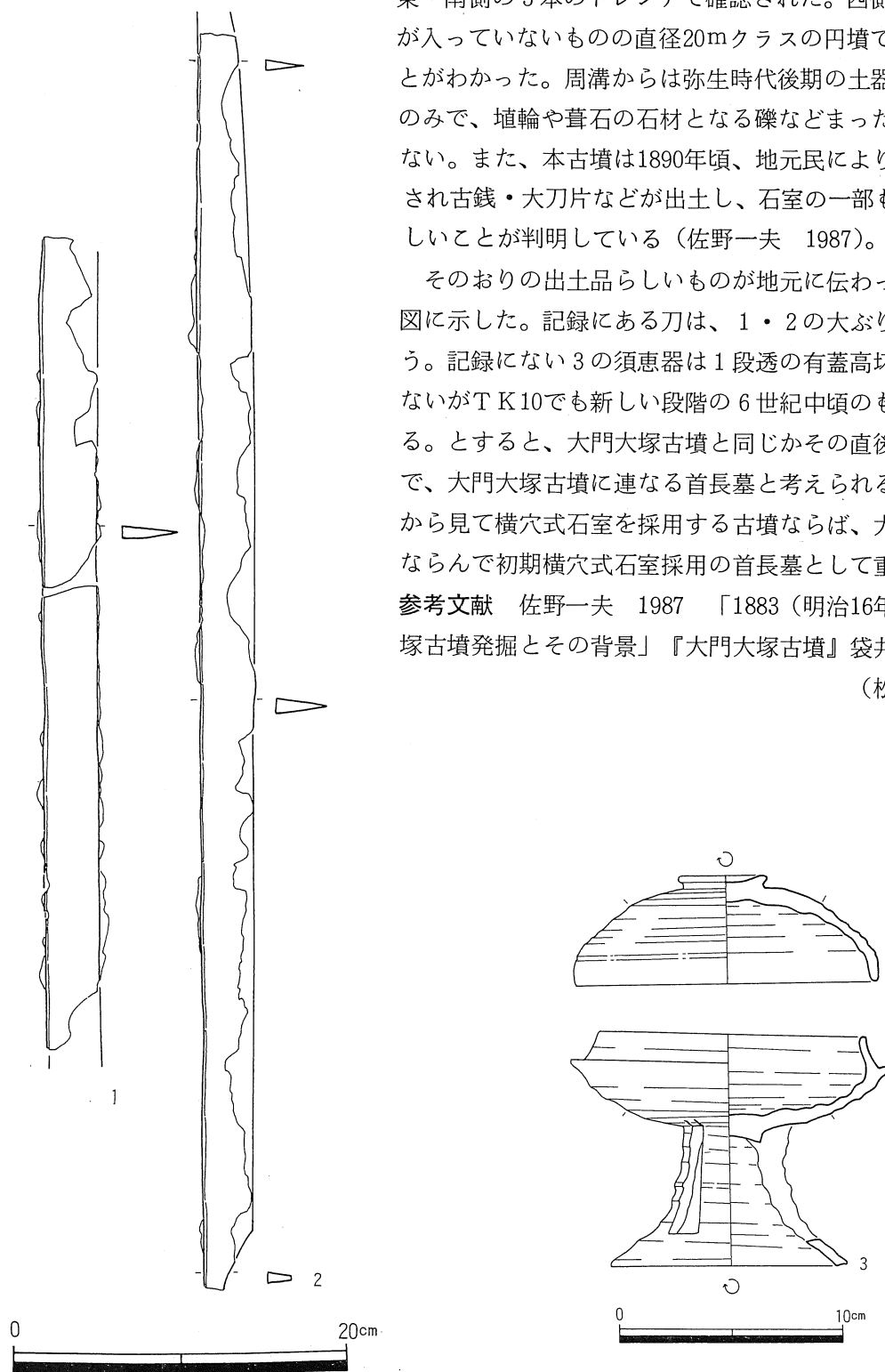
御所森古墳は標高 9 m を測る平地の微高地上に立地している。周辺の市街化が早くから進んでいたため単独墳であるかどうかかわからないが、地元では本古墳付近に他の古墳があった言い伝えはない。

測量調査は実施されていないが、1983年に周溝の範囲確認調査がなされ周溝らしい落ち込みが北・

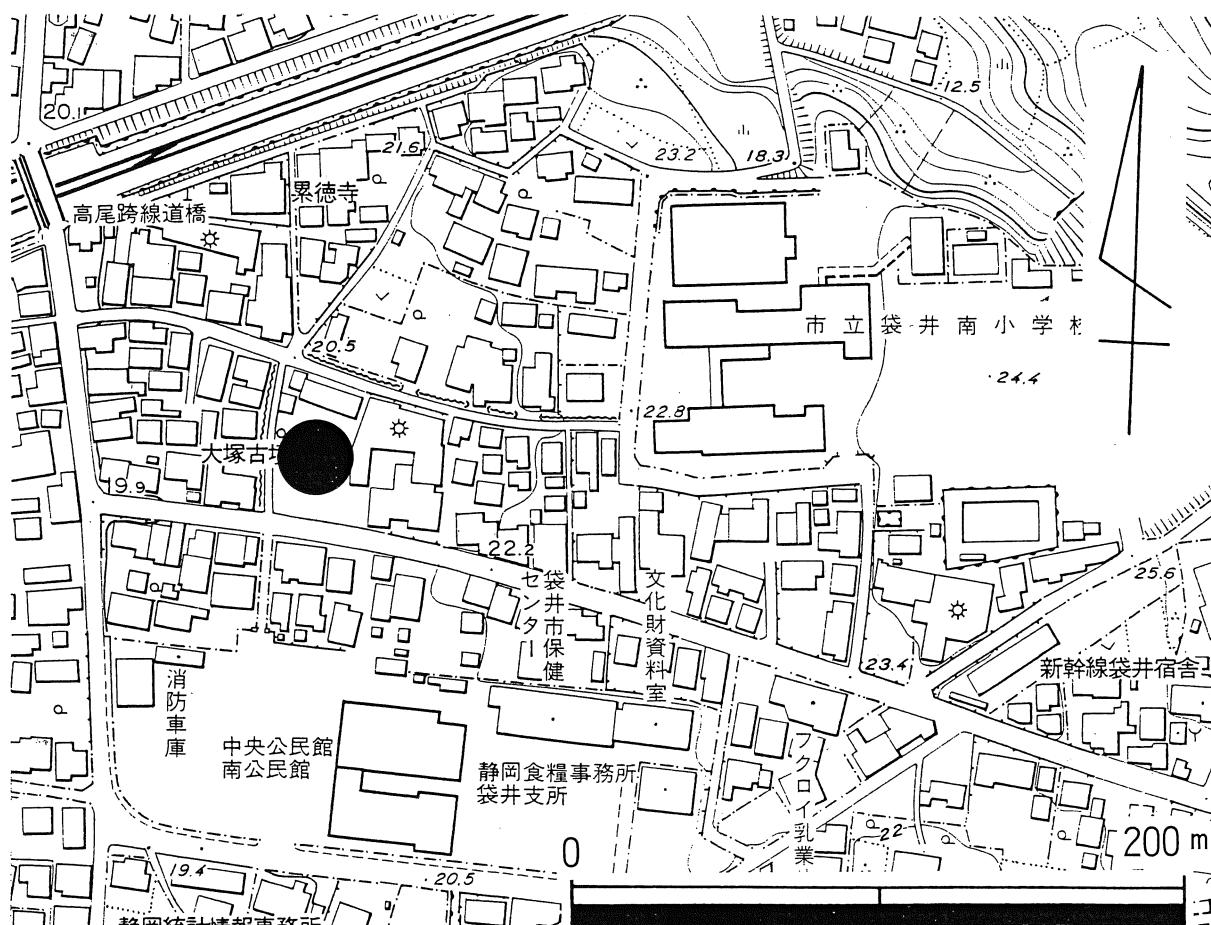
東・南側の 3 本のトレンチで確認された。西側にはトレンチが入っていないものの直径 20 m クラスの円墳であるらしいことがわかった。周溝からは弥生時代後期の土器片が出土したのみで、埴輪や葺石の石材となる礫などまったく出土していない。また、本古墳は 1890 年頃、地元民により発掘調査がなされ古銭・大刀片などが出土し、石室の一部も掘りあてたらしいことが判明している（佐野一夫 1987）。

そのおりの出土品らしいものが地元に残っており、第 22 図に示した。記録にある刀は、1・2 の大ぶりの直刀であろう。記録にない 3 の須恵器は 1 段透の有蓋高坏で、類例は少ないが T K 10 でも新しい段階の 6 世紀中頃のものと考えられる。とすると、大門大塚古墳と同じかその直後の築造の古墳で、大門大塚古墳に連なる首長墓と考えられる。過去の記録から見て横穴式石室を採用する古墳ならば、大門大塚古墳とならんで初期横穴式石室採用の首長墓として重要である。

参考文献 佐野一夫 1987 「1883（明治 16 年）年の大門大塚古墳発掘とその背景」『大門大塚古墳』袋井市教育委員会（松井 一明）



第22図 御所森古墳出土遺物



だいもんおおつか
10. 大門大塚古墳

本墳は、明治16年（1883年）に静岡県庁より派遣された官吏の立合いのもとに、地元民が多数参加して発掘が進められた。当時の記録からすれば、これは明治政府による陵墓取り調べの一環として実施されたものであった。

その後、大門大塚の取り扱いに関する意見が提出され、昭和61年に、詳細な基礎資料の収集を目的とし、再度発掘調査を行った。以下では、その成果を基に述べることにする。

まず墳丘は、直径約26mの円墳で、その外周には、推定で幅5～6m、深さは1～1.5mの周溝が全周するものと考えられる。墳丘の高さは約4.5mで、地表には葺石・外護列石は認められない。また、『静岡県史』第1巻に、周囲で埴輪の破片を拾得したとする記録があるが、現在は確認できず、トレンチ調査によっても検出できなかった。

一部のトレンチの断面の成果を基にすれば、当墳の墳丘のほとんどが盛り土によって形成されており、周縁に土塁状の堤を設けてその内側を充填する構築方が想定される。

主体部は、明治16年の発掘時にかなり改変されており、旧状をとどめる部分は極僅かであるが、基本的には、奥と左右の側壁には楕円形の礫を積み上げ、天井には長さ2m前後の盤状石を架構する横穴式石室である。残存部がいずれの壁でも基底面から2～3段前後で、推定の部分が多いが、平面形態は長方形で、幅1.6m前後、全長は残存している範囲で3.6mを計り、主軸方位はN-30°30'-Wをなし、南東方向に開口する。

『静岡県史』第1巻によれば、「石廊中央の大石2個により前後に分かれ、前室には丸石が詰め込まれていた。遺物は前室に置かれてあった。」とあることからすれば、所謂、「袖石」もしくは「立



写真4 大門口古墳航空写真（東より）

柱状の石」による擬似的な造作が行われていた可能性が考えられる。

床面も、明治16年の発掘により多くを破壊されている。奥壁から1.4mで開口部へ向かって約20cm高くなり、更に2.7m前後でも20cm高くなり階段状を呈する。この状況からすれば、玄室に遺体を置く空間がほとんど存在しないことになる。そこで、復元案の第1に、奥壁から1.4mの範囲を20cm分床面として埋めてみる。そうすることによって、奥壁からは2.7mの平坦な床面が完成する。側壁はこのことによって約一段分、基底部分が埋まった状態となる。ただし、このような床の構築順序は類例が無く、旧状を留めると考えていた部分もすべて、後世の積み直しと考えることもできる。この場合の復元第2案としては、開口部から玄室に一段下がった床面を有する形態が考えられ、壁面の基底部分は当初からほぼ水平で床面に隠れることがない。

いずれの案を採用するにしても、『静岡県史』第1巻の記録は重要で、「大石2個」によって前後に分かれているとしていることから、「袖」による区分けを行っていたことが推察される。以上より、「両袖」か「擬似的な両袖」で、玄室と羨道は段差をもっている石室形態が考えられる。

復元案のいずれにしても、近年伊勢湾岸の地域で資料が増加している所謂、「竪穴系横口式石室」の範疇に入るものと判断され、壁面に使用されている石材にベンガラ（ Fe_2O_3 ）が塗布されている事実も特徴的なことである。

次に、出土遺物であるが、現在確認できるものとして須恵器杯蓋9点、杯身11点、高杯1点、平瓶1点、有蓋脚付短頸壺1点、器台1点、土師器杯蓋2点、杯身2点、f字形轡鏡板1対、楕円形轡鏡板1点、剣菱形杏葉5点、鉸具1点、辻金具5点、大刀1点、剣2点、刀子1点、鉄鏃3点、銀環1対、銀製空玉8点、トンボ玉8点、ガラス玉106点、管玉13点、三神三獸鏡1点、獸形鏡1点がある。



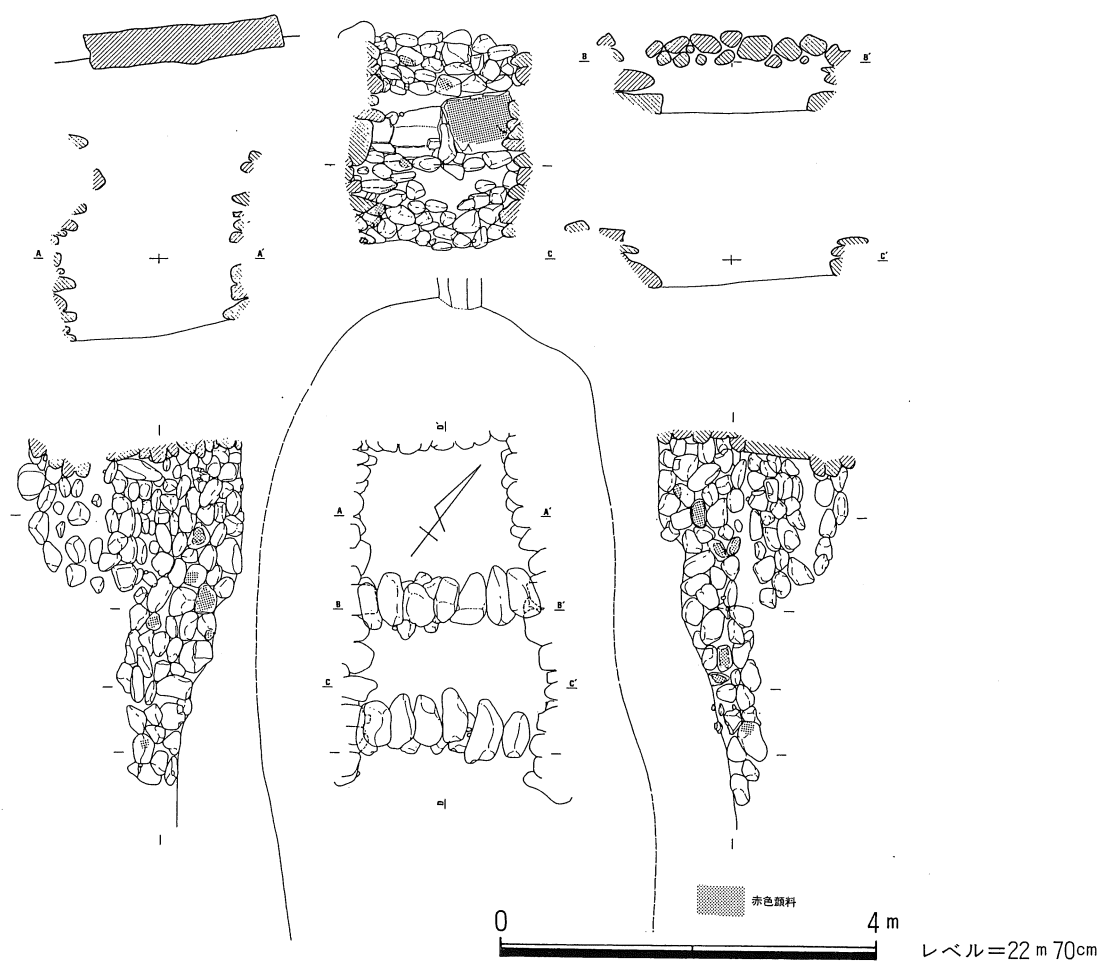
第24図 大門大塚古墳墳丘測量図

個々の特徴として、須恵器の杯蓋・身ともに内面に同心円のタタキ痕を有することが挙げられる。トンボ玉は、紺色のガラス地に黄色あるいは緑色の斑紋を1～3箇所作り出している。馬具は、鉄台に透かし金具を載せ、銀被せ鋌により金銅板を密に鋌止めしている。

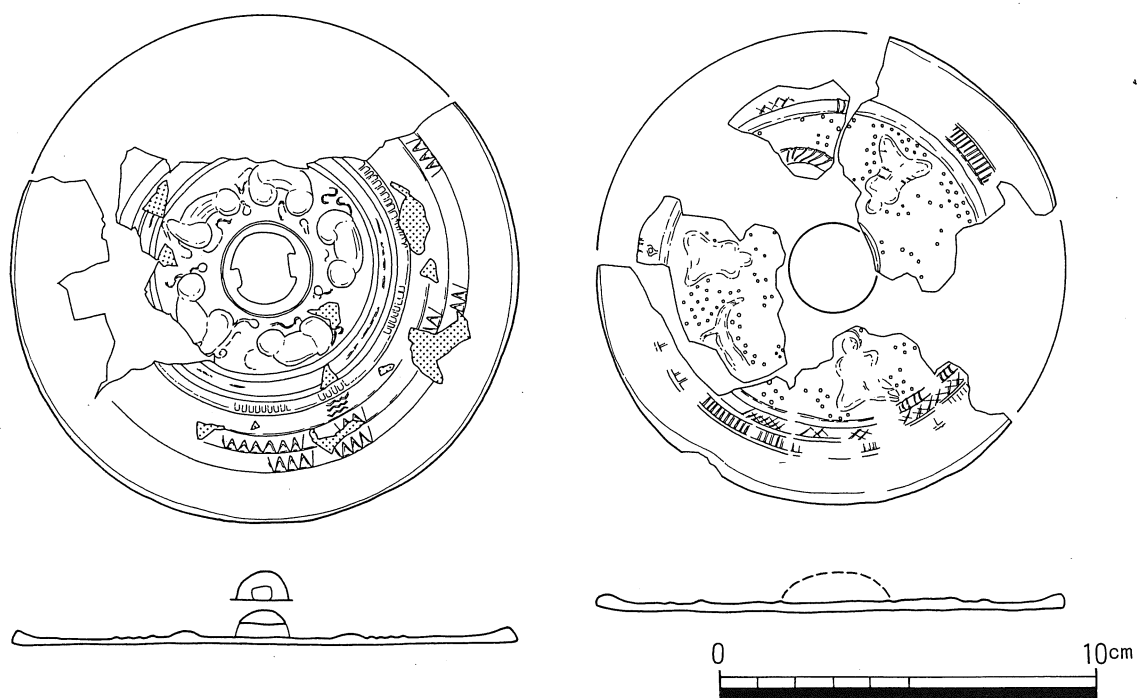
以上の石室と遺物の特徴から、築造時期は6世紀の中葉ごろを想定しており、近年調査された市内の高尾団子塚6号墳との関係も注目される。

参考文献 袋井市教育委員会 1987 『大門大塚古墳』

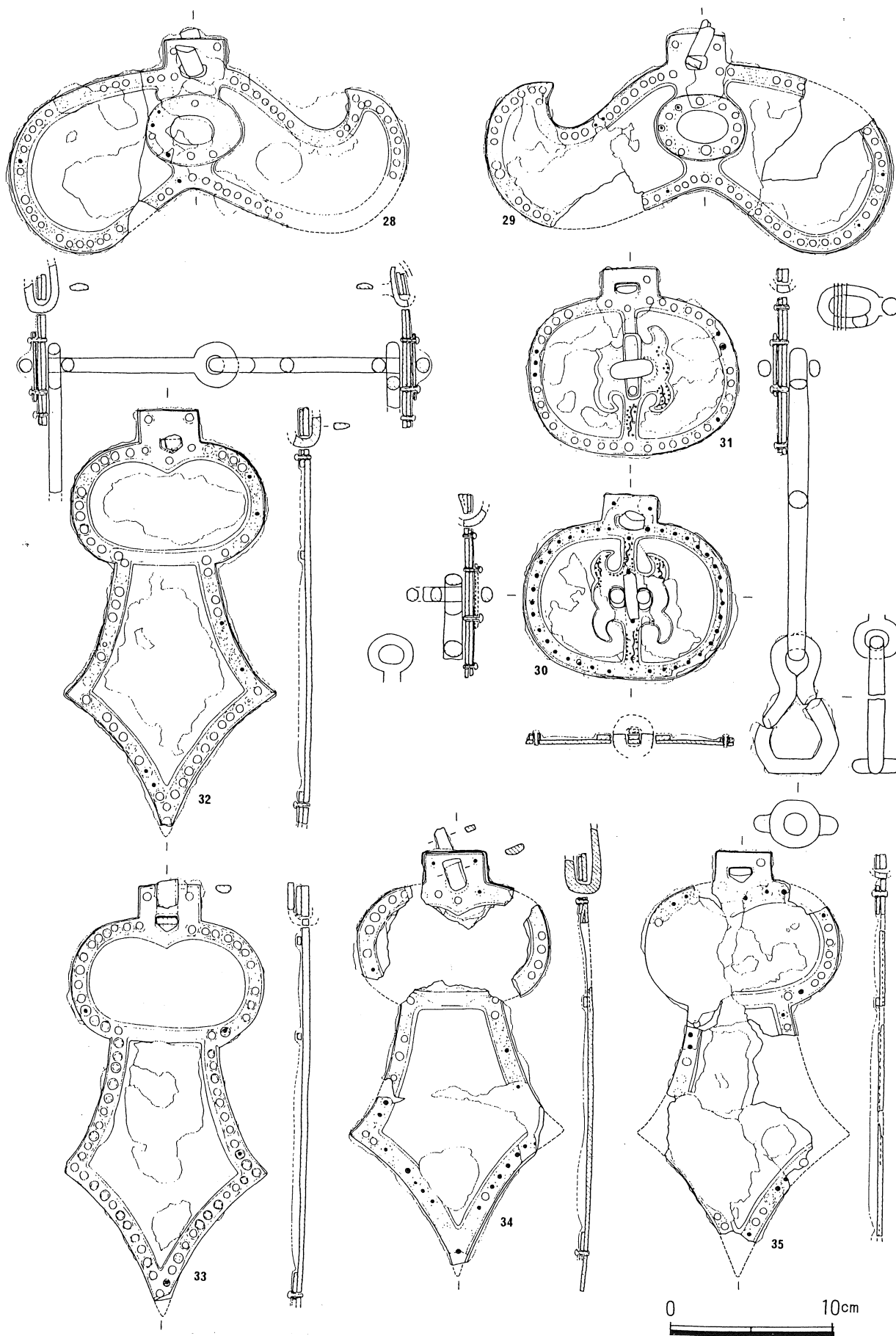
(白澤 崇)



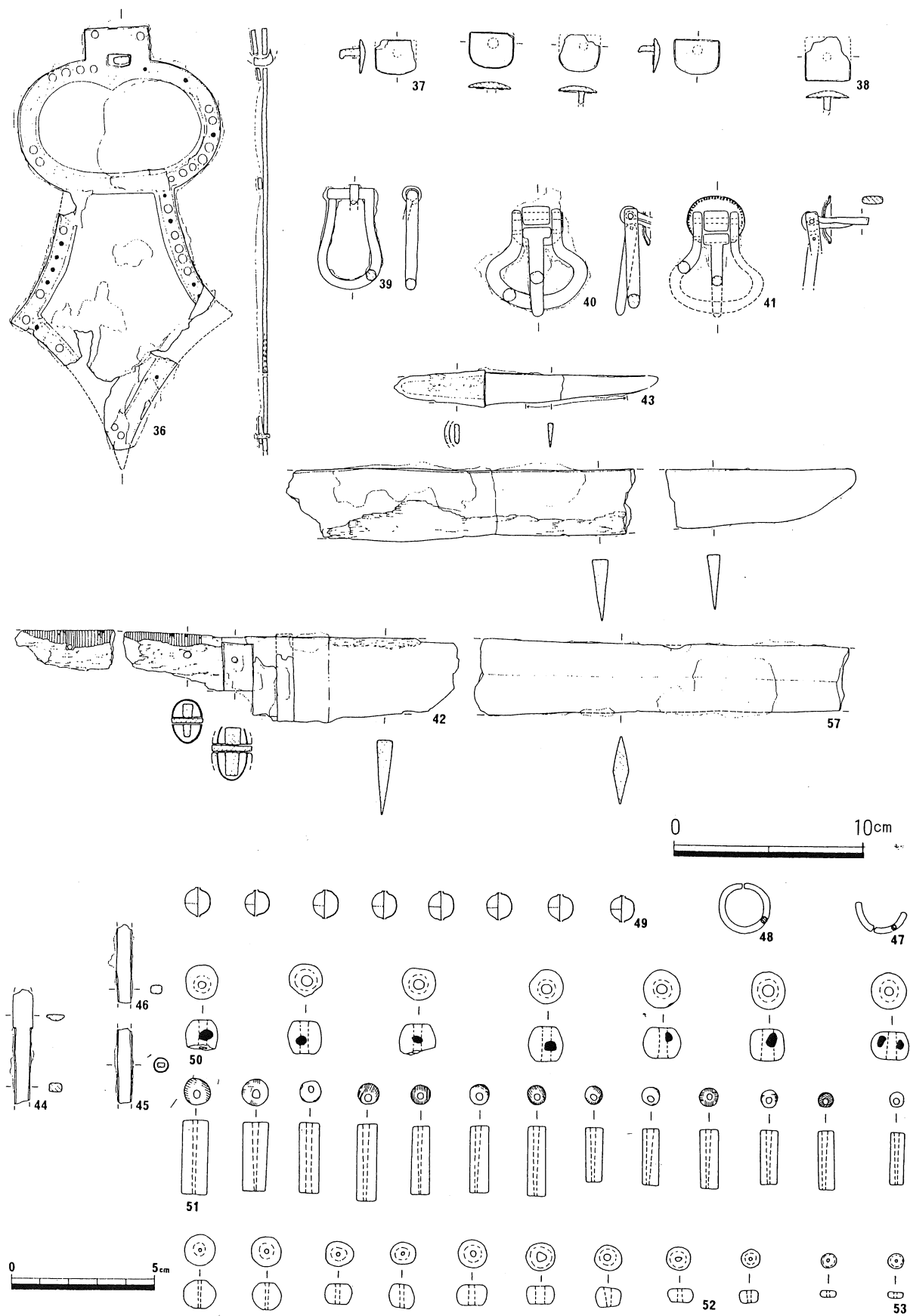
第25図 大門大塚古墳石室実測図



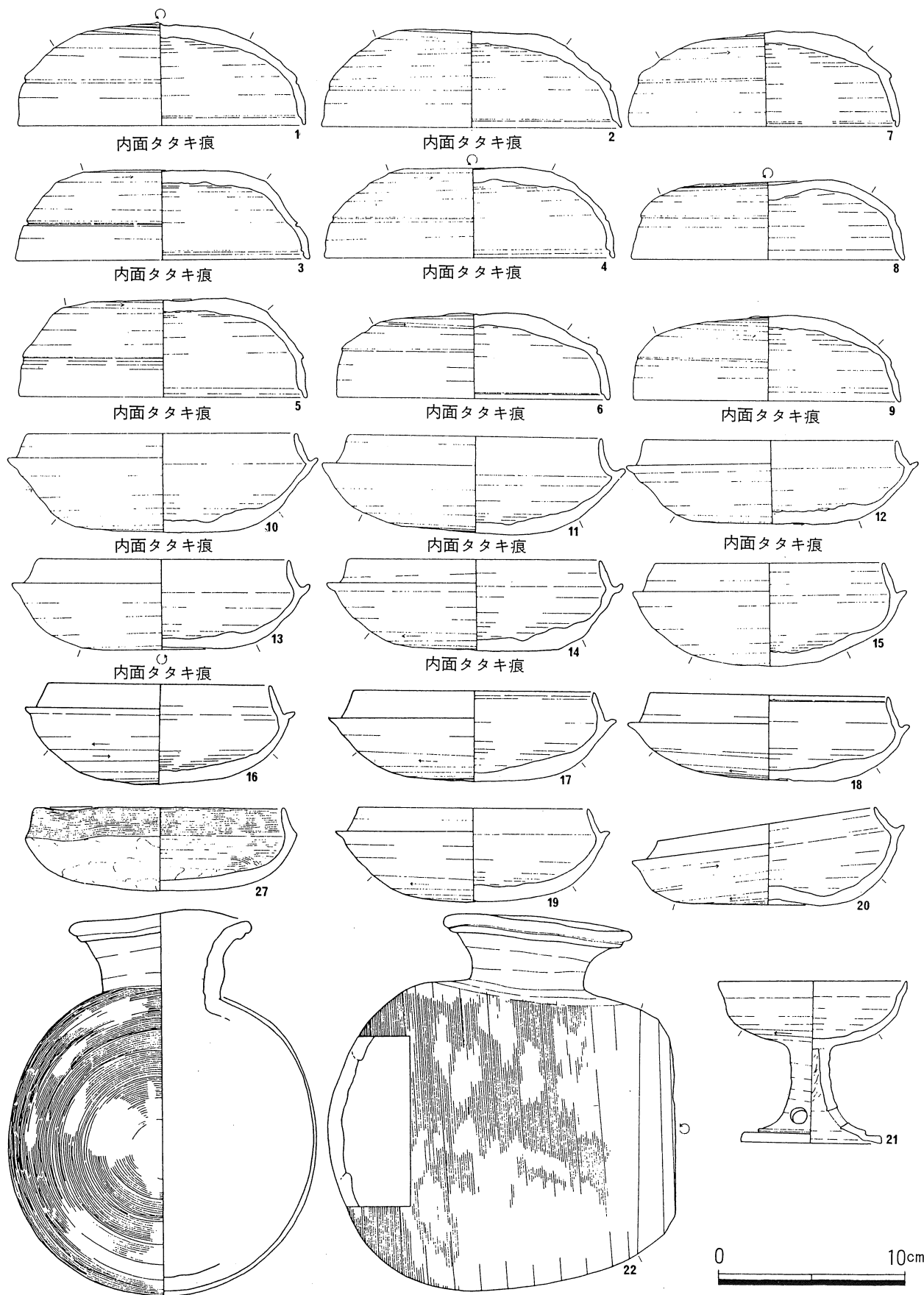
第26図 大門大塚古墳出土遺物実測図（1）



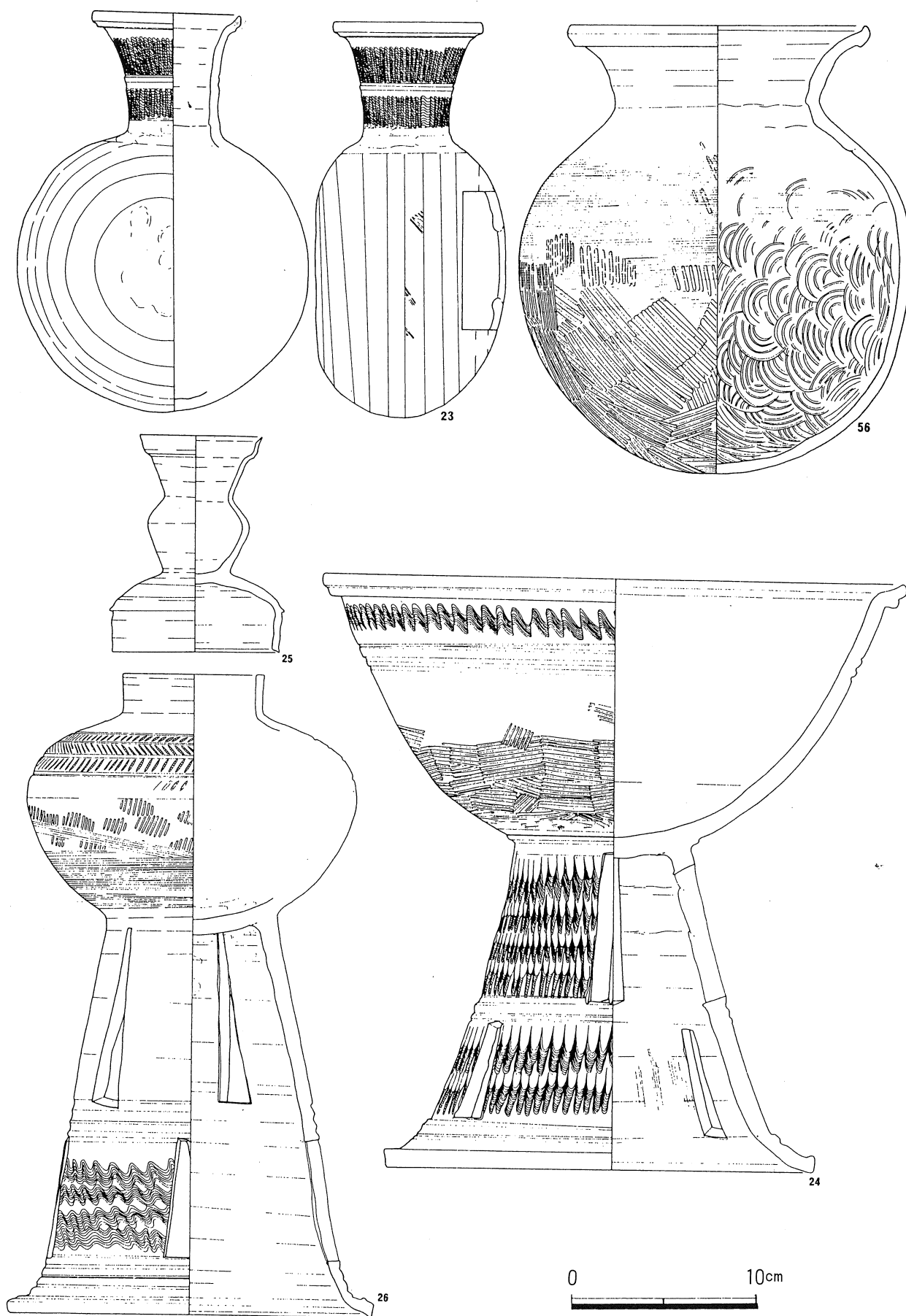
第27図 大門大塚古墳出土遺物実測図（2）



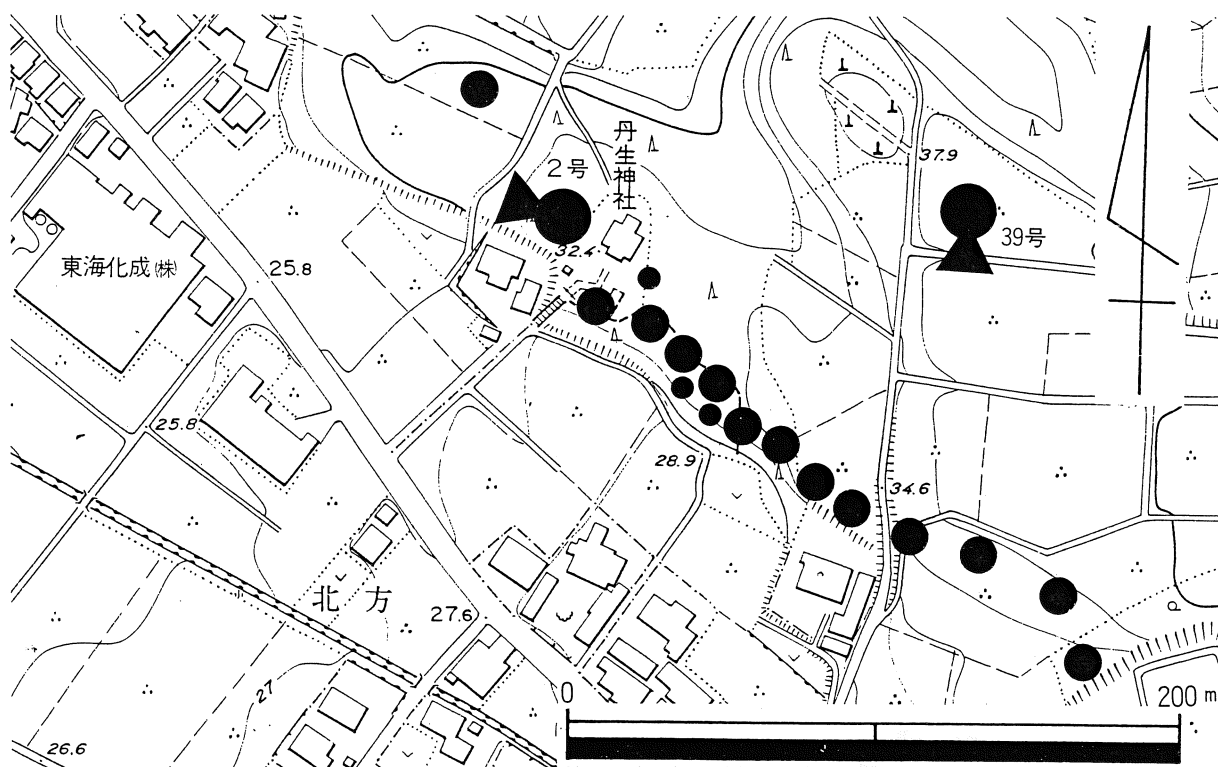
第28図 大門大塚古墳出土遺物実測図（3）



第29図 大門大塚古墳出土遺物実測図（4）



第30図 大門大塚古墳出土遺物実測図（5）



第31図 長者平古墳群位置図

11. 長者平古墳群

1) 丹生神社古墳(長者平2号墳)

総数56基からなる長者平古墳群は、一部に木棺直葬の可能性があるものの、その大半が主体部に横穴式石室を採用している。また、墳形は2号墳と39号墳が前方後円墳である他は、直径15～18m前後の円墳を主体とする。

2号墳は、全長30m、後円部径18m、前方部幅17m、後円部高2.4m、前方部高1.8mを計る。古墳群中でも、西端に立地し、後述する39号墳の対峙する位置にある。

出土遺物は、先年、後円部付近で第31図の1に示した須恵器の器台が採集されている。長方形のスカシ窓が二段穿たれており、中央に沈線が巡り、その上下にそれぞれ4条の波状文を施している。

2) 長者平39号墳

本墳は、先の2号墳の東方約100mに立地する。調査区の端で検出したため、全容は把握できないが、長さ約12.5m、幅3mの長方形の溝を検出した。

この付近は、小型の前方後円墳が立地していたと伝えられる場所であり、前方部側の周溝の一部である可能性がある。ただし、前方後円墳の本体の規模がまったく不明であり、推測の域をでない。

以上の2号墳、39号墳の築造年代については、正確な資料に欠けるが、周辺の古墳群の状況からして、ほぼ6世紀前葉を前後する時期を考えている。

参考文献

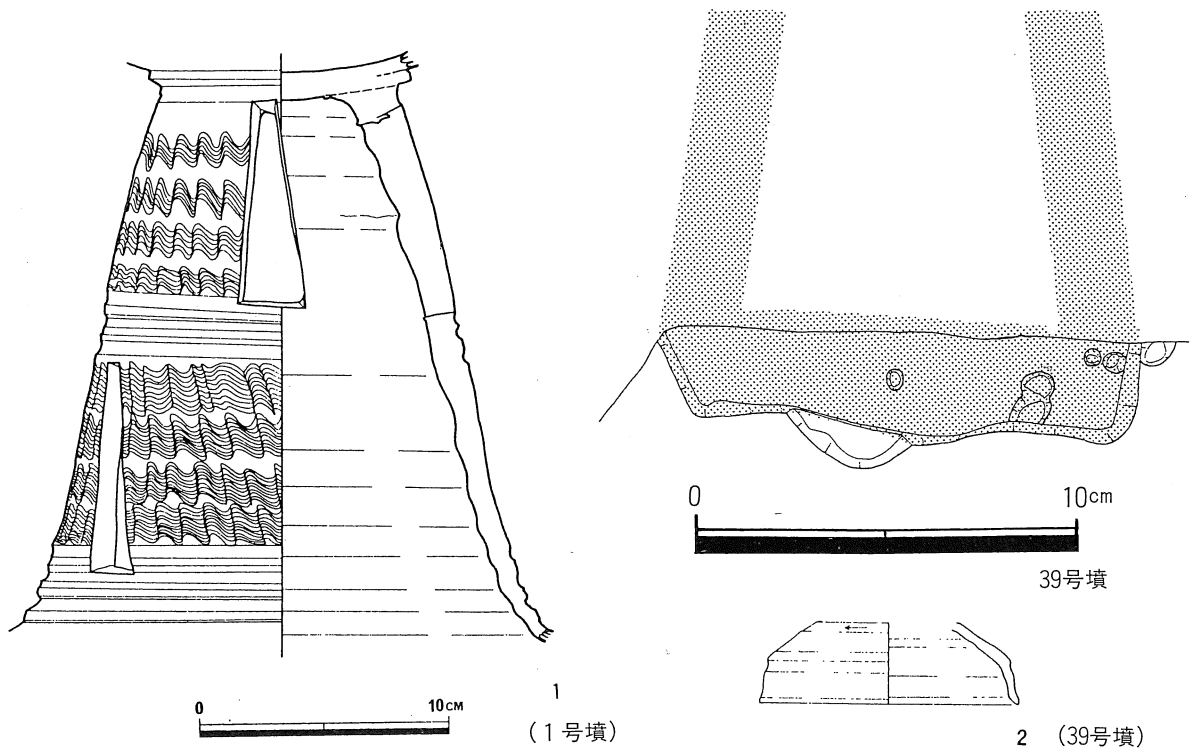
袋井市教育委員会 1981 『袋井市長者平遺跡』

袋井市教育委員会 1984 『長者平遺跡』

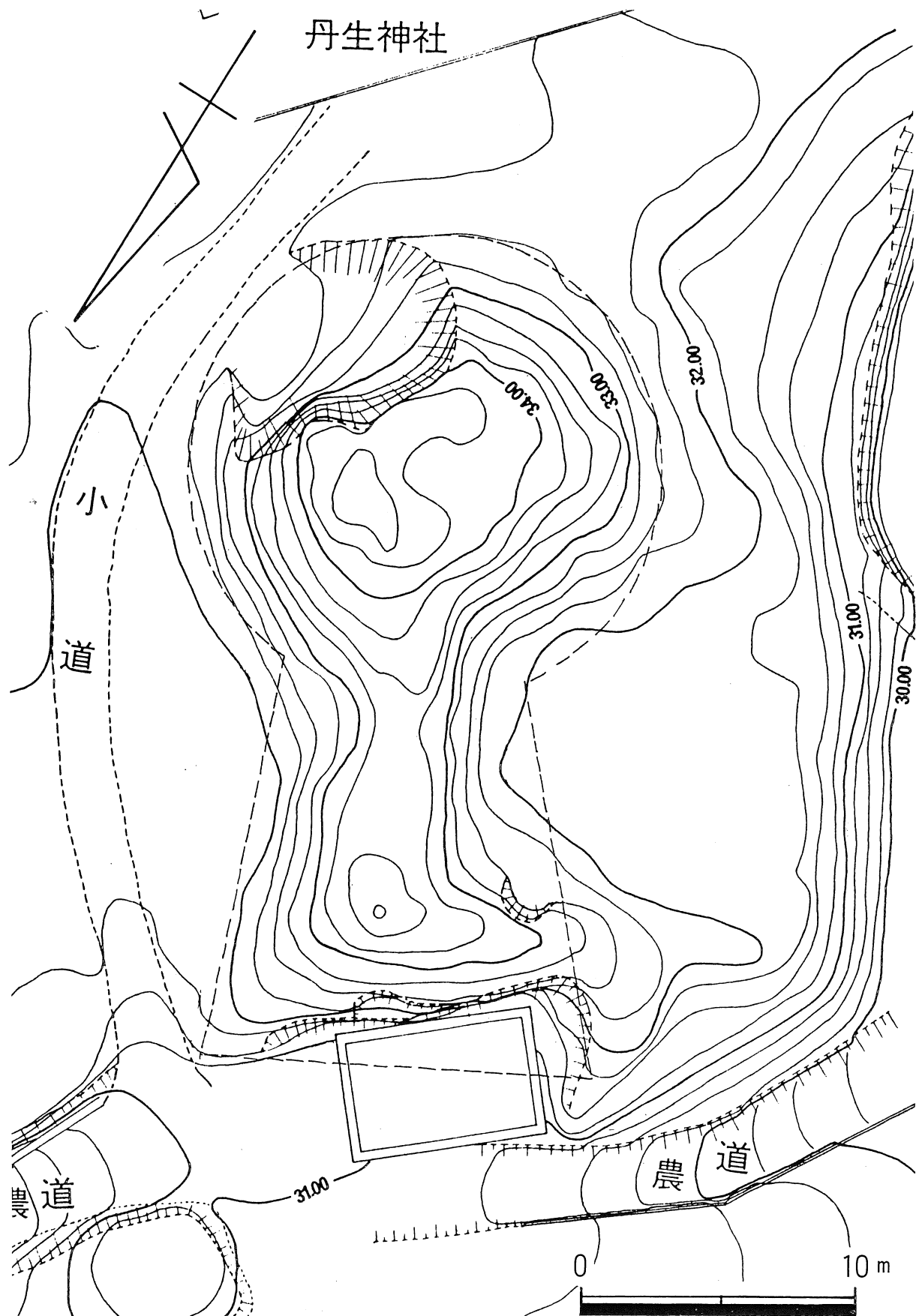
(白澤 崇)



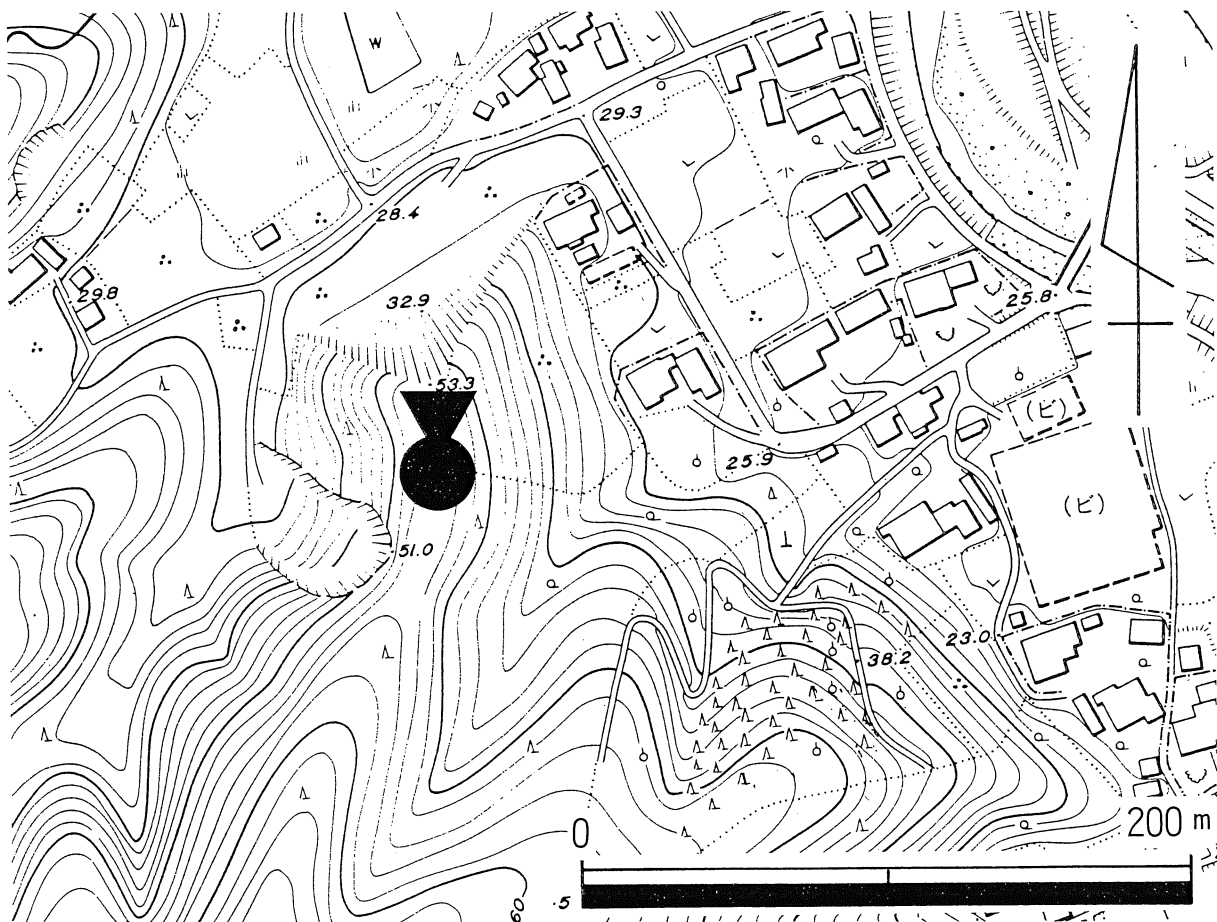
写真5 長者平2号・39号墳航空写真（北西より）



第32図 長者平2号・39号墳遺物実測図及び遺構図



第33図 長者平 2 号墳墳丘測量図



第34図 川会坊主山古墳位置図

12. 川会坊主山古墳

当墳は、市内の北西部に位置し、磐田原台地の東端部に立地する。古墳の眼下、東方200mには敷地川が流れている。平野部からの比高差約26mで、南北方向に伸びる尾根の先端部に立地する前方後円墳である。

全長は約30mで、後円部径18m、前方部長12m、前方幅14mを計る。前方部の方向は、従来南北方向に推定されてきたが、今回の測量調査の成果を基にすれば、北方向に前方部を設けていることがわかる。また、後円部を形成するために、その南側を4～5mの幅で尾根を切断している。

先年、土取り工事によって、墳丘の西側の多くを破壊されたが、その際、円筒埴輪が採集されている。現在も墳丘表面に、円筒埴輪片が散乱しており、明確な配列は不明であるが、円筒埴輪列が存在するようである。また、墳丘上の広範囲に円礫が認められ、葺石も存在するものと考えられる。

主体部は、昭和初年に茶畑の開墾中に発見されたが、円礫が多く出土したということからすれば、礫塚の可能性もある。また、この遺物の多く出土した位置が、前方部とも伝えられており、主体部が複数存在した可能性がある。

副葬品には、鏡3面、大刀1点、管玉10点、丸玉3点がある。この内、鏡一面は、径8.6cmの小型の変形獣形鏡で、背面には赤色顔料が付着している。もう一面は、細片であるが、僅かに残る文様から、小型の珠文鏡であると考えられる。三面目の鏡は、大型の鏡であったと伝えられるが、残念ながら現存しない。

管玉は、グリーンタフ製で、径5mmと径7mm前後の二者に大別でき、ほぼ片側から穿孔している。



写真6 川会坊主山古墳航空写真（東より）

表面から採集した埴輪を観察すると断面M字の突帯が巡り、外面調整は1次調整にタテハケを施し、2次調整は省略されている。内面調整には、ヨコハケ・ナデが観察される。

特徴的なこととしては、第36図の11～14に示したような、円筒埴輪の基底部に外面1次調整タテハケの後、ヘラもしくは、板状の工具によって、横位から斜位に板ナデもしくはケズリ調整を行っていることである。

スカシの形態については、現在確認されているもの何れも、円形である。

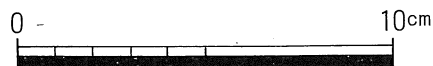
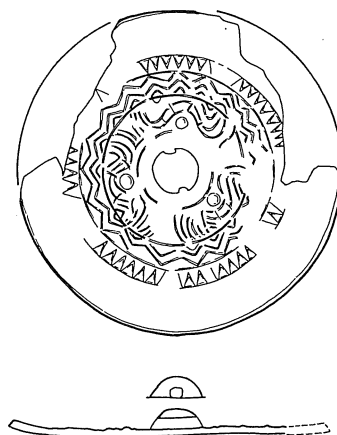
正式な発掘調査は未だ行われていないため、円筒埴輪の全容の解るものは存在しないが、朝顔形や形象埴輪に繋がる破片は採集されていない。焼成状態は、何れも無黒斑である。

第36図の原図は、鈴木敏則氏によるもので、同氏より多くのご教示を得た。記して感謝します。

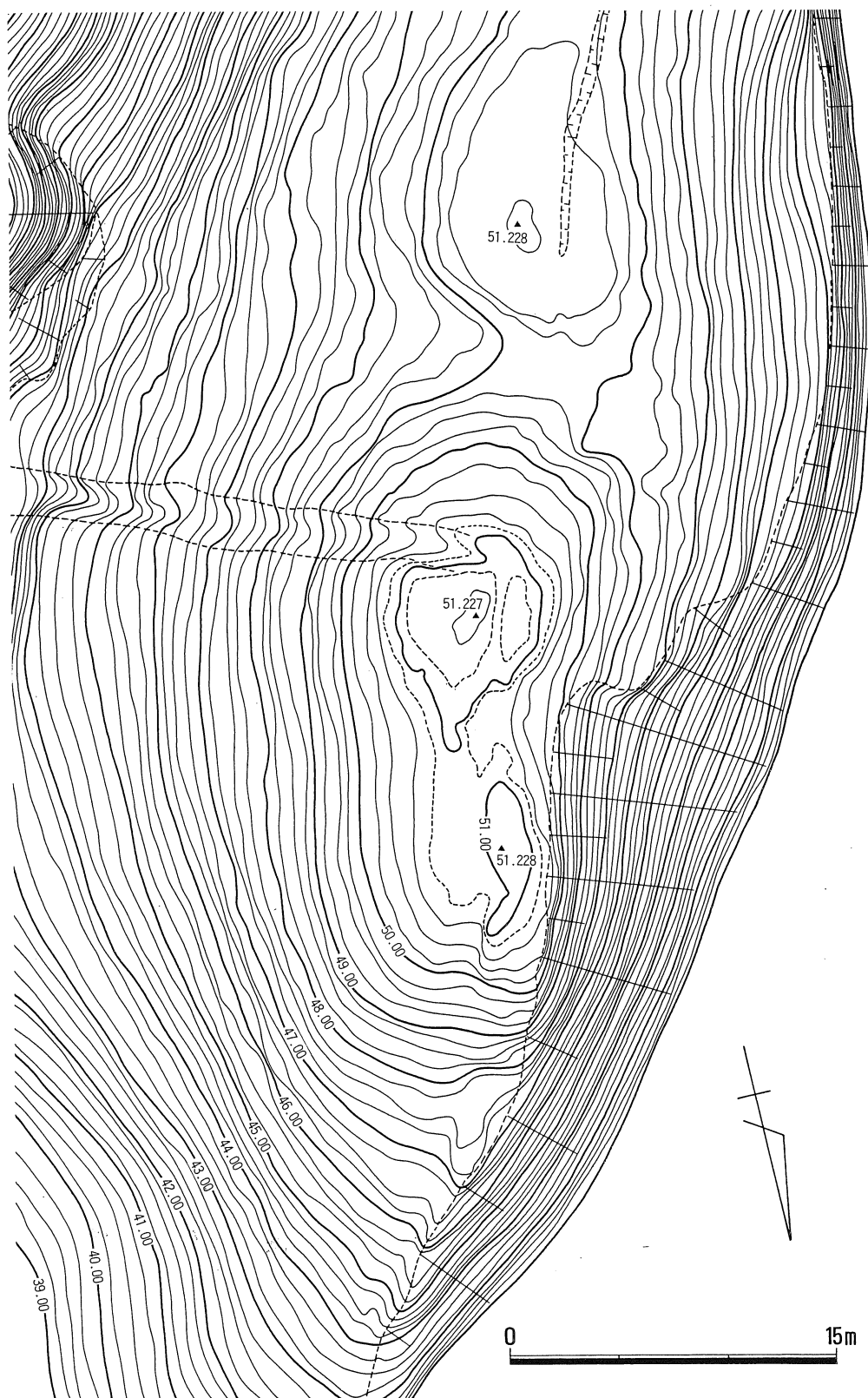
参考文献 袋井市 1986 『袋井市史』通史編

静岡県 1990 『静岡県史』資料編2

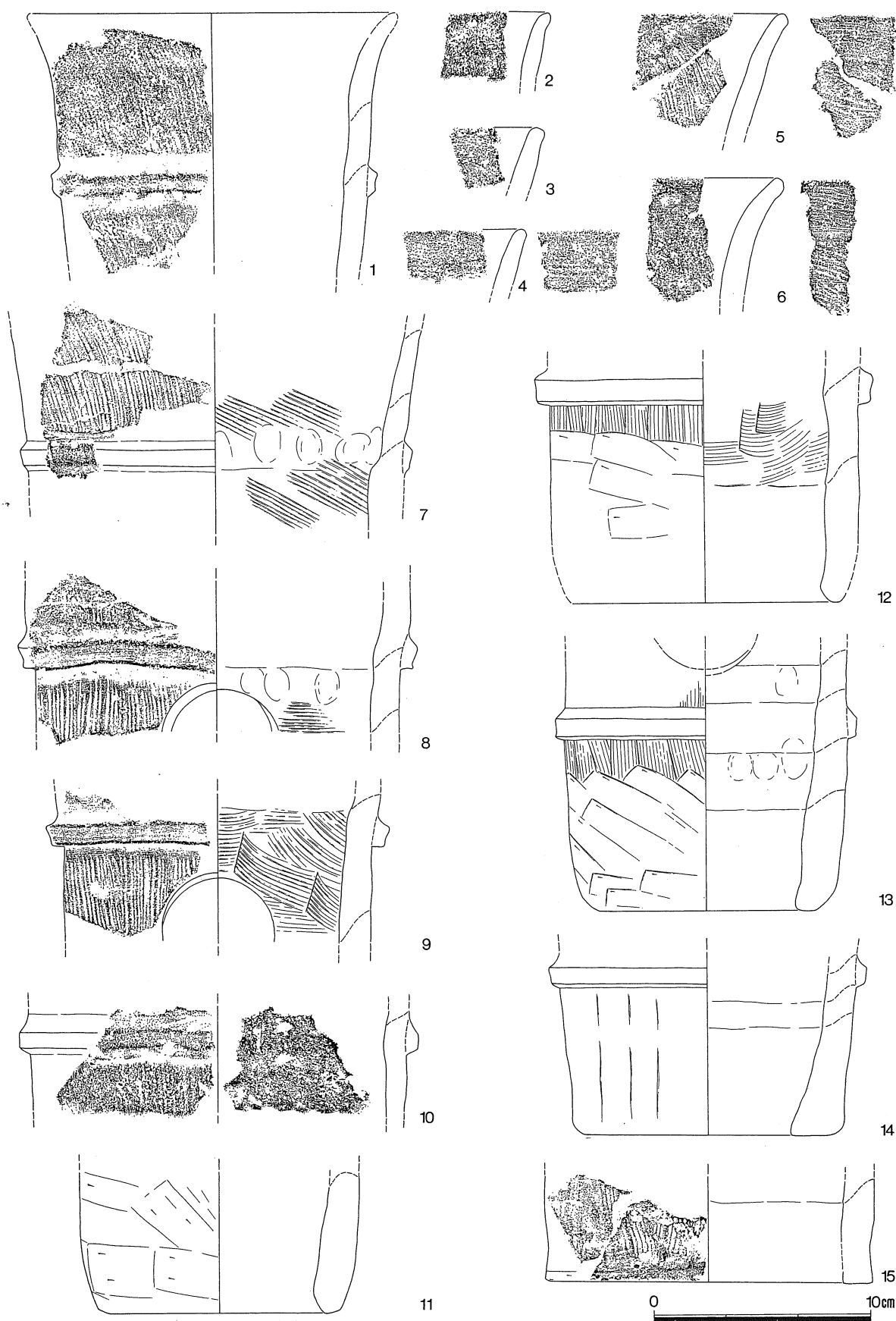
（白澤 崇）



第35図 出土鏡実測図



第36図 川会坊主山古墳墳丘測量図（関西大学考古学研究室トース）



第37図 川会坊主山古墳出土埴輪実測図

【袋井市所在の古墳関係報告書目録】

日本国有鉄道	1965	『東海道幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』「地蔵ヶ谷古墳及び横穴」「谷坂第1・2・3号墳」
袋井市教育委員会	1972	『袋井市雲座古墳D単位群発掘調査概報』
川井 正一	1976	「袋井市地蔵ヶ谷横穴群の問題点」『森町考古』10
袋井市教育委員会	1977	『道ヶ谷古墳群調査概要』
袋井市教育委員会	1978	『山本山古墳群』
袋井市教育委員会	1978	『袋井市井戸ヶ谷第1号墳の調査』
袋井市教育委員会	1981	『袋井市長者平遺跡』
袋井市教育委員会	1982	『長者平古墳群』
袋井市教育委員会	1982	『鶴松古墳群・機ヶ谷古墳群』
静岡県教育委員会	1983	『遠江の横穴群』
袋井市役所	1983	『袋井市史』通史編
袋井市教育委員会	1984	『長者平遺跡』
袋井市教育委員会	1985	『宇刈の横穴』
袋井市役所	1986	『目でみる袋井市史』
袋井市教育委員会	1987	『大門大塚古墳』
袋井市教育委員会	1987	『愛野向山A—2・3・4号墳』
松井 一明他	1987	「静岡県愛野向山遺跡」『日本考古年報』38
袋井市教育委員会	1988	『愛野向山A—8号墳 愛野向山墳墓群 愛野向山IV遺跡』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所・袋井市教育委員会	1990	『高尾向山遺跡』
袋井市教育委員会	1990	『権現山遺跡』
袋井市教育委員会	1990	『若作遺跡・若作古墳群』
静岡県	1990	「山田原古墳群」『静岡県史』資料編2 考古二
袋井市教育委員会	1991	『袋井市三沢古墳群』
袋井市教育委員会	1992	『団子塚遺跡—遺構編一』
袋井市教育委員会	1992	『宇佐八幡境内遺跡』
袋井市教育委員会	1993	『川田、藤蔵淵遺跡』

第4章 袋井の首長墓を考える

第1節 座王権現神社古墳にみる東海東部地域の古墳発生の様相

1. はじめに

今回の報告の中で最も注目される成果の一つとして、座王権現神社古墳が前方後方墳であることを確認できたことがあげられる。しかも前方部がばち形に広がる形態で、採集土器から考えても静岡県下最古の古墳になる可能性がでてきたことである。この形式の前方後方墳は静岡県下では知られていない形式であるうえに、おそらく後述するとおり東国の古墳出現過程に係わる極めて重要な位置を占める古墳となることが予測される。

本節では座王権現神社古墳に採用された前方後方墳が、まず静岡県下でどのような状況にあるかを考え、それが東海地域でどのような展開をするのか考察を試みたい。そのうえで座王権現神社古墳がもっている前方後方墳に係わる古墳発生の様相についての一つの問題提起を試みたい。

2. 静岡県下の前方後方墳

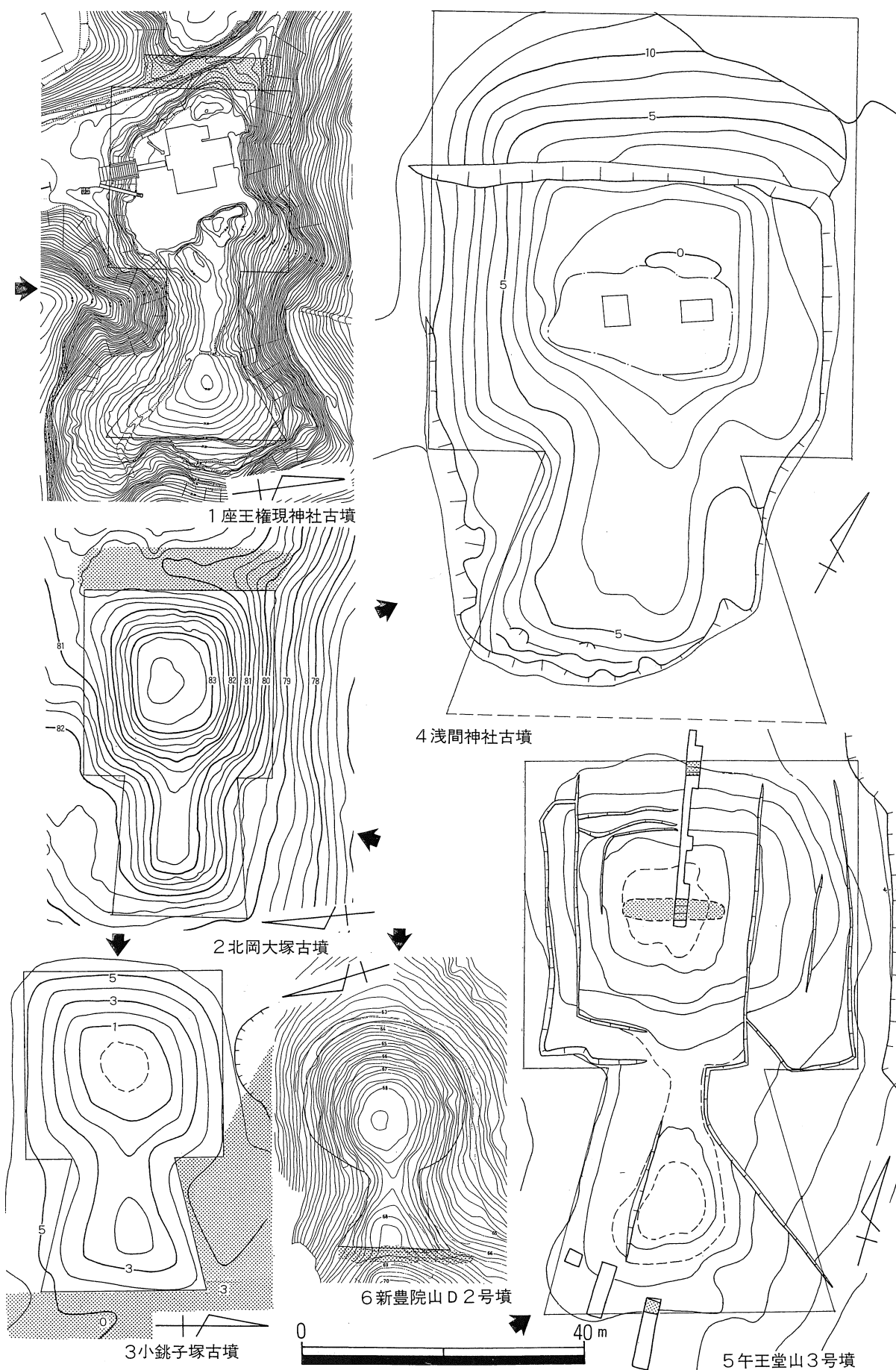
静岡県下で前方後方墳として確認されている古墳は座王権現神社古墳を含めても、第38図に示した5例にすぎない。以下各古墳について比較検討し、さらに従来静岡県下最古の前方後円古墳といわれる新豊院山D2号墳との比較検討を試みたい。

引佐町北岡大塚古墳は、1979年に測量調査が実施され報告書も刊行されている（引佐町教育委員会1981）。規模は全長46.5m・後方部長26.5m・同幅26.5m・前方部長20m・同幅20mを測る。次に、後述する各古墳の平面形態を比較するについて、平面形の数量化を図るため前方部長比率＝前方部長÷後方部長、前方部幅比率＝前方部幅÷後方部幅、前方部角度＝第38図6参照の数値を示す事とした。北岡大塚古墳の前方部長比率は75%、前方部幅比率は75%、前方部角度は84°を測り、幅が広くやや長めであまり裾が広がらない形態の前方部となる。後方部東側には周溝らしい窪地がみられる。眺望はおもに平野部が広がる南側に関け、平野部から見ると古墳の側面が観察される。

磐田市小鉢子塚古墳は1954年に測量調査が静岡大学により実施され、内藤晃氏により測量図が公表されている（内藤晃 1958）。規模は全長46m・後方部長26.5m・同幅28.5m・前方部長19.5m・同幅23.5mを測る。前方部長比率は74%、前方部幅比率は82%、前方部角度は78°を測り幅が広く長さは長めで裾が広がる形態の前方部となる。前方部東・北側には周溝らしい窪地がみられる。眺望はおもに平野部が広がる西側に関け、平野部から見ると古墳の側面が観察される。

清水市午王堂山3号墳は1954年に発掘調査が静岡大学により実施され測量図が公表されている（静岡県 1990）。規模は全長78m・後方部長43m・同幅47m・前方部長35m・同幅40mを測る。前方部長比率は81%、前方部幅比率は85%、前方部角度は74°を測り幅が広く長さは長めで少し広がる形態の前方部である。前方部南・後方部北側の墳丘裾に敷石帯が確認されている。眺望はおもに平野部が広がる南西側に関け、平野部から見ると古墳の側面が観察される。

富士市浅間神社古墳は1954年に測量調査が静岡大学により実施され、内藤晃氏により測量図が公表されている（内藤晃 1958）。規模は全長100m・後方部長62m・同幅60m・前方部長38m・同幅53mを測る。前方部長比率は61%、前方部幅比率は88%、前方部角度は70°を測り幅が広く長さはやや短めで裾が広がる形態の前方部である。眺望はおもに平野部が広がる南・西・東側に関けるが有力集落は南東方向にあるらしい。平野部から見ると古墳の前方部が観察される。



第38図 静岡県下の前方後方墳集成図（各文献より一部改変再トレースし作成）

以上の静岡県下やあるいは関連する県外の前方後方墳の特徴を比較検討するために、第38図・第39図の集成図に示した墳丘測量図にコンタの変換点や発掘調査で明らかになっている墳丘裾になると思われる所に補助線を入れ墳丘の模式形態を明らかにし、さらにこの補助線を活用して各前方後方墳の形態的特徴・規模の比較などを試みた。ただし、公表されている墳丘測量図をもとに拡大・縮小し作図したため、必ずしも原報告と一致しない数値が導きだされた古墳もあるため、方法論的限界もあったことを認めたい。

静岡県下の前方後方墳の傾向をまず示すと、遠江で全長45～50mクラスのものが3基、駿河では70m以上の大形のものが2基対照的に存在することである。次に、遠江の全長45～50mクラスの3基を検討すると、第40図の墳丘平面形態模式比較図の1で示したとおり、後方部の規模は3基の古墳とも規格性を認めてもよいほど類似しているにもかかわらず、前方部の形はまったく異なる。北岡大塚古墳と小鉢子塚古墳については全長・前方部長比率・前方部の直線的に広がる形態などはほぼ同じといえるが、前方部の広がりはいずれも少し異なっている。すなわち、北岡大塚古墳の前方部は前方部角度が84°を測り長方形に近いのに対し、小鉢子塚古墳は78°で縦長台形となる。

また、大形前方後方墳である午王堂山3号墳と浅間神社古墳については、第40図6に示したとおり前方部の形態は縦長台形で、前方部角度は74°と71°、前方部幅比は85%と81%になりほぼ小鉢子塚古墳に似た規格・系譜にのめると考えられる。築造時期については、時期を決定する遺物の出土がわからないため確定できないが、後述するとおり美濃地域の前方後方墳の状況から2基の大形の前方後方墳を新しく、3基の全長45～50mクラスの前方後方墳を古く考えたい。とすると、駿河の大形前方後方墳の出現は、例えば4世紀後半に築造される遠江での松林山古墳・鉢子塚古墳、駿河での柚木山神古墳など100mクラスの大形前方後円墳の出現と相関関係になる見方もできる。すなわち、4世紀後半遠江と駿河の最有力首長が前方後円墳を採用できたのに対し、たとえば浅間神社古墳については100mクラスになるにもかかわらず墳丘形式に前方後方墳を採用しなければならないという、何らかの政治的な規制原理（階層序列化）が働いていると推測されるのである。午王堂山3号墳についても、同じ静岡平野なかでの柚木山神古墳に対峙する古墳であるが、規模は100mを切るうえ前方後方墳という墳形を採用せざるを得ないという規制原理を受けた古墳とも解釈される。

つぎに、座王権現神社古墳のいわゆるばち形に広がる前方部をもつものは、前方後円墳であるが静岡県下最古の古墳として著名な磐田市新豊院山D2号墳が知られている（磐田市教育委員会 1982）。新豊院山D2号墳の墳丘図を検討すると、後円部東墳丘裾部分に狭いテラスがありこのテラス内りを墳丘裾と考えると全長32m・後円部径21.5m・前方部10.5m・同幅16mを測り、前方部長比率49%を呈する小さな前方部をもつ前方後円墳であることがわかる。また、後円部は正円を描くことなく、南北方向に広がるような平面形態を呈する。

前方部長比率が50%に近い数字となることと後円部が正円を描かない特徴から、最近寺沢薫氏により提唱されている纏向型前方後円墳との関連が注目される（寺沢薫 1988）。寺沢氏によると纏向型前方後円墳の特徴は(1)後円丘と比べ著しく小さく低平な前方部をもち、全長：後円丘径：前方部長比は正しく3：2：1を原則としていること、(2)後円丘は正円形のものは少なく、扁球形、倒卵形、あるいは不整形円形を呈すること、(3)後円丘から前方部まではきわめてゆるやかなスロープを作って移行するため、平面的には後円部と前方部間に「連結部」を形成する場合が多いこと、(4)周溝を有するものは、前方部全面を欠くかきわめて狭小であることと説明している。これらの特徴と新豊院山D2号墳を比較すると、(1)の低平な前方部を持つ点、(4)の前方部の周溝の特徴が異なる。(1)については新豊院山D2号墳の立地条件をみると、丘陵最高所にはすでに方墳であるD3号墳が築造され、D2号墳築

造の折りには前方部をより高所なD3号墳に隣接させ前方部より低い部分に盛土をし後円部を築造させたことから、低い前方部にならなかったと推測できる。(4)の点についてもD3号墳の周溝が既に存在していたことからそれを改修し前方部の周溝としたため明確な周溝を伴う形になっていると考えると、まさに新豊院山D2号墳は纏向型前方後円墳(Ia形)の特徴を兼ね備えているといえようか。

ちなみに寺沢氏が注目している魯班尺(1尺=32cm)に新豊院山D2号墳の規模の数値を換算すると、全長100尺・後円部径67尺・前方部長33尺・前方部幅50尺となり魯班尺に合致する数値になる。また、新豊院山D2号墳の全長100尺の数値は、纏向型前方後円墳Ia形式とされた纏向石塚古墳(全長285尺 桜井市教育委員会 1989)の約1/3、小群市津古生掛古墳(全長100尺 小群市教育委員会 1988)と同規模になる。他の形式の纏向型前方後円墳と比較すると、おおむね300尺と100尺に近い数値になるものが多く、寺沢氏も指摘しているとおり何らかの墳丘規模の政治的規格性の存在が認められる。しかし、新豊院山D2号墳での魯班尺使用の可能性の有無については、基本となる墳丘規模のデータについて正式の報告書が刊行されていないため、より詳細に検討できない現状であることから問題提起にとどめておきたい。

また、新豊院山D2号墳の築造時期を出土土器で検討すると、一部在地系の菊川式の要素を持った古い段階の古式土師器もあるが、畿内系の2重口縁壺と尾張系のいわゆる柳ヶ壺の文様の特徴をもつものも出土しており(中島郁夫氏ご教示)、赤塚氏編年廻間Ⅲ式1~2、寺沢氏編年布留0式~1式あたりの築造と考えられる。このことは寺沢氏が述べているごとく纏向型前方後円墳の畿内外への波及が、布留0式段階に顕著に認められるとした見解に合致する。

このように、新豊院山D2号墳は多少の問題点はあるものの布留0式段階で東国に拡散現象の見られる纏向型前方後円墳になる可能性がでてきたといえる。座王権現神社古墳と比較すると、築造時期は出土土器から座王権現神社古墳が庄内3式~布留0式段階、新豊院山D2号墳は布留0式~1式段階となり座王権現神社古墳が少し先行するようであるが、それぞれの上限下限をみると布留0式段階前後となり、ほぼ同時期といってもよい状況である。平面形態は、どちらもばち形に広がる前方部形態であるが、前方部比率が新豊院山D2号墳は50%に近い数値になるのに対し、座王権現神社古墳については88%となりまったく異なる系譜にあることがわかる。また、全体規模も新豊院山D2号墳が30mクラスであるが、座王権現神社古墳は50mに近いクラスの古墳である。とすると、座王権現神社古墳出現の理解にあたっては、纏向型前方後円墳とは別系譜で考えなければならないといえる。

以上、静岡県下の前方後方墳を検討してみると、北岡大塚古墳と小鉢子塚古墳の前方部が直線的に広がる系譜のものと、座王権現神社古墳のようにばち形に広がる前方部をもつ系譜のものという二つの系譜があることが判明した。そして、駿河の大形前方後方墳は前者の前方後方墳の系譜にのるもので、しかも前者の前方後方墳より後出の築造時期になる見通しを述べた。また、遠江の全長45~50mクラスになる3基の前方後方墳は規模をほぼ同じくし、それが同一の規制原理に係わるものと仮定すると、時期を決められる遺物が出土していないが北岡大塚古墳・小鉢子塚古墳の築造時期は、それぞれ座王権現神社古墳とほぼ同じか少し新しい布留0式~1式前後の築造になると考えたい。

つぎに、この静岡県下での状況がまず東海地域でどのような位置づけが可能か比較検討した後に、瀬戸内~畿内を始めとする西国と、関東を始めとする東国の前方後墳の状況とどう係わっているか考察を進めたい。

3. 東海地域の前方後方墳

隣接地域の東三河においては詳細な測量論査が実施され、測量図が公表されている前方後方墳が6

基あり、既にそれらについて分析がなされている（小林久彦 1991）。その内発掘調査・範囲確認調査が実施されているものは市杵島神社古墳・断上10号墳である。また、時期の決定できる遺物の出土をみた古墳は市杵島神社古墳のみで、その築造時期は周溝内出土土器から廻間Ⅲ式の前半でも古い段階と考えられている。静岡県下の前方後方墳と同様に時期決定できるものは少ないため、墳丘の平面形態を中心に検討してみたい。

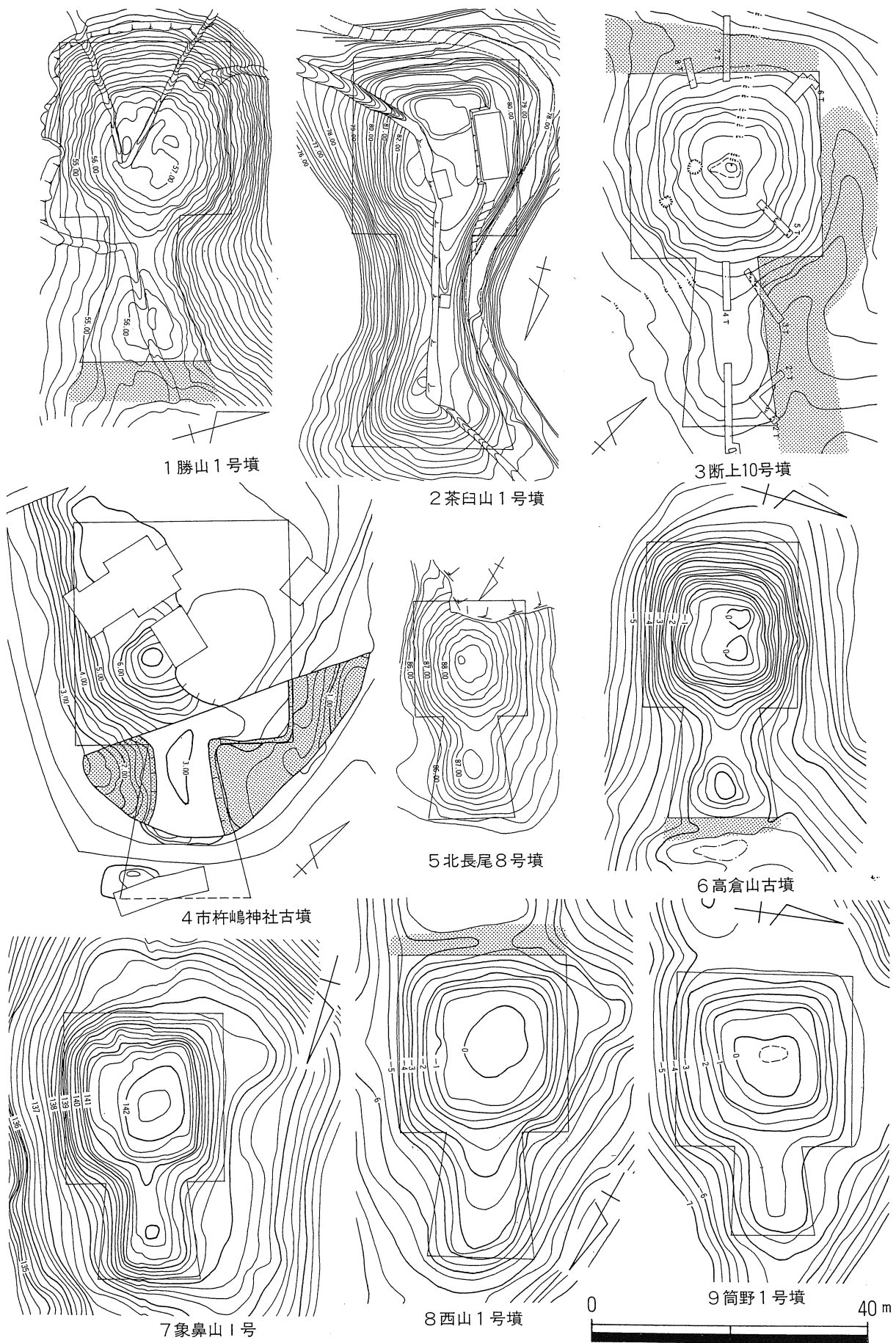
まず、前方部の特徴から前方部がばち形に広がる第39図1の勝山1号墳・2の茶臼山1号墳と、直線的に開く3の断上10号墳・4の市杵島神社古墳・5の北長尾8号墳にわけられ、遠江の状況とよく似ている。

ばち形に広がる前方部をもつ勝山1号墳・茶臼山1号墳と、座王権現神社古墳の墳丘模式平面をトレースしたところ第40図2の結果となった。後方部の規格はほぼ同じになるが、前方部の長さが茶臼山1号墳では前方部長比率124%と後方部長を凌駕するのに対し、座王権現神社古墳は88%、勝山1号墳は84%となり似た数値となる。前方部幅比率は座王権現神社古墳は100%にたいし、茶臼山1号墳は76%、勝山1号墳は76%となり、座王権現神社古墳だけが前方部幅と後方部幅がほぼ同じ数値となる。座王権現神社古墳は前方部の特徴から見ると、前方部幅比率がやや異なるものの勝山1号墳と類似点を多くみだせる。茶臼山1号墳については前方部比率に50%近い差があるものの、地形的制約から前方部を長くしたと解釈すると、座王権現神社古墳や勝山1号墳と同じ規格の平面形態を基にしているといえなくもない。

つぎに、尾張・美濃・伊勢の状況について検討してみたい、この地域の前方後方墳の状況については、赤塚次郎氏によってすでに分析と編年が詳細に試みられている（赤塚次郎 1988）。少し長くなるが、非常に示唆にとんだ研究なので要点を述べ検討材料としたい。赤塚氏の研究によると、後方部の幅にたいし前方部の幅が同じか凌駕するものをⅡ類、それ以下のものをⅠ類とし、そして後方部の長さにたいし前方部の長さの占める割合が $3/5$ （60%）未満のものをa類、 $3/5 \sim 5/5$ （60～100%）のものをb類、 $5/5$ 以上のものをc類とし、その組み合わせから5類型（Ⅰa～c類・Ⅱb～c類）を設定した。さらに、後方部の平坦面の幅が後方部の幅より $1/2$ 以上のものを1類、 $1/2 \sim 1/3$ のものを2類、 $1/3$ 以下のものを3類と分類し、平坦面がひろいものほど廻間遺跡SZ1（廻間1式期築造）などの前方後方型墳丘墓に近い形態と考え、先の分類に充てはめるとⅠa類・Ⅰb類が平坦面比率1類・2類になることから、Ⅰa類・Ⅰb類がⅠc類・Ⅱb類・Ⅱc類に先行する類型とした。また、全長80m以上のものをA類、70～55mをB類、55～45mをC1類、40～30mをC2類に分類し、古式なⅠa類・Ⅰb類はC類にまとまる傾向があると分析した。特に平坦面比率1類のものはC2類の小形の前方後方墳になるとした。

以上の分類から最古式（1段階）の平坦面比率1類のうち、Ⅰa類の平面規格の代表例として美濃の象鼻山1号墳、Ⅰb類では伊勢の西山1号墳、2段階の平面比率2類ではⅠa類の平面規格の代表例として美濃の高倉山古墳、Ⅰb類では伊勢の筒野1号墳が該当するとしている。そして、3段階の代表例としてⅠb類の三河の断上10号墳、Ⅰc類の美濃の東山寺1号墳、Ⅱb類の東之宮古墳、Ⅱc類の二子古墳などをあげ前方後方墳の編年を試みている。そして、各段階の土器編年との対応関係については1段階はB類S字甕の前半・庄内式の後半、2段階はB類S字甕後半～C類S字甕前半・布留Ⅰ式の前半、3段階はC類S字甕後半～D類S字甕後半・布留Ⅰ式後半としている。

さらに、赤塚氏はその後の論文で、以上の前方後方墳の分類・編年のうち正方形の後方部となり狭い前方部を持つⅠ類a・bの前方後方墳の一群を「東海型」前方後方墳、「東海型」に比べて横長の後方部を持つものを「北陸型」前方後方墳、前方部が直線的でくびれ部幅の広いものを「畿内型」



第39図 美濃・尾張・伊勢の前方後方墳集成図（各文献より一部改変再トレースし作成）

前方後方墳、前方部がばち型に広がるものを「瀬戸内型」前方後方墳とし、前方後方墳の地域的な平面形態の差があることを整理した（赤塚次郎 1992）。

以上の赤塚氏の一連の研究から静岡県下の前方後方墳を考察すると、「東海型」と思われる前方後方墳の系譜をもつものは、第40図5に示したとおり前方部が直線的に開き、前方部幅が後方部幅を凌がない特徴をもつ北岡大塚古墳と小鉢子塚古墳がほぼ該当すると考えられるが、異なる点も少なからず見られる。まず前方部長比率と前方部幅比率で検討すると、「東海型」前方後方墳の代表的な象鼻山1号墳（1段階Ⅰa類）では57%と65%、西山1号墳（1段階Ⅰb類）では74%と63%、筒野1号墳（2段階Ⅰa類）では53%と47%、高倉山古墳（2段階Ⅰb類）では67%と68%になるのになんとも、北岡大塚古墳は75%と75%、小鉢子塚古墳は74%と82%となる。前方部長比率からみると北岡大塚古墳・小鉢子塚古墳いずれもⅠb類となるが、遠江のものの方が高い比率を示し、前方部が長い傾向がある事がわかる。前方部幅比率からみると美濃・伊勢の前方後方墳は47~68%になんとも、北岡大塚古墳の75%と小鉢子塚古墳の74%と大きく違う数値となり、美濃・伊勢のものの方が狭くあまり広がらない前方部をもつ傾向が指摘しうる。全体規模を比較すると、美濃・伊勢のものが全長40m前後のC2類に主体があるのになんとも、遠江では全長46m前後になりC1類が主体となる。

以上のことから、遠江での「東海型」前方後方墳と考えられる平面プランをもつ北岡大塚古墳・小鉢子塚古墳と美濃・伊勢の「東海型」前方後方墳と比較検討すると、まず全体規模がひとまわり遠江のものが大きいこと、前方部幅比率が遠江の前方後方墳のの方が大きな値を示すこと、遠江の前方後方墳は前方部比率が高くなるⅠb類に限られることなどが異なる要素としてあげられる。それは、遠江において北岡大塚古墳や小鉢子塚古墳の前方部形態を見る限り基本的には「東海型」前方後方墳の系譜が導入されているものの、これら異なる要素を加味すると異なる設計規格の影響をも受けているといわざるをえない。この異なる設計規格を解明するうえで座王権現神社古墳を始めとし東三河・遠江で見られた、前方部がばち形に広がるグループの前方後方墳が鍵を握っていると考えられる。また、東三河においても、すでに赤塚氏が指摘しているごとく典型的な「東海型」前方後方墳はなく、断上10号墳はⅠc類、市杆島神社古墳はⅠa類？であるものの大きさはC1類である。北尾8号墳はⅠb類に分類され大きさもC2類になるが、前方部比率88%・前方部幅比率75%となり遠江の前方後方墳の数値に近い。このように三河においても「東海型」前方後方墳の系譜をもつと考えられる前方後方墳は典型的なものとならず、美濃・伊勢とは異なる設計規格の影響が読み取れる可能性が高い。このことから、赤塚氏が述べているような伊勢から東三河への影響という一元的理解で東海道ルートを抑えてもよいのか。さらに、ばち形の前方部をもつ勝山1号墳・茶臼山1号墳・座王権現神社古墳の存在意義を考えると、東三河と遠江を中心とする東海道ルートの前方後方墳出現過程についての再検討を要するものと考えたい。

そして、山梨県小平沢古墳（小林広和 1978）を検討してみると、第40図6に示したとおり遠江の北岡大塚古墳・小鉢子塚古墳と極めて似た平面形・全体規模をなすことがわかった。このことから小平沢古墳は、遠江の北岡大塚古墳・小鉢子塚古墳と同じ設計規格で築造された可能性がでてきた。小平沢古墳についても東三河・遠江系譜の「東海型」前方後方墳と捉えられ、山梨県の有力首長層と遠江の有力首長層の強い関連性を読み取ることができようか。

4. 箸墓型前方後方墳

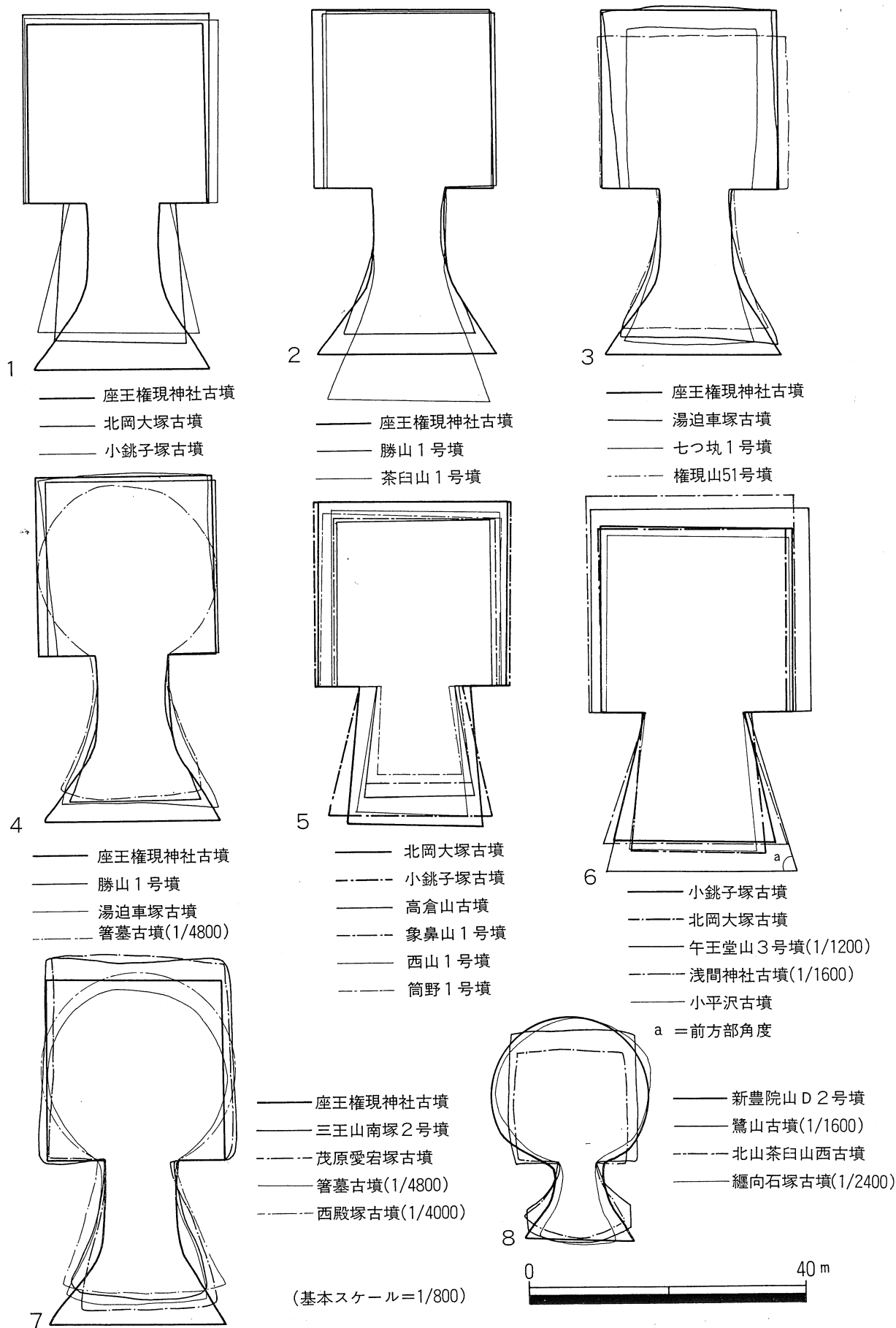
前方部ばち形に広がる前方後方墳は、赤塚氏が「瀬戸内型」前方後方墳としたものに該当すると思われる。瀬戸内の吉備や播磨において近年前方後方墳の発掘調査が近藤義郎氏らにより進められ、そ

の研究成果が次々と公表されている。その内、岡山県七つ埴1号墳（七つ埴古墳発掘調査団 1987）・湯迫車塚古墳（近藤義郎 1983 岡山県 1986）・兵庫県権現山51号墳（権現山51号墳刊行会 1991）は明確な平面形が発掘調査によって明らかとなっている。それらの古墳と座王権現神社古墳との平面形の比較を、第40図3に示した。それによると、地形的制約から後方部・前方部ともに規格が少し異なる点も認められるものの、ほぼ同じ平面形態を示していることがわかる。なかでも、湯迫車塚古墳と座王権現神社古墳については、ほぼ相似形といってもよい状況を示している。（ただし厳密に検討すると、前方部長比率は座王権現神社古墳が96%になるのにたいし、湯迫車塚古墳は82%となり座王権現神社古墳のほうが少し長めの前方部をもつことがわかる。おそらく、座王権現神社古墳は築造場所の地形的な制約から異なる数値を示していると推測したい。）とすると、平面形の規格を検討する限り座王権現神社古墳は、瀬戸内に展開する「瀬戸内型」前方後円墳と平面規格のうえで強い相関関係にあると想定される。瀬戸内の3基の古墳のうち規格から少し離れる七つ埴1号墳はやや後出的であるが、いずれの古墳も古墳時代初頭期に属し、畿内の箸墓古墳とさほど違わない庄内式末～布留0式段階前後に築造されたと考えられ、築造時期についてもこれら「瀬戸内型」前方後方墳と座王権現神社古墳と近いものがあるといえる。

ここで、北篠芳隆氏の畿内の箸墓古墳と吉備の浦間茶臼山古墳や湯迫車塚古墳において、前方後円（方）墳の墳丘の平面形態・規模が一定の比率（浦間茶臼山古墳＝2／3規格 湯迫車塚古墳＝1／6規格）で相似形にあることが示された研究（北篠芳隆 1986）に注目し、同じく座王権現神社古墳についても試みてみた。第40図4の座王権現神社古墳の他よく似かよっている東三河の勝山1号墳、吉備の湯迫車塚古墳、畿内の箸墓古墳の1／6の規模の平面模式形態をトレースすると、座王権現神社古墳は前方部が少し長くなるもののおおむね同規格で相似形をなすことがわかる。また、その後の澤田秀実氏の研究で、箸墓類型として整理された瀬戸内での箸墓古墳の1／6規格の相似形の前方後円（方）墳（湯迫車塚古墳・七つ埴1号墳・権現山51号墳・片山古墳・矢部大古墳）が比較的多く認められるようになったことからもちとおり（澤田秀実 1991）、畿内の箸墓古墳を基本にした前方後円（方）墳の相似関係をもち、さらに一定比率の縮小化として表現する古墳の階層序列化を意図した畿内政権の政治的な働きかけが西国の瀬戸内で実行されたことが考えられる。そして、同様な働きかけが東国の東三河・遠江を通じた東海道ルートにも行われたと推測される。この仮説が正しいとすると、むしろ赤塚氏が「瀬戸内型」と呼んだ前方後方墳は、畿内政権と各地の首長勢力との政治関係の研究を進めるうえでは「箸墓型」前方後方墳と呼んだほうがより適切な表現になると考えたい。

遠江の「東海型」系譜の北岡大塚古墳・小鉢子塚古墳の全長が46mになる点、前方部長比率と前方部幅比率が、伊勢・美濃の「東海型」前方後方墳と比べると高い数値になる点などは、おそらく「箸墓型」前方後方墳の成立に係わり、伊勢・美濃の「東海型」前方後方墳がその影響を受けた結果であると考えられる。また、東三河の前方部長比率の高い前方後方墳も「箸墓型」前方後方墳の影響下に成立していると考えたい。

さらに、遠江からみて畿内からの東海道ルートの中間点になる伊勢の状況は、出雲川流域の西山1号墳・筒野1号墳などの同一系列で捉えられる前方後方墳群在り方（伊勢野好久 1988）を見る限りでは、伊勢と美濃・尾張は同じ、伊勢と東三河・遠江は対峙した関係にあるといえる。このことと、遠江の新豊院山D2号墳が「纏向型」前方後円墳としての位置づけが可能となる仮説をさらに加味すると、布留0式前後の畿内政権の東国に対する政治的働きかけに東海道ルートで強く呼応した地域は、美濃・尾張と大きく係わりを持った伊勢ではなく、東三河・遠江であった可能性が高いといえるのではないだろうか。反面、東三河・遠江においても「箸墓型」前方後方墳の影響下にあるといえども「東海



第40図 前方後方墳模式平面形態比較図（各文献を基に作成）

型」の系譜をもつ前方後方墳も出現していることも見逃せない事実である。この事実から東三河・遠江は尾張・美濃・伊勢と畿内との政治勢力の狭間にあったと推測され、東三河・遠江の首長層が尾張・美濃・伊勢と畿内という重層的な政治勢力の働きかけに呼応していたと考えられるのであり、その重層的な政治状況が関東を始めとする東国の古墳出現の様相に大きく関わっていたのではないかと予測したい。

つぎに、関東において「箸墓型」前方後方墳が波及しているかどうか検討をしてみたい。近年の関東地域における発掘調査で、前方部がばち型に広がる前方後方墳が知られるようになってきた。それらは、埼玉県鷺山古墳（埼玉県史編さん室 1986）、栃木県三王山南塚2号墳（南河内町教育委員会 1990）、群馬県北山茶臼山西古墳（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988）である。前方部長比率でみると鷺山古墳の60%、北山茶臼山西古墳の60%を計る短い前方部をもつものと、山王南塚2号墳の71%を計る少し長い前方部をもつものにわかれる。

後者の山王南塚2号墳の全長は約49mを測り、問題となる座王権現神社古墳の墳丘規模と類似するものの、前方部長比率が座王権現神社古墳が96%になるのに対し、山王南塚2号墳は71%と前方部が短い比率になる。一方、箸墓古墳の前方部長比率は75%を計ることから、山王南塚2号墳のほうが箸墓古墳に近い数値となるが、第40図7に示したとおり後方部の大きさが箸墓古墳の1/6規格と比べるとやや大きくなる。このことから、山王南塚2号墳は箸墓古墳と少し異なる規格を基本に造られた可能性がでてきた。箸墓古墳より少し新しくなる西殿塚古墳の1/5規格の平面プランを第38図7にトレースしてみたところ、山王南塚2号墳と良く似た平面プランとなった。とすると、山王南塚2号墳は箸墓古墳との相似形というよりも、西殿塚古墳の1/5規格との相関関係を考えたほうがよいのだろうか。そして、山王南塚2号墳と座王権現神社古墳との時期を比較すると、座王権現神社古墳のほうが古い傾向があるとすると、さらにこの仮説の補強材料になると思われる。この点については調査担当者の齊藤光利氏より、当該地域の古式土師器の範疇のなかでもかなり古い段階のものが出土しているとのご教示を得ることができ、座王権現神社古墳の築造に近い時期が予測された。しかし、山王南塚2号墳と西殿塚古墳との設計規格の関連については予測の域をでないもので、さらなる比較検討は山王南塚2号墳の本報告書の刊行後になされるべきものであろう。

さらに、栃木県でも古い段階と思われる前方後方墳の宇都宮市茂原古墳群の愛宕塚古墳（宇都宮市教育委員会 1990）を第40図7にトレースしてみたところ、前方部の形状はばち形に開かないこと、後方部の幅が狭く縦長の後方部になるなど「東海型」の前方後方墳の影響を受けている点も考えられるが、山王南塚2号墳と良く似た平面の設計規格で築造されていることがわかる。これなども、山王南塚2号墳の設計規格を基本にした、西殿塚古墳の設計規格に通じる古墳か検討を要するであろう。

つぎに、鷺山古墳・北山茶臼山西古墳についての検討は、両古墳とも前方部長比率60%となることから「纏向型」前方後円墳との比較検討をしてみたい。まず、基本資料となる纏向石塚古墳の1/3規格の平面形態と、遠江での新豊院山D2号墳、北山茶臼山西古墳、鷺山古墳の1/2規格（纏向石塚古墳の2/3規格）の平面形態をトレースし重ね合わせると第40図8のようになり、前述したように纏向石塚古墳と新豊院山D2号墳はほぼ似た形態となる。纏向石塚古墳と比較すると、北山茶臼山西古墳については前方部の長さはほぼ同じとなるが後方部の大きさが小さく、鷺山古墳も前方部の長さはほぼ同規模になるものの後円部長さは反対にやや大きく設計規格にばらつきがある。前方部端の形態は両古墳とも緩やかな弧を描くことから纏向石塚古墳の影響を考慮することができるが、鷺山古墳は前方部側面隅を切り落とした特異な形態をなし「纏向型」前方後円墳とは異なる要素も見られる。

このように北山茶臼山西古墳・鷺山古墳は、前方部が短いこと、前方部端が弧を描くこと、纏向石

塚古墳の全体規模と比較すると、おおむね北山茶臼山西古墳で1／3規格、鷺山古墳で2／3規格となり一定の規格があったことなどが想定されることから、両古墳とも設計規格においてかなりの変形があるものの畿内の「纏向型」前方後円墳の影響下に成立したと考えたい。さらに考察を進めると、東京湾沿岸に位置する神門3号墳などはすでに寺沢薫氏が指摘しているごとく、「纏向型」前方後円墳の影響下に成立した古墳と考えられることから、庄内式後半～布留0式段階で関東に「纏向型」前方後円墳が築造されており、おそらく両古墳ともこれら関東の「纏向型」前方後円墳の系譜と前方後方墳の系譜が融合し成立したと考えられるのではないだろうか。このことから、両古墳を「纏向型」前方後方墳と仮称して整理をはかっておきたい。

このように、関東地域においては庄内式後半～布留0式段階で東京湾沿岸部において「纏向型」前方後円墳が出現した後に、つづいて布留0式～1式段階に比較的内陸部の栃木県・埼玉県・群馬県で「箸墓型」或は「西殿塚型」前方後方墳や「纏向型」前方後方墳などが築造されていったと予測される。しかし、検討できる古墳数がまだまだ少ないため予測の域をでない。とくに、畿内からの関東地域の玄関口と考えられる東京湾沿岸部における「纏向型」前方後円（方）墳、「箸墓型」前方後円（方）墳の動向が鍵を握っていることは必至であり、今後とも資料の増加に注目していきたい。

5. 大形前方後方墳出現の意義

最後に駿河にみられた全長70m以上の大形前方後円墳について検討してみたい。大形前方後方墳の三河での動向は、東三河では確認されておらず、西三河の全長81mの安城市二子古墳が存在するのみである。二子古墳の出土品はなく時期決定できないが、平面形態は前方部長比率100%、前方部幅比率80%を計り、前方部が長く午王堂山3号墳の平面形態に近い。

美濃・尾張で築造時期がおおむね判明している大形前方後方墳は、4世紀後半で全長78mの犬山市東之宮古墳（犬山市 1983）、4世紀後半～末で全長100mの大垣市粉糠山古墳（大垣市教育委員会 1992）、伊勢では4世紀後半で全長70mの嬉野町向山古墳などがあげられる。その外断片的に出土品が伝えられるものを含めても、美濃・尾張・伊勢の大形前方後方墳で4世紀前半に遡るものはなさそうである。

つぎに、西三河の二子古墳の成立に注目すると、4世紀前半まで有力な首長墓の成立を見なかった地域に、突如として大形前方後円墳ではなく大形前方後方墳として有力首長墳が出現するという状況が想定できる。それと同じ状況が駿河での浅間神社古墳の出現に関与していると考えられるのである。伊勢においても西山1号墳～筒野1号墳～向山古墳と一連の首長墓の流れで捉えられる古墳群でさえ、4世紀中頃になる筒野1号墳が全長37mであったものが、4世紀後半の向山古墳では全長70mクラスになり、4世紀後半に何らかの政治的な変化があったことが読み取れる。

一方、美濃の粉糠山古墳について注目してみると、隣接地に4世紀後半～5世紀初頭に築造されたと考えられている全長142mの大垣市大塚古墳が出現している（大垣市教育委員会 1990）。大塚古墳については、中井正幸氏の研究によると甲斐銚子塚古墳との墳丘規格の類似性があり、そのうえ大塚古墳、甲斐銚子塚、遠江の松林山古墳などの位置関係から交通の要所に小数ながら畿内的な前方後円墳が築造されており、それは西日本の前期古墳の多くが瀬戸内海沿岸を中心とした海上交通路の要所に共通して出現した状況と同一視した考察がなされている（中井正幸 1990）。さらに、近年の粉糠山古墳と大塚古墳範囲確認調査の結果からみると、両古墳ともほぼ同時に築造された可能性がでてきており、隣接した地域に優劣差のある2基の有力首長墳が成立したことになる。とすると、この状況を遠江の松林山古墳にあてはめると、隣接地域では前方後円墳であるが全長112mクラスの銚子塚

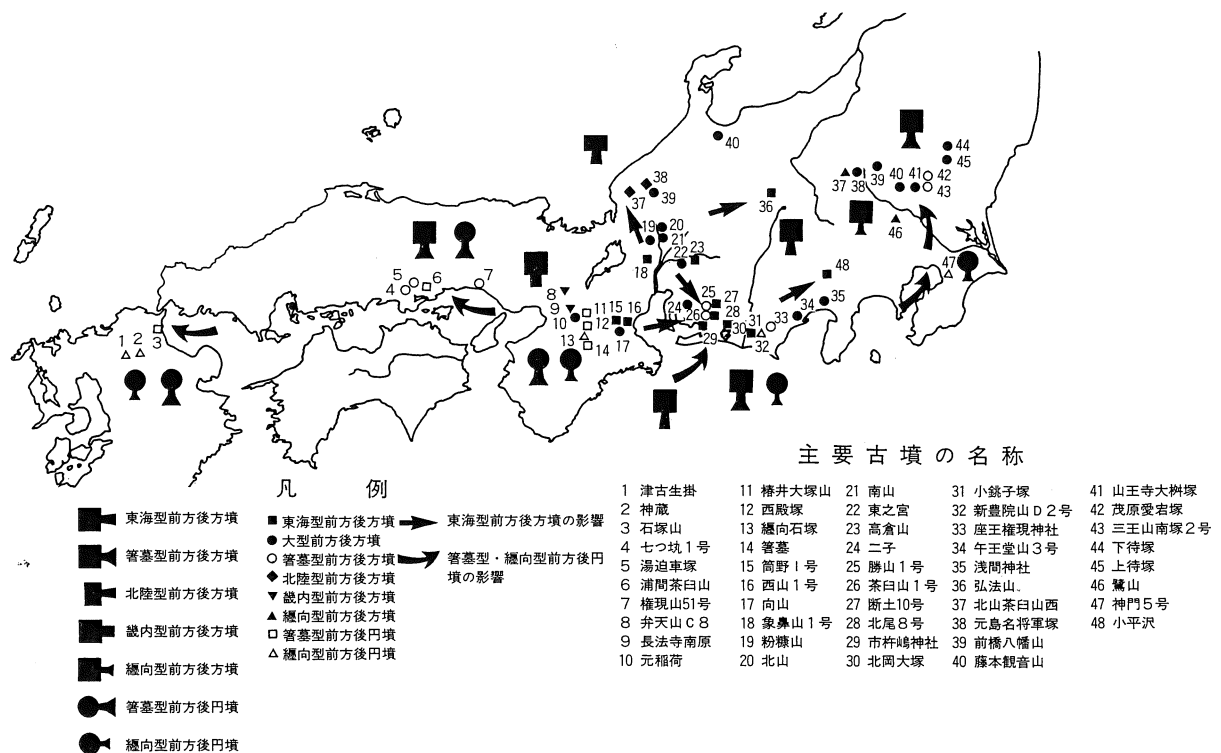
古墳が、駿河の柚木山神古墳の場合は、午王堂山3号墳ということになるのか。浅間神社古墳については、甲斐への交通の要所である西駿河の柚木山神古墳の勢力に対峙する形で、相模に対する交通の要所である東駿河の勢力が台頭してきた結果成立した前方後方墳だと考えたい。また、遠江鈔子塚古墳だけが前方後円墳である理由を考察すると、鈔子塚古墳より古い4世紀前半段階で小鈔子塚古墳の被葬者はすでに畿内（同時に美濃・尾張との関係も）との関係を確立していたと考えられることから、鈔子塚古墳の首長は大形前方後方墳採用の首長より歴史的に優位な立場にあった事情と、畿内から見て東国の最前線基地としての遠江のなかでより磐田の地が重視された結果だとも考えられる。

以上のことから、静岡県下の大形前方後方墳である午王堂山3号墳と浅間神社古墳の成立については、4世紀後半の東国各地の交通の要所に築造される大形古墳の築造の動きと連動したものであり、3世紀末～4世紀前半の遠江で築造される全長45～50mの前方後方墳とは異なる原因で成立したものと理解したい。

6. ま と め

座王権現神社古墳と静岡県下での前方後方墳の出現の意義について、雑駁な考察になってしまったので要点をまとめると以下の通りとなろう。（第41図参照）

- (1) 静岡県下での前方後方墳は全長45～50mを測るものと、全長70m以上を測る大形のものがあり、前者は3世紀末～4世紀前半に遠江の首長墓として採用され、後者は4世紀後半の交通の要所に成立する遠江の松林山古墳・駿河の柚木山神古墳などの大形前方後円墳に連動し出現したものと考えた。
- (2) (1)の前者の前方後方墳のうち座王権現神社古墳は東三河の勝山1号墳・茶臼山1号墳等の出現と関係したもので、設計規格が畿内の箸墓古墳と関係がありそうなことから「箸墓型」前方後方墳と仮称し類型化を試みた。「箸墓型」前方後方墳は赤塚次郎氏が分類した「瀬戸内型」前方後方墳と同類型であり、瀬戸内では湯迫車塚古墳や権現山51号墳等が該当し、いずれの前方後方墳も箸墓古墳の1／6規格である点と、浦間茶臼山古墳の2／3規格の大形前方後円墳（浦間茶臼山古墳発掘調査団1991）と比較するとこれらの古墳の墳形が前方後方墳を採用しているという点が重要で、何らかの畿内政権における政治的規制（階層制）を墓制において受けていると考えられた。
- (3) 「箸墓型」前方後方墳の出現時期は、おおむね庄内式の最新段階～布留式的最古段階に該当し、同時期の箸墓古墳の成立によって、「箸墓型」前方後方墳体制とでもいえる政治体制を形成したと考えられるが、それは尾張・美濃・伊勢とは対峙した関係で、瀬戸内と東海～関東により強く現れてると考えられた。
- (4) 「箸墓型」前方後方墳は、東三河・遠江・甲斐における断上10号墳・北岡大塚古墳・小鈔子塚古墳・小平沢古墳などの「東海型」前方後方墳に影響を与え、特に北岡大塚古墳・小鈔子塚古墳・小平沢古墳については同一規格で築造されている可能性が指摘できた。これらの古墳の築造時期については、出土品がほとんど知られていないため不明といわざるを得ないが、座王権現神社古墳とさほど違わない、4世紀初頭か降っても4世紀前半の事と思われる。伊勢では、筒野1号墳に見られるように4世紀中頃でも「箸墓型」前方後方墳に影響されない「東海型」前方後方墳を採用しており、東三河・遠江と比べると畿内政権とつながりは弱く、美濃・尾張との関連が強いことがわかった。
- (5) 庄内式の最新段階～布留式的最古段階において「箸墓型」前方後方墳以外にも、遠江での新豊院山D2号墳に見られたように「纏向型」前方後円墳の存在が注目された。おそらくほぼ同時期に「箸墓型」前方後方墳と「纏向型」前方後円墳がセットで瀬戸内を通じて九州へと、東海地域を通じて関東へと伝播した可能性が指摘できた。関東においては、わずかに数基の古墳の検討に終わってしまった



第41図 「箸墓型」前方後円墳等分布図

が、「箸墓型」前方後方墳或は「西殿塚型」前方後方墳の存在する可能性、「纏向型」前方後円墳の影響を受けた「纏向型」前方後方墳の存在する可能性などが指摘できたが、古墳の築造年代の比較検討が厳密にできていない点や、関東の各古墳と畿内を古墳と比較すると設計規格に変形があることなどわかり問題提起に留まった。

しかし、今回の考察では前述したとおり方法論的な欠点もある。まず、平面形態の模式図作成に使用した図面の精度にばらつきがあり、原報告書に示された数値と多少の誤差が生じたことと、紙面の関係もあり模式平面の比較になってしまったため原資料の地形図との厳密な比較検討を示していない点等があげられる。しかし、これらの点については若干の私見が入った可能性は否定しきれないが、ほぼ傾向の提示は成されていると考えられ、今後の出現期の前方後方（円）墳を理解するうえで問題提起になりえるものと考えている。

また、最近富士宮市で発見された廻間Ⅱ式段階の丸ヶ谷戸遺跡の前方後方型方形周溝墓との関連など、紙面の関係で論及することができなかった。今後機会があったら考察を試みてみたい。

最後になりましたが、以下の諸氏から本論を考察するうえで、有益なご教示と資料の提供を受けました。ここに紙面をお借りしてお礼申し上げますとともに、十分な理解をせず記述している面も数多くあると思いますが、ご容赦願いますらにご批判・ご教示を賜ることができれば幸いです。（敬称略）

赤塚次郎 伊勢野久好 斎藤光利 斎野裕彦 柴田稔 白澤崇 高木宏和 田崎博之 寺沢薫
中井正幸 中島郁夫 賛元洋 宮崎幹也 宮田浩之 米田文孝 渡井英誉 宇都宮市教育委員会

（松井 一明）

参 考 文 献

- 磐田市教育委員会 1982 『新豊院山墳墓群』
- 吉原市教育委員会 1958 『吉原市の古墳』
- 引佐町教育委員会 1981 『引佐町の古墳文化Ⅱ』
- 静岡県 1990 『静岡県史』資料編2
- 岡山県 1986 『岡山県史』考古資料編
- 犬山市 1983 『犬山市史』史料編3
- 埼玉県史編さん室 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』
- 愛知県教育委員会 1977 『重要遺跡指定促進調査報告Ⅱ』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 『大島上城遺跡 北山茶臼山西古墳』
- 豊橋市教育委員会 1990 『埋蔵文化財新出土品展』
- 豊橋市教育委員会 1991 『市杵嶋神社遺跡(Ⅰ)』
- 大垣市教育委員会 1990 『大垣市埋蔵文化財調査概要昭和63年度』
- 大垣市教育委員会 1992 『粉糠山古墳』
- 桜井市教育委員会 1989 『纏向石塚古墳』
- 小郡市教育委員会 1988 『津古生掛遺跡Ⅱ』
- 宇都宮市教育委員会 1990 『茂原古墳群』
- 南河内町教育委員会 1990 「三王山南塚1・2号墳発掘調査概報」『南河内町郷土史会報』第7号
- 七つ塚古墳発掘調査団 1987 『七つ塚古墳群』
- 権現山51号墳刊行会 1991 『権現山51号墳』
- 浦間茶臼山古墳発掘調査団 1991 『岡山市浦間茶臼山古墳』
- 赤塚次郎 1988 「東海の前方向後方墳」『古代』86号 早稲田大学考古学会
- 赤塚次郎 1992 「東海のトレース」『古代文化』第44巻第6号
- 伊勢野好久 1988 「三重県の前方向後方墳」『古代』86号 早稲田大学考古学会
- 小林久彦 1991 「東三河の前方向後方墳」『市杵嶋神社遺跡(Ⅰ)』 豊橋市教育委員会
- 小林広和他 1991 「甲斐小平沢古墳の墳形と編年的位置」『信濃』第30巻2号 信濃史学会
- 近藤義郎 1983 『前方向後円墳の時代』 岩波書店
- 澤田秀実 1991 「墳丘形態からみた権現山51・50号墳」『権現山51号墳』 権現山51号墳刊行会
- 寺沢 薫 1988 「纏向型前方向後円墳の築造」『考古学と技術』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 内藤 晃 1958 「遠江・駿河の前方向後方墳」『私たちの考古学』17 考古学研究会
- 中井正幸 1990 「大垣地域の前期古墳」『美濃の前期古墳』 美濃古墳文化研究会
- 賛 元洋 1988 「愛知県三河地方の前方向後方墳」『古代』86号 早稲田大学考古学会
- 北篠芳隆 1986 「墳丘に表示された前方向後円墳の定式とその評価」『考古学研究』128 考古学研究会

第2節 川会坊主山古墳と大門大塚古墳出現の背景

1. 遠江における主要古墳の築造時期

静岡県西部地域は、天竜川を中心にその右岸に三方原台地、左岸には磐田原台地を有し、浜名湖・遠州灘といった水利に恵まれ、それらに注ぐ都田川・太田川・原野谷川の中小河川を持つ良好な地形環境にある。

このような条件を基盤として、当該地域は古墳時代以前から進展してきた。古墳時代を迎え、ますます発展するこの地を所謂、「遠江」を中心に主要な古墳の築造時期について概観する。

【A地域】

まず、浜名湖の北東方向に位置し、これに注ぐ都田川流域に、古墳時代前期の古墳が早くも出現する。

北岡大塚古墳は、全長46.5mを測る前方後円墳である。主体部の状況は不明であるが、その形態からして、当該地域では最古に位置付けられると考える。続く馬場平古墳は、同じく都田川流域の左岸のやや下流に立地する。全長は47.5mの前方後円墳であり、主体部は粘土槨で組み合わせ式の木棺が想定されている。外表の一部には葺石が存在し、副葬品中には画文帯神獸鏡一面が含まれている。この馬場平古墳と同一尾根上には、他に3号墳が立地している。当墳は、全長35mの前方後円墳で、主体部からは獸形鏡と内行花文鏡がそれぞれ一面出土しており、馬場平古墳の後に位置付けられる。

古墳時代の中期中葉には、谷津古墳が出現する。当墳は直径26mの円墳に方形の造り出しを付している。その後、当該地域で主要古墳の最後となるのが、陣座ヶ谷古墳で、全長55mの前方後円墳である。葺石の有無は確認されていないが、埴輪を有している主体部の状況は不明であるが、副葬品には変形獸形鏡一面を含む。

やや規模は小さいが、郷ヶ平3号墳は全長17m前後の円墳であったが、詳細は不明である。ただし、採集された埴輪は所謂「淡輪系埴輪」に属する。出土須恵器から陶邑窯の編年のTK-23からTK-47の時期が想定され、陣座ヶ谷古墳と同時期か、やや新しい時期が想定される。

【B地域】

三方原台地の東縁には4世紀の後半に赤門上古墳が出現する。同墳は全長56mの前方後円墳で、主体部は簡略化された木棺直葬である。副葬品中で注目されるのは、四神四獸を表した三角縁神獸鏡と銅鏃30本が揚げられる。銅鏃の大量出土の例としては、松林山古墳とともに注意される。

続く古墳は、赤門上古墳を中心とした内野古墳群中の権現平山7号墳である。直径25mの円墳で、ほぼ全面に葺石を施している。県内でも出土例の少ない銅鏃を副葬している点が特徴で、5世紀の前葉に出現したものと考えられる。

この内野古墳群は、中小の古墳群を形成し発展するが、前述の古墳の出現の後、目立った大型古墳の構築はないが、6世紀の中葉前後に全長35mの前方後円墳で主体部に横穴式石室を伴った興覚寺後古墳が三方原台地の河岸段丘上に出現する。当墳の主体部は、片袖式の平面形態を有する横穴式石室で、県内でも稀な比較的大きな石材を使用して壁面を構築している。

【C地域】

先の内野古墳群からやや南方、三方原台地の東縁のほぼ中央に三方原古墳大支群は位置する。

その中において、古墳時代中期中葉から後半にかけて、三方原学園内古墳群が展開する。その発端となるのが、千人塚（5号墳）古墳である。直径49mの円墳に、造り出しを付す墳形を呈し、埴輪を有するものの、葺石・周溝は確認されていない。副葬品中には、三角板革綴短甲一領が納められ、埴

輪は「淡輪系埴輪」で、須恵質の軟質の胎土を含むものの、いずれも無黒斑である。陶邑窯の編年のTK-216からTK-208前後の時期に築造されたものと考えられる。

次には、径25mの円墳の4号墳が出現する。葺石は認められないものの、埴輪を有している。この4号墳の北に位置する瓢箪塚（1号墳）古墳は、これに続くものと考えられ、全長45mの前方後円墳であり、埴輪は認められるが葺石・周溝は確認されていない。当墳の特徴としては、主体部が3主体認められ、いずれも木炭槨を採用している点である。十字文透楕円形鏡板等の副葬品からすれば、6世紀の初頭が考えられる。

古墳群内で時期を判断できる古墳としては、他に2号墳があり、全長25mの前方後円墳である。周溝内出土の須恵器からすれば、陶邑窯のTK-10型式前後と考えられ、6世紀の中葉前後が与えられる。

【D地域】

遠江地域の中心部を南北に流れ、遠州灘に注ぐ天竜川が山間部から平野へと流れ出す位置に光明山古墳は立地する。全長88.4mの前方後円墳で、埴輪のほか葺石・周溝が確認されている。埴輪は「淡輪系埴輪」で、須恵質と軟質の焼成状態が認められ、いずれも無黒斑である。

光明山古墳の南に接して存在する2号墳は、直径33mの円墳である。墳丘の南側には方形の造り出しを付している。主体部は検出されていないが、光明山古墳に続く築造時期が予想される。

【E地域】

天竜川の左岸には、三方原台地と対峙するかのように磐田原台地が南北に細長く形成されている。この台地の西端には、古墳時代前期後半に全長47mの前方後方墳の小鉢子塚古墳が出現する。当墳の南東に近接して全長112mの前方後円墳の鉢子塚古墳が存在するが、両者とも発掘調査を行っていないのでその正確な築造時期の前後関係は不明であるが、鉢子塚古墳からは三角縁神獣鏡一面や、巴形銅器、銅鏃が出土しており、墳形等を考慮すれば、小鉢子塚古墳から鉢子塚古墳へと展開するものと考えられる。

これらに続く主要古墳については、同じく発掘調査が行われておらず、時期決定は困難な面があるが、大型の円墳の米塚古墳は、径40mを測り、周辺に成立する古墳群との関係から5世紀の中葉を前後する時期が予想される。

大道西F古墳群は、全長30m前後の前方後円墳を中心に5基から構成されている。その内、径25mの円墳のF5号墳からは馬鐸・須恵器の器台が採集されている。出土品からすれば、中期の後半前後が考えられる。

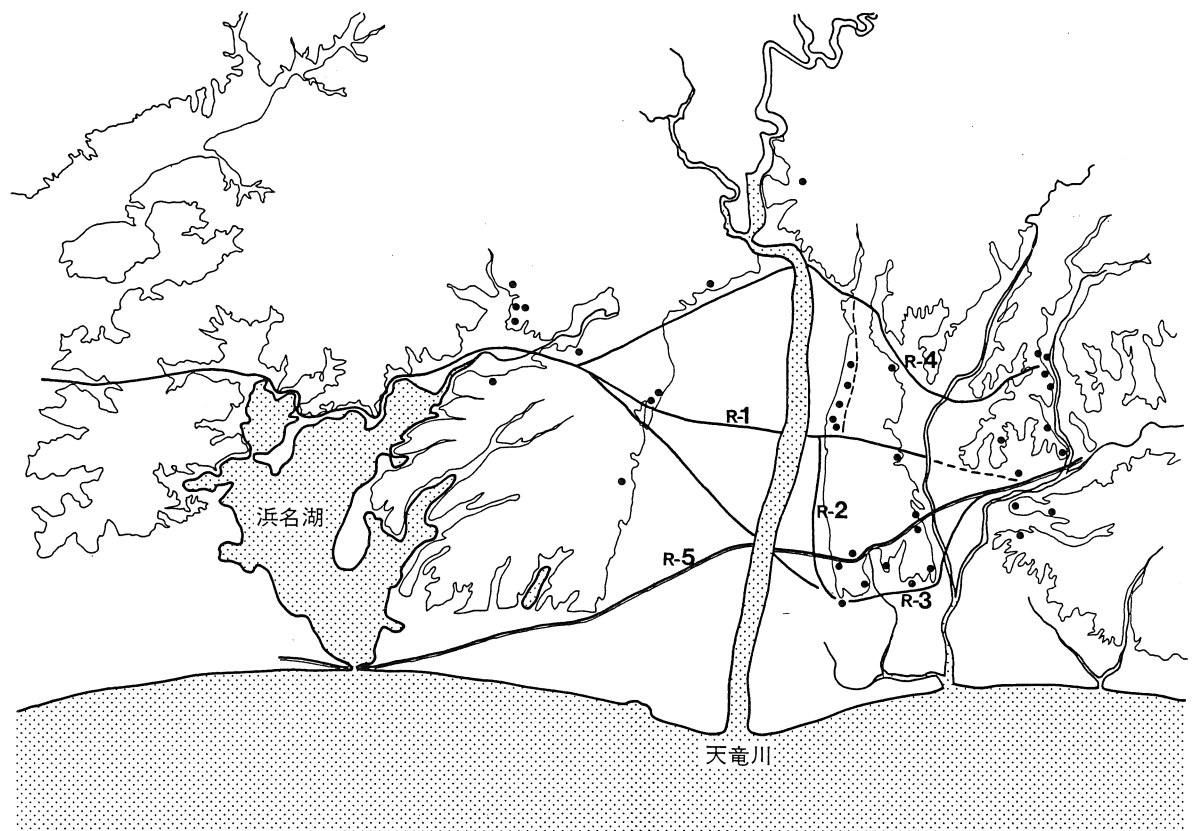
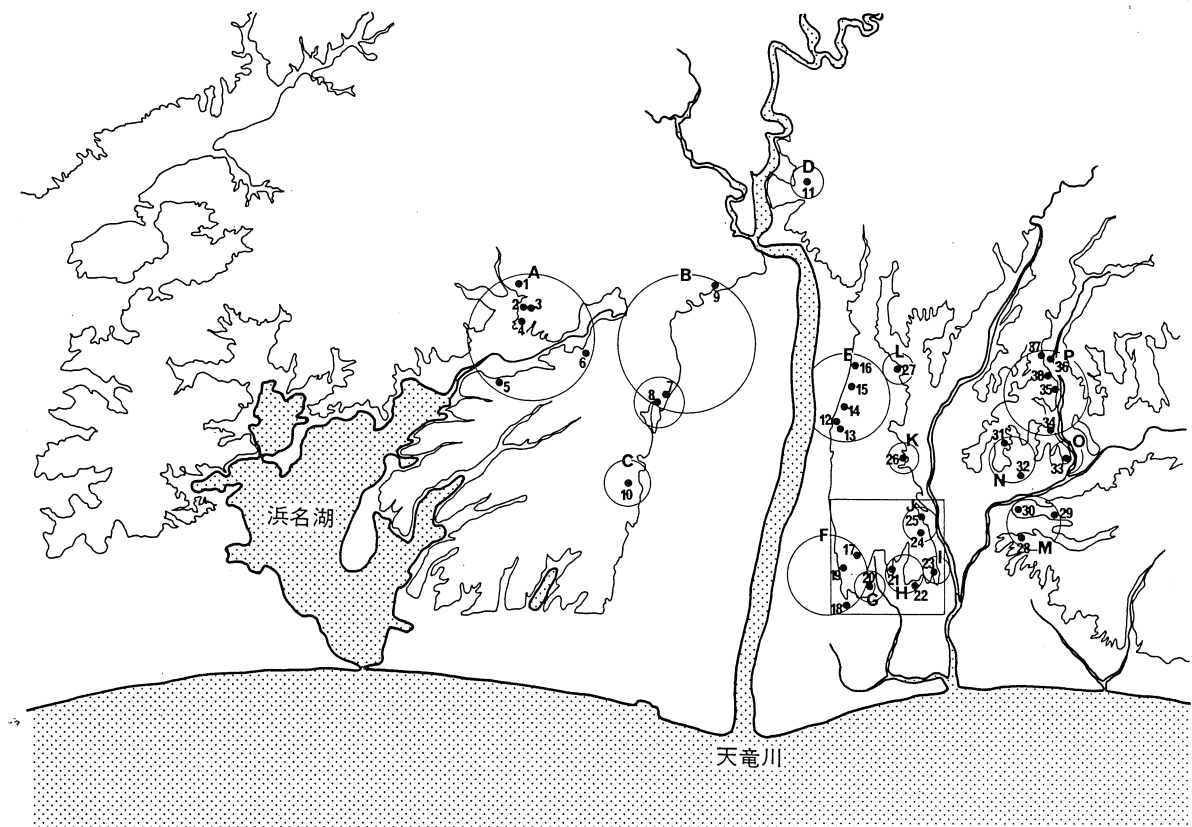
血松塚古墳は、磐田原台地の北に位置する全長48mの前方後円墳である。埴輪と葺石が存在しており、埴輪は円筒埴輪の他に形象埴輪が存在する。周辺にはかつて、ほぼ同規模の前方後円墳や大型の円墳が存在したという言い伝えが残るが、現存せず、詳細は不明であるが、血松塚古墳は5世紀の後半には成立したと考えられる。

【F地域】

兜塚古墳は、磐田原台地の南端部に立地する、径80mの円墳である。墳丘には葺石と埴輪を有している。副葬品には、仿製の三神三獣鏡がある。埴輪や副葬品からすれば、築造時期は中期の前半頃と考えられる。

さらに台地の南に進むと、小河川の侵食によって小さな段丘が形成されており、径36mの円墳と想定されている観音山古墳は、周溝内出土の土器を考慮すると中期の前半ごろの時期が考えられる。

京見塚古墳は、径47mの円墳であり、磐田原台地の西南端の好所に位置する。京見塚古墳を中心に10m前後の円墳を従え、消滅したもの等を含めると14基前後からなる古墳群である。周溝と埴輪を有しており、埴輪は「淡輪系埴輪」である。注意されることは、周辺には埴輪棺および、埴輪窯が近接



第42図 遠江における主要古墳位置図及び推定交通路

することであり、製作地と搬入先が明らかとなった数少ない例である。

東南方向に所在する土器塚古墳は、径31mの円墳であるが、調査は行われていないため詳細は不明であるが、位置からして、京見塚古墳に関係する時期に成立した可能性がある。

【G地域】

全長83mの前方後円墳である庚申塚古墳からは、二神二獣鏡一面、車輪石、石釧が出土したと伝えられている。周辺部には、全長50mの前方後円墳の連福寺古墳が存在し、三角縁三神三獣鏡が発見されており、庚申塚古墳と連福寺古墳は、前期の後半ごろに相次いで出現したものと考えられる。

さらに、澄水山古墳は、径45mの円墳に小さな前方部の取り付く帆立貝式を呈する墳形である。埴輪が存在する。隣接する丸山古墳も未調査であるが、径45mの円墳で、澄水山古墳と丸山古墳は、先の二基の古墳につづいて構築されたものと考えられる。

【H地域】

磐田原台地の南端のほぼ中央、小段丘上に立地するのが、径60mの円墳の城之崎丸山古墳である。出土遺物は、黒斑の認められる埴輪が採集されている。

この城之崎丸山古墳の北東方向には、小河川の安久路川が侵食して形成した小谷が存在する。この段丘上に立地する安久路古墳群は、径47mの円墳の安久路丸山古墳を中心に、他3基から構成されている。

2号墳は、径26mの円墳で、葺石を有している。主体部は木棺直葬で、長方板革綴短甲・三角板革綴の衝角付冑等が検出されている。3号墳は、径27mの円墳で、葺石と埴輪が巡っている。南北に平行して、主体部が二箇所検出され、北側主体部から短甲の押付仮や有肩鑄造鉄斧等が、南側主体部からは仿製神獣鏡等が出土している。

築造時期は、安久路丸山古墳が中期前半に築造され、2号墳がこれに続き、3号墳が中期の中葉前後に出現したものと考えられる。

このような中、やや南方では、全長113mの前方後円墳の堂山古墳を中心に、ほか5基の円墳を従えて成立する。堂山古墳の主体部の状況は不明であるが、前方部に埴輪棺転用棺5基が検出され、棺の内外には多量の大刀・剣・鉾・鏃や農工具を副葬しており、1号棺から検出された漆塗りの盾の存在は注目される。明治年間に、後円部付近から採集されたと伝えられる遺物中には、舶載の内行花文鏡一面、舶載の神人龍虎画像鏡一面がある。豊富な副葬品や周辺地域でも類例の少ない埴輪棺の存在等、特異な存在である。堂山古墳は、中期の中葉前後に構築されたものと考えられる。

【I地域】

磐田原台地の南東端は、東側に太田川とそれが形成した平野を広く見渡せる好所に位置する。

松林山古墳は、全長107mの前方後円墳で、埴輪が検出されている。主体部は割石積みの竪穴式石室が後円部で確認されている。水字貝製釧、舶載の三角縁神獣鏡、仿製の内行花文鏡、舶載の内行花文鏡、仿製の四獣鏡、短甲、銅鏃、巴形銅器等々、豊富な副葬品を有している。さらに、前方部にも別主体部があったようで、仿製四獣鏡が出土しており、前期後半には築造されたものと考えられる。

続いて、推定で全長60m前後の前方後円墳と考えられている連城寺経塚古墳を中心に、計7基の古墳群が展開する。

経塚古墳は、詳細については不明な点が多いが、舶載の三角縁神獣鏡一面が出土しており、前期の後半ごろの築造と考えられる。北に近接している稲荷山古墳は全長47mの前方後円墳として出現し、同じく隣接する新貝17号墳へと続く。

新貝17号墳は、径30mの円墳で、主体部は上下2棺検出している。上面の棺には遺物は無く、下面

の棺は、割竹形木棺である。副葬品には、変形二神二獣鏡、変形同向式神獣鏡、堅櫛、鉄斧等が含まれる。築造時期は、稲荷山の成立期が不確定であるが、この新貝17号墳は中期の前半ごろには、築造されていたものと考ええる。

周辺において未調査で、詳細の不明な古墳を見てゆくと、松林山古墳に南接する位置に高根山古墳がある。当墳は、径35mの円墳であり、前期に周辺域において大型の円墳が出現していないことを考慮すれば、中期の前半から中葉ごろの築造時期が予想され、先の連城寺古墳群中の秋葉山古墳も同じく、径55mの円墳であり、ほぼ同時期か前後する時期に成立したものと考えられる。

【J地域】

磐田原台地の東端であるが先のI地域から北に移った位置に、二子塚古墳は立地する。過去には多くの古墳が存在したようであるが、現在は小円墳が1基伴うのみである。

二子塚古墳の主体部の状況は不明であるが、墳丘からは、埴輪片が採集されている。採集品中には、剣菱形杏葉、環鈴、鈴杏葉、馬鐸等があり、須恵器の型式を考慮すれば、陶邑窯のTK-23前後の築造時期が考えられる。

続いて、台地の東端上には、甕塚古墳が出現し、小段丘上には他に、3基の円墳が伴う。

甕塚古墳は、径26mの円墳で、埴輪を巡らしている。主体部は、片袖式の横穴式石室で、玄室のほぼ中央には、板石を組み合わせた箱式石棺を安置している。副葬品中には、仿製方格規矩鏡、鈴付銅製三輪玉、挂甲小札、堅矧広板革綴冑、f字形轡鏡板、十字形透かし楕円形轡鏡板、鉄地偏円形轡鏡板、剣菱形杏葉、三鈴付杏葉等々、豊富な内容である。

先の石棺の下から須恵器が検出されており、3回以上の追葬が考えられる。横穴式石室の遠江地域での導入の初期のものと考えられ、6世紀の初頭、陶邑窯で言うMT-15型式の前後の築造時期である。

【K地域】

新豊院D-2号墳は、全長34mの前方後円墳である。主体部は、「礫粘土室」と言うべき特殊な構造を採用している。副葬品には三角縁神獣鏡、剣、銅鏃、鉄鏃がある。同一丘陵上には、全長33mの前方後円墳の1号墳と一辺12mの台状墓の3号墳がある。築造時期については、古墳時代の初頭の時期に3号墳が出現し、続いて2号墳が前期の中葉から後半にかけて造墓されたものと考ええる。1号墳については未調査のため、時期決定は難しいが2・3号墳に前後する時期である。

【L～O地域】

この地域は、今回の基礎資料の報告を行った袋井市域に属する。個々の古墳の状況については、別項を参照されたいが、太田川・原野谷川の形成した平野を中心に構成されている。

【P地域】

袋井市と掛川市の市境を南北に流れる原野谷川の中流域には、沖積平野が広がる。これを見下ろす、台地の東縁辺に古墳が点在する。

各和金塚古墳は、全長66mの前方後円墳である。墳丘上には、埴輪・葺石を有しており、主体部は河原石積みの竪穴式石室である。盗掘を受けており全容は不明であるが、剣、銚、三角板革綴短甲片、滑石製刀子、滑石製斧頭等が出土している。築造時期は、中期の前葉から中葉ごろが考えられる。

瓢塚古墳は、全長63mの前方後円墳である。墳丘上には葺石と埴輪が巡っている。主体部の詳細な状況は不明であるが、粘土槨であった可能性が高い。副葬品には獣形鏡、勾玉、管玉等があり、墳丘上からは複合口縁の壺形埴輪が検出されている。築造時期は、中期の前半から中葉が考えられ、先の各和金塚古墳との関係から、その後に続く古墳であると考ええる。

春林古墳は、先の二古墳に比べやや原野谷川を北上した位置に立地する。当墳は、径30mの円墳で、墳丘上には全面に葺石が施されている。主体部は粘土槨で、鉄剣、鉄針を納めている。築造時期は、中期中葉であると考えられる。春林古墳が縁辺に立地するのに対し、やや西方に入り、吉岡原台地上に吉岡大塚古墳は占地し、全長55mの帆立貝型を呈する。墳丘には埴輪を有するが、主体部の調査が行われておらず不明である。築造時期は、5世紀中葉ごろまでには成立していたと考えられる。

行人塚古墳は、全長44mの前方後円墳である。古墳に関する資料は全く無く、築造の時期は不明である。ただし、前述来の古墳の成立を考えると、当墳も相前後する時期に築造されたと思われる。

2. 立地から見た古墳の性格

遠江地域は、県内でも有数の古墳の存在する地域であり、特に、大型古墳が集中する。この一見、様々な立地する古墳も、その地域分け・時代分けを行っていく中で、その立場には様々な理由が存在することに気付く。

中塚氏は、山城盆地の古墳を中心にその立地を「視界」という点で考察されている^(註1)。また、三河・遠江地域を中心に同じく「視界」によって小林氏は検討され、交通路と古墳の選地の関係を検討されている^(註2)。

確かに、古墳は前期から後期にかけて、その立地を変えたとともに、その大きさ、高さを変え、現代人の目から見ても古墳は、尾根の先端部や段丘の縁辺など、見晴らしの良い場所に立地していることが感じられる。そうした中で、「視界」という観点から考察する試みは大きな意味があると言える。

今回は、そうした観点到導かれながら、対象とした古墳がその地に出現する意味を考察してみたいと思う。

先にも述べたように、遠江地域は天竜川という大河川を中心に、地域が形成され、その左右には台地が発展している。先の項で触れた古墳の地域分けは、立地の観点から分類したものである。10数箇所に分けた地域を、大別すれば、西から都田川流域・三方原台地東縁・磐田原台地・原野谷川流域の地域となる。これらは、基本的には、河川を中心に形成された段丘上に立地しているという共通点を持つ。

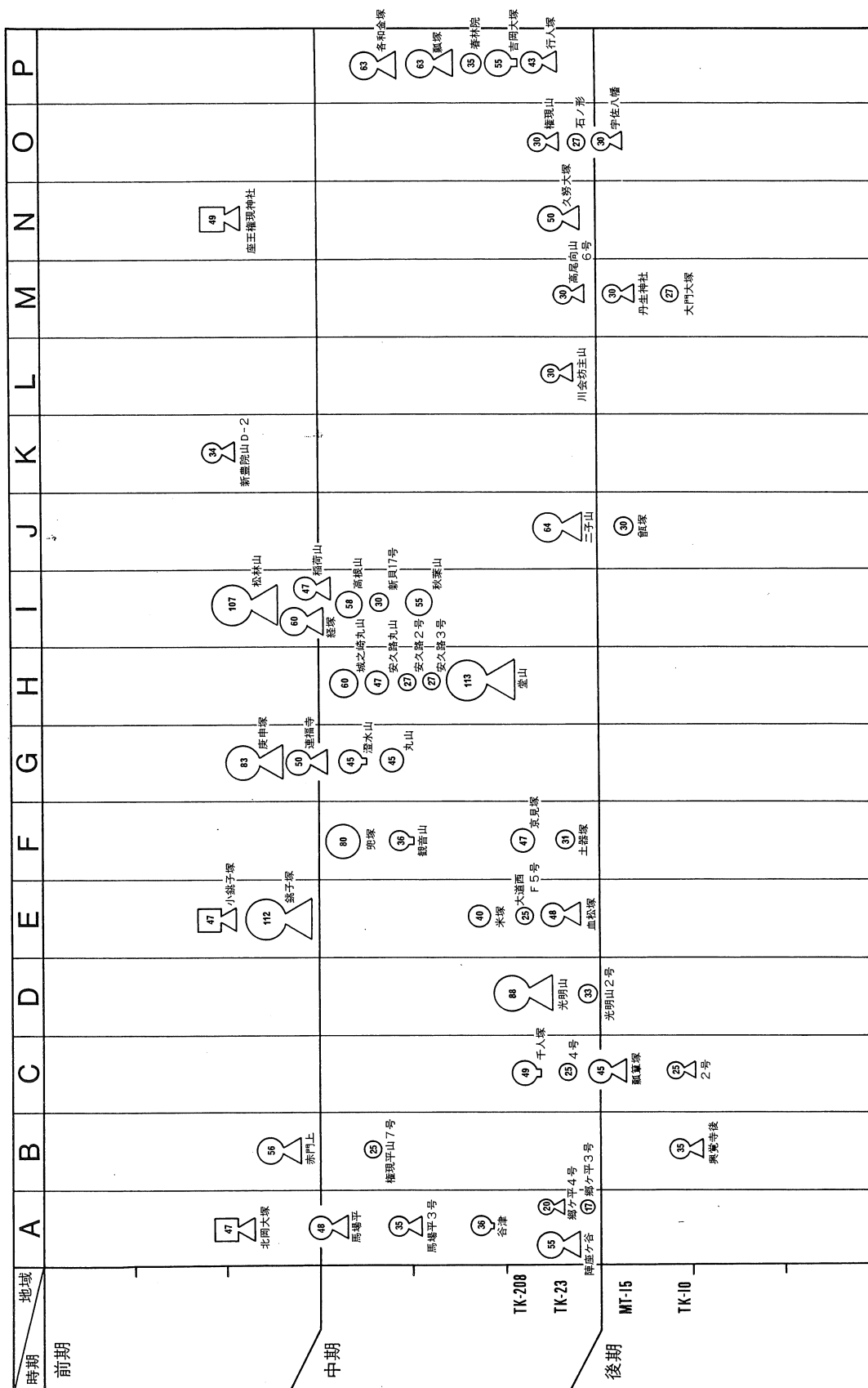
次に、この個々の地域の古墳を、時代を追いながら、比較してみることとする。

前期には、A・B・E・G・I・Kの地域に古墳が出現する。規模だけを比較すれば、E地域の銚子塚古墳とI地域の松林山古墳が100mを越え、群を抜いている。

中期の前葉には前期と同様の地域に加え、F・H・Oといった前代に大型の古墳の見られなかった地域にも新たに古墳が出現する。さらに、中葉になるとC・Dの地域にも古墳の出現が見られ、後葉にはほぼ対象域の全体に古墳が出現する。以上の概略を図にすると第43図のようになる。

前期の古墳の位置を見るとA地域の北岡大塚古墳、B地域の赤門上古墳、E地域の小銚子塚古墳、K地域の新豊院D-2号墳へと、ほぼ東西に直線的に並列する位置関係が観察される。北岡大塚の前面には、浜名湖が存在し、西から該地へ達する場合、浜名湖の北岸を交通路としていたことが考えられる。この交通路の妥当性については、愛知県側の豊橋市周辺に出現する北長尾8号墳・茶臼山1号墳・勝山1号墳・権現山1号墳の南方から県境の本坂峠を抜け、浜名湖の北岸を通る経路が小林氏によって想定されており、それに合致するものである^(註3)。(これを仮にルート1とする・第42図参照。)

前期の交通路としては他に磐田原台地の南端に位置するG・I地域の庚申塚古墳・連福寺古墳・松林山古墳・経塚古墳・稲荷山古墳を中心とした一群を考慮すれば、先のルート1の赤門上古墳から銚子塚古墳を経て磐田原台地を南下してくる交通路が想定される。(これをルート2とする。)



※ 数字は規模（／m）

第43図 遠江における主要古墳編年案

これとは別に、赤門上古墳付近から直接、磐田原台地の南端付近へ斜めに進入してくることも考えられる。(これをルート3とする。)

こうしてみると、前期には遠江地域の北部を東西に通過する交通路(ルート1)が主にあり、天竜川をほぼ境にして、磐田原台地を横断する交通路と南下する交通路(ルート2・3)が想定される。つまり、古墳の選地には、交通路との関係が深く関わっている。その要因については、小林氏が指摘されている「視覚」の問題がある。

古墳は基本的には、「大きく」造られ、人の目に触れやすい。つまり、造墓側にとっては、「見せる」という効果を狙っていることが解り、それを見る側に立てば、最もよく見えるところでなくてはならない。「見えるところ」それは、人の集まるところ、つまり、集落であり道である。主要な大型の古墳の立地する所を繋いでいくことによって、往時の主要な交通路の復元がある程度可能であると考えられる。

このような視点に立てば、前期の交通路を踏襲して中期の前葉に、F地域の兜塚古墳、G地域の澄水山古墳、H地域の城之崎丸山古墳、I地域の高根山古墳等、この時期には、前期に比べ、南側のルートが重要視されていたものと考えられる。

中期中葉になると、C地域に千人塚古墳が出現し、これに対峙するように対岸に京見塚古墳が出現する。南ルートが重要視されたことの裏付けは、H地域に100mを越える堂山古墳が築かれることで明らかであろう。なお、当該期に、天竜川の上流、D地域に初めて大型の古墳、光明山古墳が出現する。このことは、前期の主要ルートからさらに、やや北方を往来するルートが注目されたことによるのであろう。

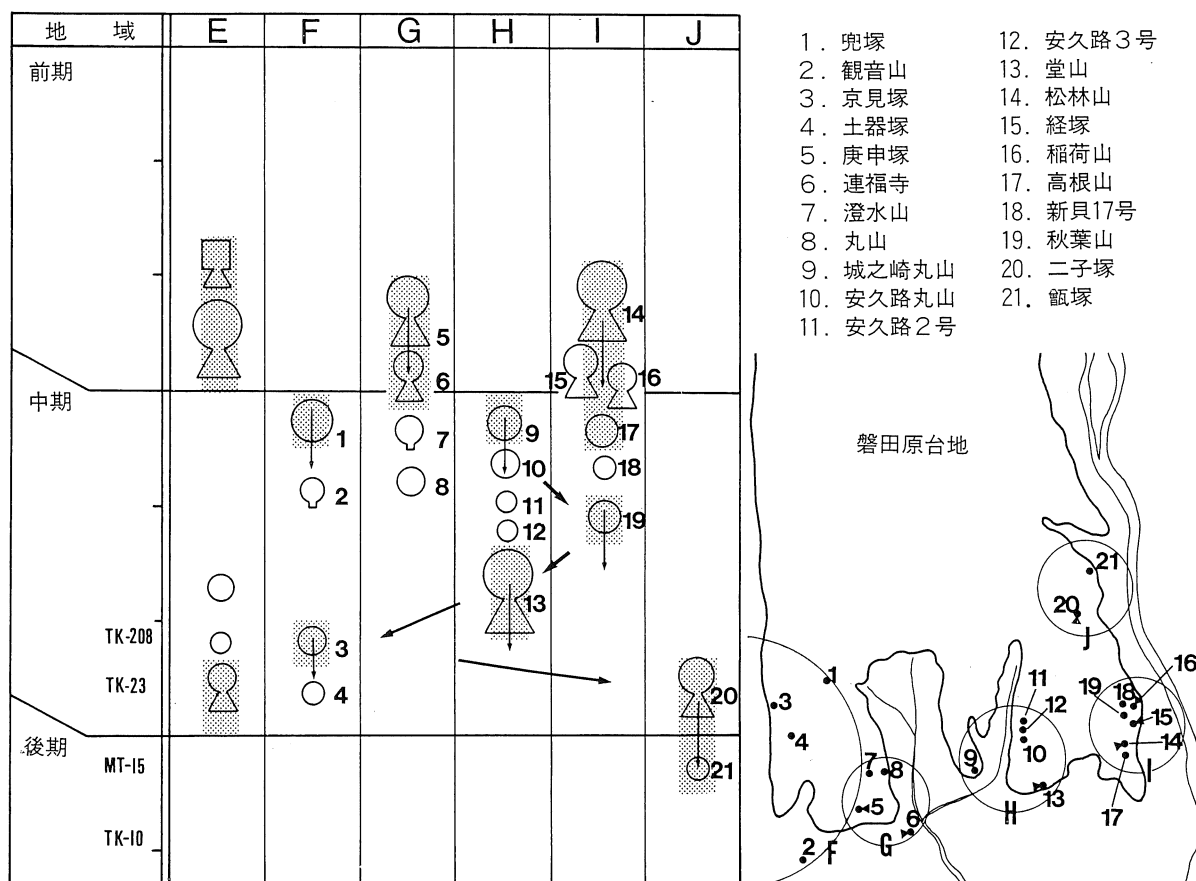
この中期中葉の時期は、それまでのルートとはやや異なるルートの出現がある。これらの基点となった千人塚古墳・光明山古墳・京見塚古墳の墳丘を巡る円筒埴輪に、「淡輪技法」という外来の技法が取り入れられていることは注意される。前段階からの基盤をもとに成立した古墳群とは別に、C・D地域での始まりである千人塚古墳や光明山古墳などは、新興の勢力の出現と捉えることができる。

また、中期の前葉から中葉にかけて原野谷川の流域のP地域に古墳が相次いで出現する。これらの古墳は、先に示したルート1の延長上を光明山古墳の南を抜け、現在の行政区の豊岡村に入り、袋井市域の川会・山梨・三沢・馬ヶ谷と進み、掛川市の和田岡へ通じる交通路(ルート4)が重要視されたことであろう。

こうした状況を踏まえ、中期後葉から後期の前葉の6世紀にかけては、J地域の二子塚古墳、甕塚古墳、M地域の大門大塚古墳、N地域の久努大塚古墳、O地域の石ノ形古墳等が出現し、その東西に並行する位置関係を追って行くと「東海道」の周辺に現れることがわかる。所謂「東海道」の整備は、奈良時代に行われたものと推測されるが、その前身とも言うべき古道が、5世紀の後半から6世紀の前葉には、既にある程度存在していたものとする。(ルート5)

K地域の川会坊主山古墳もほぼ前述の時期に出現しているが、先に述べたP地域の出現に関わったと考えられるルート4の線上あたり、この交通路の存在が確かめられる。さらに、B地域の興覚寺後古墳の出現をみれば、南方の交通路に対して、北方の交通路(ルート4)も依然として重要視されていたものとする。

以上のような様々な交通路の存在の裏付けとしては、ルート5の線上のG地域に奈良時代に遠江国分寺、O地域には坂尻遺跡が出現する。また、ルート1と2の基点ともなる位置のE地域に長者屋敷遺跡が、ルート4の線上には稲荷領家遺跡がそれぞれ出現しており、これらの遺跡がいずれも、地方官衙的性格が考えられており、早くから交通路としての認識があったことを予想させる。



第44図 磐田原台地の主要古墳の変遷

3. 磐田原台地の主要古墳の変遷

次に磐田原台地という地域を限って、その動向から首長墓のありかたを見てゆく。

まず、古墳時代前期に磐田原台地の南北に大型の古墳が出現する。E地域の銚子塚古墳とI地域の松林山古墳は、共に100mを越える規模の前方後円墳である。これに続く規模が、C地域の庚申塚古墳の83mがあり、ほぼE・G・Iの地域にまとまりが見られそうである。

中期の前半になると、B地域に新たに、径80mの円墳の兜塚古墳が出現し、H・I地域の城之崎丸山古墳と高根山古墳が60m前後で、これに続くと考えられる。

中葉にかけて、G地域の丸山古墳、H地域の安久路丸山古墳が40～50m、I地域の秋葉山古墳の55mへと続き、堂山古墳に至ってふたたび100mの規模を有するものが出現する。

中期の後葉には、F地域の京見塚古墳が47mの円墳として構築された後、J地域の二子塚古墳から甕塚古墳へと同時代で最も規模の大きな古墳の動きが観察できる。

以下のような動きを、少し別の角度から見ると、磐田原台地の中で7地域を設定したわけであるが、この個々の地域は、いわば小地域の「首長系譜」と捉えられる。そして、一定の時期で限って見た場合、どの系譜よりも大型の古墳を築き得た系譜上の古墳は、「盟主的首長」つまり、小地域の首長のさらに代表的な首長として捉えることができる。

こうした場合、磐田原台地には前期からの系譜として、E・G・Iの地域がある。この3つの系譜は、資料の制約もあろうが、Eの地域の系譜は前期の段階で途絶える。中期に移行してゆく系譜は、残るGとIの系譜となるが、この中期の初頭には、磐田原台地の南部のFとHの両地域に新たな古墳の出現が見られる。そして、中期の後半には、以上の系譜とは別の地のJ地域に新たな古墳が出現し、台地の南部においてはJ地域に大型の古墳は観察できない。

この大きな系譜の流れに、先に述べた「盟主的首長」の概念を取り入れた場合、前期の段階ではEとIという相互に並立するような中心勢力があり、Gがこれに続いていた。その後、中期の前葉には、Fに勢力の中心はあるが、HやIの地域にこれに続くものが存在している。中期の中葉には、H地域以外に大きな勢力は認められず、前段階からの並立もしくは、第二の勢力が複数存在するような状態から脱している。こうした状態は、その後、台地の南部に限ってみれば、FからJ地域への移動はあるものの、勢力の関係が、一系譜に集中してくる。

各系譜の中では、すべての系譜において、最低一度は「盟主的首長」と見做しうる、大型の古墳を構築しており、常に一系譜のみでこの「盟主的首長」が出現しているのではなく、各系譜の中から順次出現していると考えられる。

(註6)
中嶋氏の考察されているように、磐田原台地では、4世紀末から5世紀前半にかけて台地東南部と西南部（本論ではF GとH Iの地域）が優位に立ち、これらの地域は規模の上からピラミッド状の階層性が認められる。この個々の地域ごとのピラミッドの頂点に位置する古墳が、いわば小地域の首長とすれば、その小地域間を比較し、より大きな規模を有するものが、先に述べた「盟主」の位置を保つものと言える。ただし、この「盟主」の出現する系譜は単一では無く、台地南部だけでも大きくは3系統、小さくは5系統からなる。

以上の動きには、磐田原台地の地域の「盟主的首長」が、連立勢力の中から順次、選出され当該域をまとめていった姿が、想定される。そして、その発展過程は、前期の併存期を過ぎ、中期の前葉には除々に単一系譜への勢力集中を目指す、この段階には複数の次勢力が均衡する。続く中期になると単一勢力への集中が見られ、その現れが、100mを越える前方後円墳であることは象徴的である。さらに、中期の末葉には、それまでの系譜はほぼ消滅し、新たな地域に「盟主」の出現を見る。

墳形から見た場合、古墳時代の中期初頭からは、磐田原台地の地域では、前方後円墳から大型の円墳への移行があり、一つの画期であることがすでに指摘されているが、(註7)「盟主的首長」の変遷に照らし合わせた場合には、当該期は「盟主」は存在するが、多くの勢力が均衡関係にある時期であり、単一勢力への強大な集中力に欠ける、混沌とした時期であった。同時期に、原野谷川流域のP地域では規模では及ばないが、墳形としては前方後円墳を用いていることを考えると、墳形の違いによる階層差が存在するとすれば、(註8)外部からの規制が働いた時期として捉えることができる。

4. 川会坊主山古墳と大門大塚古墳出現の背景

第2章で触れたごとく、川会坊主山古墳の出現には、その前段階に原野谷川流域のP地域に成立する古墳が大きく関わってくるものと考えられる。つまり、遠江の北方を東西に通過するルート4の重要性が中期の前葉ごろから高まったために、各和金塚古墳以下の古墳の出現をみた。その後、この交通路は、D地域の光明山古墳の出現によって更に、注目されたと考える。これらを受け、天竜川から豊岡村を抜け、太田川の形成した平野を望む磐田原台地の東縁に立地する川会坊主山古墳は、交通の要衝に位置することが理解できる。

また、大門大塚古墳は、先に述べた交通路のルート5、つまり、後の「東海道」にほぼ合致する線上付近に出現する。更に、当墳は、やや時期は先行するが、甕塚古墳と太田川を隔てて対峙する位置関係にあり、両者は当該地域では、先進的な墓制である横穴式石室を採用している点も注意される。

このように、川会坊主山古墳・大門大塚古墳は、共に交通路の発展に伴いその重要度が増す中で、成立したものと捉えられる。特に、大門大塚古墳に関わる「東海道」は、その後、現代まで連綿と続く主要幹線であり、往時にも同じであったと考えられる。

この重要性については、一つの側面として、畿内政権と遠江を結ぶ交通路としての意味を持っていたであろうし、遠江を通過して、関東地域に続く交通路でもあった。甲冑から畿内政権の地方経営を探った川西氏に拠れば、5世紀後半から6世紀の前半頃に関東地方は、九州地方と並ぶ主要動員地となっていたことを指摘されている^(註9)。また、同じく甲冑の副葬状況から藤田氏は、中期後葉頃を境として、甲冑出土古墳の増加をもとに、「在地主導型武器・武具集中管理体制」として据えられている^(註10)。

つまり、遠江は畿内政権にとっては、関東を見据えた場合、その中間地帯としての大きな意味を持っていたものと考えられる。関東を政権下に置く場合には、遠江を通過せざるを得ない、地理的条件がある。また、遠江自身、東海地方にあっては、畿内政権に近い立場にあり、そうした中、より安定した交通路の確保も必要であったことであろう。

浜名湖・天竜川といった自然の目標物が存在し、畿内からの距離も後の資料からは、中国（5～10日以内）と捉えられ、近江に対する遠江として常に対比される環境にあった。自然環境に恵まれた温暖の地と共に、対関東との中間の位置にあることが、当地の重要性を高めたのであろう。

期しくも、このパイプラインとも言うべき「東海道」沿線に古墳が出現する意味合いは、この辺にあると言える。

（白澤 崇）

- 註 1. 中塚 良 1998 「山城盆地における古墳立地の検討」『物集女車塚』向日市教育委員会
2. 小林久彦 1992 「古墳の選地（1）」『研究紀要』創刊号 豊橋市美術博物館
小林久彦 1993 「古墳の選地（2）」『三河考古』5号
3. 小林久彦 1992 「古墳の選地（1）」『研究紀要』創刊号 豊橋市美術博物館
4. 都出比呂志 1989 「古墳時代の中央と地方」『古代史復元』6 講談社
5. 註4と同じ
6. 中嶋郁夫 1993 「松林山古墳とイワタの王」『磐田市史』通史編上巻
中嶋郁夫 1990 「東海 2 東部（静岡）」『古墳時代の研究』11
7. 註6と同じ
8. 註4と同じ
9. 川西宏幸 1986 「後期畿内政権論」『考古学雑誌』71巻2号
10. 藤田和尊 1988 「古墳時代における武器・武具保有形態の変遷」『檀原考古学研究論集』第8集

参 考 文 献

- 磐田市 1992 『磐田市史 史料編1 考古・古代・中世』
豊岡村 1993 『豊岡村史 史料編Ⅲ 考古・民俗』
引佐町 1992 『引佐町史』上巻
鈴木敏則 1990 「遠江の淡輪系円筒埴輪」『転機』3号

※今回、個々の遺物の詳細な検討は行っていない。上記の文献から、遺構・遺物の事実関係等、大いに参考とさせて頂いた。また、本論の執筆にあたって、その骨子の取りまとめの段階より、松井一明氏から多くのご教示を得た。記して感謝申し上げる。

第5章 お わ り に

袋井市は比較的古い時期から他の行政体より先駆けて専門職員を採用し、かつ精度の高い発掘調査を実施してきた経過があるものの、いくつかの重要な遺跡の報告書は未刊に終わっている。また、発掘調査はなされていないものの、袋井市域においては今回報告できたような座王権現神社古墳や川会坊主山古墳などといった、全国的に見ても重要な遺跡が数多く所在している。

このように重要と認知された遺跡で、なおかつ発掘調査がなされたにもかかわらずその成果が公表されていないことは、袋井市の歴史を専門的に研究することばかりでなく、ひいては袋井市民が袋井の地域史を知ることについて大きな障害となっていることはいうまでもないことであろう。こうした反省点をふまえ、今回袋井市域の古墳文化を知るうえで今まであまり注目されていない袋井の前方後円墳を始めとする首長墓に視点を充てて、基本資料の提示と袋井市史通史編刊行後の新視点を考えてみた。こうした基本資料を公表していく努力の積み重ねは、袋井市民への地域史の普及を図るうえで重要な仕事と考え本書を刊行した次第である。

つぎに本書で特に明らかとなった点をまとめ、おわりの言葉にかえたい。

- (1) 座王権現神社古墳が前方後方墳となる可能性がありしかも遠江最古の古墳になると思われた。この点については考察で検討したように、畿内の古墳出現期の前方後円（方）墳体制の階層性に関係しているらしいことが予測された。
- (2) 久努大塚古墳の発見に見られるように、今後未発見の首長墓が袋井市域に存在する可能性が出てきたことである。こうした未発見の首長墓が発見されるごとに、遠江での古墳時代研究に大きな影響をあたえることだろう。
- (3) 川会坊主山古墳・大門大塚古墳などの存在は、考察で検討したように遠江の首長墓との関連からみると首長墓が古墳時代の交通路の要衝の地に存在する傾向が認められ、しかも前・中期と中期末以降ではルートをかえることが判明し、そこに政治的な大きな画期を認めることができた。
- (4) 静岡県下でも有数の古墳群をかかえる磐田での首長墓の在り方と画期が、袋井市域での前方後円墳・首長墓の出現に大きく影響を与えていることが判明した。しかも、それは畿内と密接に係わり合っていることがわかった。すなわち、①前期末における磐田での大形円墳の出現と和田岡原の前方後円墳出現、②中期後半における磐田の二子塚古墳にみられる前方後円墳の小形化と袋井の石ノ形古墳のような直径30mにみえない首長墓の出現、③6世紀前半の磐田の甕塚古墳と袋井の大門大塚古墳などの直径30mの円墳で横穴式石室をもつ首長墓の出現などが、大きな画期としてあげられる。①は畿内の百舌古墳群・古市古墳群などの巨大古墳群の成立、②はたとえば埼玉県での稲荷山鉄剣・熊本県での江田船山古墳に見られるような雄略朝での地方権力の掌握、③東海地域の横穴式石室の導入と6世紀前半の継体朝成立後における地方権力の掌握といった視点で理解してみたいと思う。

以上の成果を本書から得ることができたのであるが、古墳そのものの年代が明らかとなっているものも少なく、袋井市のすべての首長墓の墳丘測量が終了しているわけではないため完璧な報告にはなっていない点などが指摘でき、これらの課題を積み残したままとなってしまった。これらの点について、墳丘測量や範囲確認調査を実施することにより、データの積み重ねが図られればさらに袋井市域における古墳時代史の解明に大きく寄与することであろう。そして、今後さらに袋井市における考古

資料の公開を進める作業を継続できれば望外の喜びである。

最後になりましたが、座王権現神社古墳と川会坊主山古墳の測量を夏の炎天下のなか快く承諾・実施していただいた関西大学考古学研究室の皆さんと米田文孝氏・網干善教先生、古墳の地主である方々の御協力の賜物で本書を刊行することができ、この場をかりて厚くお礼を申し上げます。

（編者・執筆者一同）

《付 記》

本文中の座王権現神社古墳と川会坊主山古墳を測量している際（1992年8月）、関西大学考古学研究室の学生3名と石ノ形古墳の見学に訪れた。その折り、古墳の墳頂部において大谷宏治君が偶然に鉄製品を採集した。これを持ち帰り検討した結果、短甲の押付板である可能性が出てきた。再び現地に帰り周辺を観察すると粘土に包まれて、短甲一領が埋納されていたものが地表面に露出したものと判断された。鉄製品からは、横矧板鋳留短甲であろうと推測されるが、従来石ノ形古墳に直接関わる遺物が不明であっただけに、大いに注目される発見である。

（白澤 崇）



第45図 袋井市域の首長古墳（番号は首長墓一覧と同じ）

袋井市域及び周辺地域の首長墓一覧表

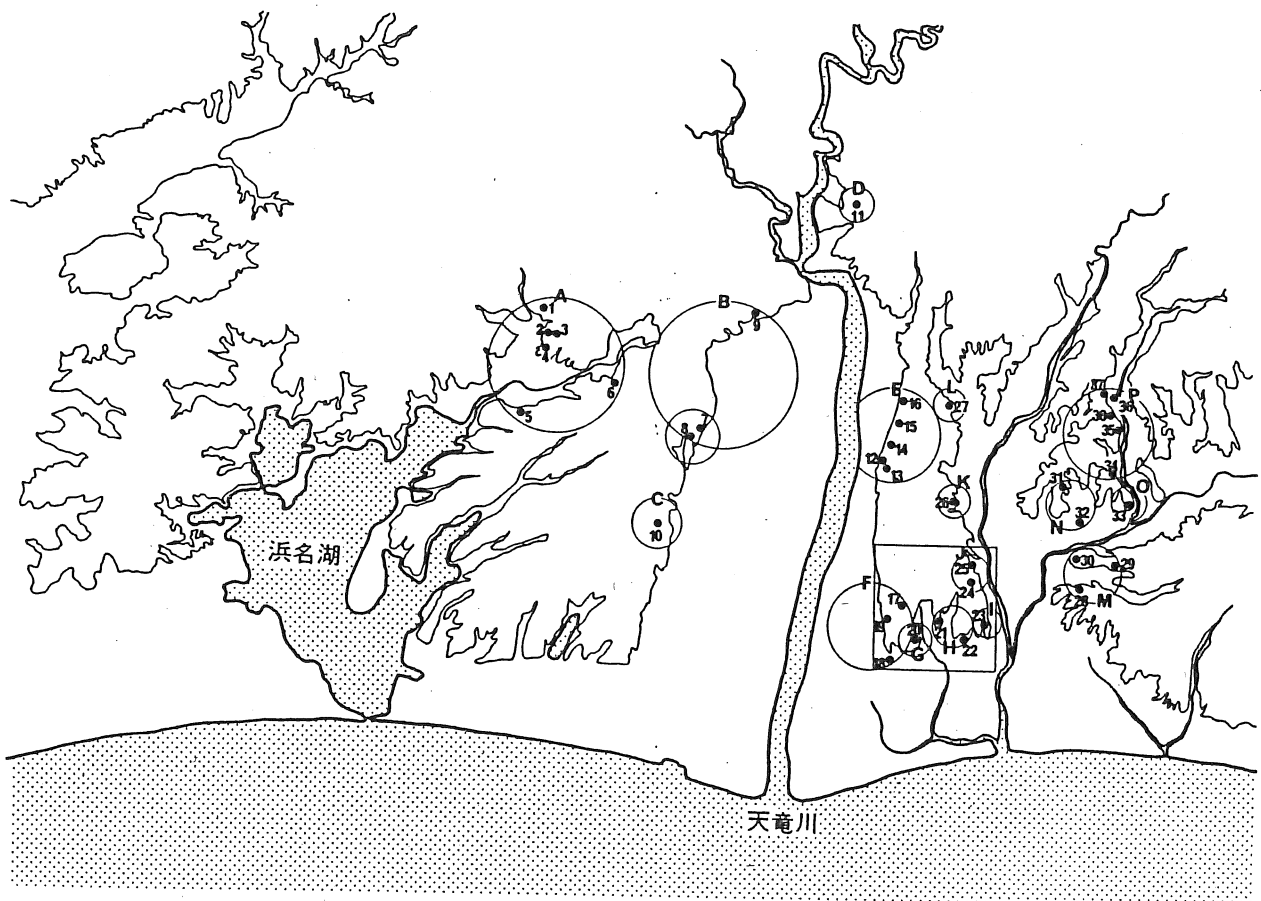
No.	名 称	所 在 地	墳 形	主 要 副 葬 品 他	時 期 (世紀)
1	座王権現神社	袋井市鷺巣上	前方後方墳	土師器	3 末～4 初
2	東山 6 号	袋井市久能東山	前方後円墳	銅鏡 玉類	5 後
3	東別所 1 号	袋井市鷺巣西ノ谷	前方後円墳	直刀	5 後
4	久努大塚	袋井市国本	前方後円墳		5 ?
5	石ノ形	袋井市国本北原川	円墳	埴輪 須恵器	5 後
6	宇佐八幡境内 1 号	袋井市国本岡山	前方後円墳		5 末～6 前
7	権現山	袋井市国本権現山	前方後円墳	埴輪 須恵器	5 後～5 末
8	狐塚	袋井市高尾掛の上	前方後円墳	須恵器	5 後
9	御所森	袋井市高尾三門	円墳	直刀 須恵器	6 中～後
10	大門大塚	袋井市高尾大門	円墳	銅鏡 馬具 須恵器	6 中
11	高尾向山 6 号	袋井市高尾向山	前方後円墳		5 後～末
12	長者平 A 2 号	袋井市豊沢北方	前方後円墳	須恵器	6 中
13	長者平 A 39 号	袋井市豊沢北方	前方後円墳	須恵器	6 中
14	川合坊主山	袋井市川合	前方後円墳	銅鏡 玉 埴輪	5 後
15	大当所	豊岡村大当所	前方後円墳		5 後?
16	大手内 11 号	豊岡村上神増	円墳	土師器	5 ?
17	血松塚	豊岡村上神増	前方後円墳	埴輪 土師器	5 後
18	新豊院山 D 2 号	磐田市向笠竹之内	前方後円墳	銅鏡 銅鏃 土師器	4 初
19	新豊院山 D 1 号	磐田市向笠竹之内	前方後方墳?		4 初～4 前?
20	甕塚	磐田市岩井西原	円墳	銅鏡 馬具 須恵器	6 中
21	二子塚	磐田市三ヶ野	前方後円墳	馬具 埴輪 須恵器	5 後
22	稲荷山古墳	磐田市新貝	前方後円墳		4 初?
23	秋葉山	磐田市新貝	円墳	土師器	4
24	経塚	磐田市新貝	前方後円墳	銅鏡	4 前?
25	松林山	磐田市新貝	前方後円墳	銅鏡 石釧 短甲 埴輪	4 後
26	高根山	磐田市鎌田	円墳	埴輪	4 末
27	安久路 2 号	磐田市西貝塚	円墳	短甲 冑 銅釧	5 前
28	安久路 3 号	磐田市西貝塚	円墳	銅鏡 短甲 埴輪	5 中
29	安久路丸山	磐田市西貝塚	円墳		5 前?
30	堂山	磐田市東貝塚	前方後円墳	銅鏡 鉄鏃 工具 埴輪	5 中
31	城之崎丸山	磐田市城之崎	円墳	埴輪	5 前
32	連福寺	磐田市中泉	前方後円墳	銅鏡	4
33	庚甲塚	磐田市中泉	前方後円墳	銅鏡 石釧 車輪石	4 後
34	丸山	磐田市中泉	円墳		5 前?
35	澄水山	磐田市中泉	前方後円墳	直刀? 埴輪	5 前
36	貫名地 A 3 号	浅羽町法示堂	前方後円墳		5 ?
37	貫名地 B 2 号	浅羽町貫名地	前方後円墳		5 ?
38	観音山	浅羽町浅羽五ヶ山	円墳		5 ?
39	五ヶ山 B 1 号	浅羽町浅名五ヶ山	円墳	耳環 鉄鏃 鉄剣	5 中
40	各和金塚	掛川市各和金塚	前方後円墳	短甲 石製模造品 埴輪	5 前
41	瓢塚	掛川市吉岡女高	前方後円墳	銅鏡 鉄鏃 埴輪	5 初
42	行人塚	掛川市吉岡宮脇	前方後円墳		5 ?
43	吉岡大塚	掛川市高田大塚	前方後円墳	埴輪	5 中
44	春林院	掛川市吉岡庵ノ下	円墳	鉄剣 埴輪 土師器	5 後
45	岡津奥ノ原	掛川市岡津奥ノ原	前方後円墳?	銅鏡	5 末～6 前
46	高代山 4 号	掛川市細谷西向	前方後円墳	鉄剣 鉄鉾 鉄鏃	5 後

訂正表

『袋井の前方後円墳』 袋井市教育委員会 1993

訂正箇所： 57頁 第42図上段の番号に古墳の名称が記されておきませんので
以下のように追加・訂正下さい。

1 墳	20 墳	寺・澄水山・丸山古墳
2 墳	21 墳	連山古墳
3 墳	22 墳	福古墳
4 墳	23 墳	群墳
5 墳	24 墳	墓群
6 墳	25 墳	墳群
7 墳	26 墳	墳群
8 墳	27 墳	墳群
9 墳	28 墳	墳群
10 墳	29 墳	墳群
11 墳	30 墳	墳群
12 墳	31 墳	墳群
13 墳	32 墳	墳群
14 墳	33 墳	墳群
15 墳	34 墳	墳群
16 墳	35 墳	墳群
17 墳	36 墳	墳群
18 墳	37 墳	墳群
19 墳	38 墳	墳群





袋井市考古資料集第1集

袋井の前方後円墳

—袋井の首長墓を考える—

1993年3月25日

発行
編集

袋井市教育委員会

〒437 袋井市新屋1-1-1

☎0538-43-2111

印刷

株式会社 開 明 堂

浜松市中沢町1-1